

に信順して如法に修行すべし。

【和解】 特殊の慈悲と哀愍を以て當經所説の念佛をば、末法萬年の後までも留めんことを宣言し給ふた釋迦牟尼佛は、更に改めて彌勒菩薩に語給ひて、如來の興世とて佛の世に出ませし時には値ひ難く、亦た眼前に佛身を見るのも難い、扱ては諸佛の經道とて假令ひ現在の佛に値はずとも、其遺教を聞くことも亦難い、それをば得難く聞難くと云ふので、菩薩の勝法諸波羅密とは、其の教法の修行にて、それを行す事も難ければ、善知識とて佛教を説く人に遇うて、其教の如くに行することも亦た難いのである、是に依つて此の無量壽經を聞くことを得たる人でも、信樂受持とて念佛を信行するのは難の中の難とも謂ふべく此難に過ぎたるは無い、けれども其れを信行せずば何の甲斐無き事なれば、我法は是の如く作すと我れ釋迦牟尼佛が世に出たるは、唯だ此の念佛を説かんが爲めに、是の如く説き是の如く教ふと其の念佛を信行せんとて、上來の如くに説教したので有るから、之を聞く者は滅後の衆生に至るまでも、皆我が佛意に信順して如法の修行を爲すべしと是れこそ當經所説の會座に於ける、最後の勸誡にして亦た最後の完結である、されば難中の難と云ひ乍らも斯く叮重にして懇切なる勸誡を聞く者ならば、能く此の經文の所説を信じて三毒五惡を慎みつゝ爾も念佛を信行して極樂往生を期してこそ、彌陀大悲の本願に順する

のみならず、亦此の釋迦牟尼佛の出世の本懐にも副ふのである。

爾時世尊説此經法無量衆生皆發無上正覺之心萬二千那由他人得清淨法眼二十二億諸天人得阿那含果八十萬比丘漏盡意解四十億菩薩得不退轉以弘誓功德而自莊嚴於將來世當成正覺

【訓讀】 爾時世尊此の經法を説たまふに、無量の衆生皆な無上正覺の心を發し、萬二千那由他の人は清淨法眼を得、二十二億の諸天人は阿那含果を得、八十萬の比丘は漏盡意解し、四十億の菩薩は不退轉を得て、弘誓の功德を以て自ら莊嚴し、將來の世に於て當に正覺を成すべし。

【句義】 清淨法眼とは羅漢と稱する法位に四果の階級有る中の初果の證を得る義にて、那阿含果とは同三果にして、漏盡意解とは同四果の證を云ふ。

【和解】 さて世尊が此の無量壽經を説き給ふに因つて、無量の衆生は無上正覺の心と

て、阿彌陀如來の發心修行や極樂淨土の有様や念佛往生の事を聞きて、吾亦た彼國に生れて彼佛の如くならんとの心を發した、亦た萬二千那由他とある多數の人は清淨法眼を、十二億の諸天人民は阿那含果を、八十萬の比丘は漏盡意解すと、各證果を得たのみならず、四十億の菩薩衆は不退轉に至ることを得て、弘誓の功德を以て莊嚴すと、愈衆生を濟度せんとする大慈悲心を發揮されたので、當に正覺を成すべしと將來の世に於て當に佛と成らるゝのである。

爾時三千大千世界六種震動大光普照十方國土百千音樂自然作無量妙華紛々而降

【訓讀】 爾時三千大千世界六種に震動し、大光普く十方の國土を照し、百千の音樂自然にして作し、無量の妙華紛々として降る。

【和解】 此の無量壽經を説き給ふに因つては、前段の如く菩薩聲聞多數の衆生が其の法益を得たのみならず、爾時三千大千世界も感動して六種の震動を爲し、佛の光明普く十方の國土を照らし給へば、微妙の音樂自然に聞えて無量の妙華は紛々として降るのであつた佛説經已彌勒菩薩及十方來諸菩薩衆長老阿難諸大聲聞

一切大衆聞佛所説靡不歡喜

【訓讀】 佛經を説たまふこと已りて、彌勒菩薩及び十方より來れる諸の菩薩衆長老阿難諸の大聲聞一切の大衆、佛の所説を聞て歡喜せずといふこと靡りき。

【和解】 斯くして此の經典の所説を已り給ふたので有つたが、其時彌勒菩薩を初めとして十方世界より來會せる諸の菩薩衆、亦た長老たる阿難尊者と其他の聲聞及び一切の大衆とて、此の會座に在りし一切の大衆は、皆悉く佛の説き給ふ所を聞きて、各大利を得たのであるから、歡喜せずといふこと靡りきと、何れもそれを歡喜で法悦せざる者は無かつた。

觸光柔軟

祝部 成賢

身をさらぬ日吉の影を光りにて

此世よりこそ闇は晴れぬれ

特留此經

皇太后宮太夫俊成

法の皆な消なん後のすゑまでも

彌陀の教ゑそ尙ほ残るへき

佛說觀無量壽經和解

正行と言ふは専ら往生經に依て、行を行する者は
を正行と名く、何者か是なる一心に専ら此の觀經
彌陀經無量壽經を讀誦す、是を名けて正と爲す、
又此の正の中に就て復た二種有り、一には一心に
専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥時節の久近を
問はず、念々に捨ざる者は是を正定の業と名く彼の
佛の願に順するが故に。『散善義』

佛說觀無量壽經和解

佛說觀無量壽經

題號の由
來

翻譯の年
代と譯者
の傳記

【和解】此の經典の題號にて、佛說とは釋迦牟尼佛の直説なりとの義にして、觀無量壽經とは此の經典の結末に佛の自題とて、釋迦牟尼佛が自ら命名し給ふて、此經をば觀極樂國土無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩と名くと在るのを略されたので、觀極樂國土とは極樂淨土の依正莊嚴を思惟觀察する義にて、此の經典の中には其の思惟觀察に就て、定善の十三觀散善の三觀、併せて十六觀といふのが、説かれて有るのを意味するのである。

宋元嘉中曷良耶舍譯

【和解】此の經典を翻譯せられた年代と譯者の人名にて、宋元嘉中とは支那宋朝に於ける元嘉年中との意味で、元嘉は宋の第三主文帝時代の年號にして、我朝の允恭天皇の時に當り、曷良耶舍は譯者の人名である。譯者曷良耶舍は印度の人にて博く三藏に通じ、宋朝元嘉の初め遠く流沙を涉つて洛に入るに、文帝其の學徳の高きを歎異し深く崇敬を加えて

三七〇
鐘山の道林寺に居らしむ、即ち其寺に於て此の觀無量壽經と藥王藥上の二經を翻譯し、元嘉十九年江隆を経て岷蜀に遊び、處々に於て道を弘むるに學徒各群を爲せり、後再び、江陵に還りて卒す、壽六十歳なりしと云ふ。

如是我聞一時佛在王舍城耆闍崛山中與大比丘衆千二百五十人俱菩薩三萬二千文殊師子法王子而爲上首

【訓讀】是の如きを我聞き、一時、佛王舍城の耆闍崛山の中に在して、大比丘衆千二百五十人と俱りき、菩薩三萬二千あり、文殊師利法王子をもつて上首と爲す。

【和解】是の如きを我聞きとは、此の經典の傳持者なる阿難尊者の言にして、王舍城とは摩訶陀國の都城にて、耆闍崛山は其の東北に當る靈鷲山なることは、無量壽經の和解の如くで、一時釋迦牟尼佛其の王舍城の耆闍崛山に於て、一千二百五十人の大比丘衆及び三萬二千の菩薩衆と俱に在したが、此の會坐に在つては文殊師利法王子を以て上首とするので、文殊師利とは文殊菩薩にて、法王子とは法王の子といふ意味で、繼紹を義とするので、佛を法王として其法を繼紹すべき菩薩を法王子と稱し、何れの菩薩も法王子なれども特

に文殊菩薩を其の上首とするのである。

爾時王舍大城有一太子名阿闍世隨順調達惡友之教收執父王頻婆娑羅幽閉置於七重室內制諸群臣一不得往

【訓讀】爾時王舍大城に一の太子有り、阿闍世と名く、調達惡友の教に隨順て、父王頻婆娑羅を收執幽閉て七重の室内に置き、諸の群臣を制して一も往つことを得ざらしめたり。

【和解】爾時釋迦牟尼佛の在せる耆闍崛山より遠からぬ、王舍の大城に太子が有つた、それをば阿闍世と名けるので、調達惡友とて調達と云へる惡友の教唆に隨ひ、父頻婆娑羅王を七重の室内へと收執嚴しく之を監禁すると俱に群臣の通路を斷ち、一切の飲食物を與へずして、自然の飢死を俟ちつゝあつた。

頻婆娑羅王は摩訶陀國の國王にして、太子阿闍世は折指太子とも稱し、調達惡友とは調達多を略した所謂の提婆達多で、斛飯王の長子にして阿難尊者の兄に當り、釋迦牟尼佛とは從兄弟同士である、けれども邪見無信にして、常に佛の教化を妨げ、五百餘人の弟子を有して、靈鷲山の北方象頭山に住みたりと云ふ、初め頻婆娑羅王太子無きことを憂ひ

て、あらゆる神に禱つたが更に其効験が無い、然るに一人の相師があつて、某山中に住む仙人こそ王と過去世の因縁あつて、今より三年以後には命終して、王の太子と更生すべしと告たので、頻婆娑羅王是を聽きて早速其の仙人を召し寄やうとしたが、頑固な仙人で命に應せぬ、けれども王としては一日も早く兒が欲しいので、遂に其仙人を殺させたのであつたが、それと同時に王妃韋提希夫人が懷妊した、すると亦た一人の相師があつて、懷妊されたは太子である、されども其兒は惡子にして、成長せられた後に於ては大王を殺害すべき前兆があると云ふたので、頓て太子の産るゝや否や高樓より投棄て殺さうとしたのであつた、然るに幸か將た不幸か、投棄てられても僅かに一指を折つたばかりで生命に何の別條無く成長したのが阿闍世太子で、其爲め折指の綽名を以て呼ばるのである、惡友調達提婆達多是此の因縁を語りて太子を教唆し、父王を殺すは當然にて寧ろ復仇である如くに勧めたので、太子も遂に其教唆に隨順して、斯くは父王を收執したのである。

韋提希夫人飲食を大王に供す

國大夫人名韋提希恭敬大王澡浴清淨以酥密和麩用塗其身諸瓔珞中盛蒲桃漿密以上王

【訓讀】 國の大夫人を韋提希と名く、大王を恭敬し澡浴清淨にし

て酥密を以て麩に和し用て其身に塗り、諸の瓔珞の中に蒲桃の漿を盛て、密に以て王に上つる。

【句義】 酥密は牛羊の乳と蜂蜜にて精製せる滋養の食品、麩とは乾飯を粉にせし如きものにて、蒲桃の漿とは蒲萄を以て製せる飲料を云ふ。

【和解】 其國の大夫人なる王妃韋提希は、如何にもして大王の飢死を救はんとて、先づ澡浴して身を清淨め、酥密を以て麩に和したる滋養の食料を其身に塗り、蒲桃の漿を瓔珞の中に盛て、毎日密かに大王の監禁室に通つ、此の飲食を上つらるのである。

爾時大王食麩飲漿求水漱口漱口畢已合掌恭敬向耆闍崛山遙禮世尊而作是言大目犍連是吾親友願興慈悲授我八戒

【訓讀】 爾時大王、麩を食し漿を飯み水を求めて口を漱ぎ、口を漱ぎ畢已て合掌恭敬し耆闍崛山に向ひて遙かに世尊を禮したてまつりて是言を作く、大目犍連は是吾が親友なり、願くは慈悲を興して

父王の受戒聞法

我に八戒を授けしめたまへこ。

【和解】 七重の室内に監禁せられた大王は、非常の出来事に興奮して忿怒もせられた煩悶もされたのであつたが、韋提希夫人の計らひに因つて爾も滋養の飲食物を得たので茲に元氣を回復して、水を求めて口を漱ぎ着聞嶺山の方に向ひ、遙に世尊釋迦牟尼佛を、禮し奉りて、佛弟子中の目連尊者は吾が親友である、願はくは佛の慈悲を以て其の親友なる目連尊者をして、我に八戒を授けしめ給へと、大王は元より佛教の信者であるので、斯かる非常の出来事の中に在つても自らそれを解決して、煩悶を轉じて法悦を得べく、扱こそ斯くは願はれたので、八戒とは無量壽經の和解の如く在家の人の受くべき、八齋戒である時目健連如鷹隼飛疾至王所日々如是授王八戒世尊亦遣尊者富樓那爲王說法如是時間經三七日王食麩密得聞法故顔色和悅

【訓讀】 時に目健連、鷹隼の飛が如く疾く王所に至て、日々是の如く王に八戒を授く、世尊亦た尊者富樓那を遣して、王の爲に法を説しむ、是くの如き時間に三七日を経たり、王麩密を食し法を聞く

ここを得るが故に、顔色和悦せり。

【和解】 斯く頻婆娑羅王の請願の有るや否や、目連尊者は直に神通を以て、鷹隼の飛ぶが如くに疾くも王の室内に到りて、日々に入齋戒を授くれば、富樓那尊者は亦特に世尊の命を受けて、是亦た日々に說法慰安する程に、早くも三七二十一日を経たのである、けれども大王既に麩密を食して飢死を免れ、今亦た問法受戒の徳に因つて、精神的の法悦を得たので、茲に驚怖も煩悶も夢の如くに打忘れて、平素にも増て顔色和悦せりと、最と和悦しき顔色を爲しつゝ在つた。

時阿闍世問守門者父王今者猶存在耶時守門人白言大王國大夫人身塗麩密瓔珞盛漿持用上王沙門目連及富樓那從空而來爲王說法不可禁制

【訓讀】 時に阿闍世、守門の者に問く、父王今者猶ほ存在せり耶時に守門の人白して言く、大王國の大夫人は身に麩密を塗り、瓔珞に漿を盛て持用て王に上つり、沙門目連及び富樓那は空より來りて

王の爲に説法す禁制すべからずと。

【和解】 此處に守門の者の言として大王と有るのは阿闍世にて、當時既に父王を收執して飢死を計り、自ら代つて國王となつたので、斯く尊稱さるゝのである、さても阿闍世は父大王を收執てより既に三七日を経たので有るから、最早や飢死せし頃なるべしとて、自ら七重の室外に至り其の守衛の者に對して、父王今猶ほ存在せりや、想ふに絶命せられたで有らうと問ふたのである、すると答辨は案外で、否父王は健在にて爾も顔色和悦し給へり今ま其理由を物語らば、韋提希夫人は日々密に飲食を上つられ、富樓那目連兩人の沙門佛弟子は、空より來りて説法すること亦た毎日なるに因つて、父王の顔色和悦して斯く何日までも健在し給ふのである、斯かる此場の現狀なれども國夫人は云ふ迄も無く、兩人の沙門佛弟子に對しても、小官守衛の如き者にては、抑留んとしても力に及ばず、禁制すること能はざる處である。

阿闍世の
暴惡母を
殺さんぞ
す

時阿闍世聞此語已怒其母曰我母是賊與賊爲伴沙門惡人
幻惑咒術令此惡王多日不死即執利劍欲害其母

【訓讀】 時に阿闍世、此語を聞已りて其母を怒りて曰く、我母は

是れ賊なり賊に伴なればなり、沙門は惡人なり、幻惑咒術をもつて
此の惡王をして多日に死せざらしむと、即ち利劍を執て其母を害せ
んと欲す。

【和解】 其母とは韋提希夫人にして、其時阿闍世は守衛の答を聞くや否や、忽ち母を罵りて我母は賊である、父と母とは曾て我をば殺さうとしたので有るから是れ賊にて、今亦た賊なる父に伴ふてそれを助けんとする母は賊である、沙門の佛弟子兩人は斯く幻惑呪術を以て、此の惡王を多日の間死せざらしめたは惡人であると、韋提希夫人を連來らせ利劍を執つて殺害せんとしたので有つた。

時有一臣名曰月光聰明多智及與耆婆爲王作禮白言大王
臣聞毘陀論經說劫初以來有諸惡王貪國位故殺害其父一
萬八千未曾聞有無道害母王今爲此殺逆之事汗利利種臣
不忍聞是栴陀羅不宜住此時二大臣說此語竟以手按劍卻
行而退

月光及び
耆婆の諫
言

【訓讀】時に一りの臣有り、名て月光と曰ひ聰明多智なり、及び耆婆と與に王の爲に禮を作て白て言く、大王臣毘陀論經の説を聞くに劫初より以來諸の惡王有り、國位を貪するが故に其父を殺害するここ一萬八千なり、未だ曾て無道にして母を害するここ有ここを聞ず、王今ま此の殺逆の事を爲さば刹利種を汗さん、臣聞くに忍びず是れ梅陀羅なり、宜く此に住せしむべからず、時に二大臣此語を説き竟り、手を以て劍を按じ卻行して退く。

【句義】毘陀論經は韋陀とも稱して、印度の國事を記載せる史書にて、刹利種とは印度の種族に四種の階級有る中の最上なる王族を云ひ、梅陀羅は最下の階級賤民を云ふ。

【和解】其時月光と名けられた聰明多智なる臣下が有つて、今一人の耆婆といふ者と俱に、此の暴惡を止むべく王を諫めて言ふやうには、臣等毘陀論經の説を聞くに、劫初より以來惡王有つて、國位を奪はんとて父を害せるは一萬八千有りと云へり、されども未だ無道にして母を殺せる者を聞かず、然るに王今ま此の殺逆の事を爲し給は、是れ刹利種を汚し給ふので、王族として爲すべからざる事なれば、聞くに忍びぬ惡聲は忽ち國中に流傳

すべく、若其れ之を止まり給はず敢て暴惡を爲し遂げ給は、最早や王族ならずして是れ梅陀羅の賤民なり、然る時には國民としても豈夫王位に住べからずと、苦言を陳べた二大臣は、佩劍に手を掛け身を卻行て、屹然覺悟の態度を見せた。

時阿闍世驚怖惶懼告耆婆言汝不爲我耶耆婆自言大王慎莫害母王聞此語懺悔求救即便捨劍止不害母敕語內官閉置深宮不令復出

【訓讀】時に阿闍世驚怖惶懼て、耆婆に告て言く汝我が爲にせず耶と、耆婆白て言く大王慎みて母を害するここ莫れ、王此語を聞き懺悔して救を求め、即便ち劍を捨て止めて母を害せず、內官に敕語して深宮に閉置し復た出さしめず。

【和解】如何なる阿闍世も斯く二大臣が極諫して、是れ梅陀羅の賤民なりとか、豈夫王位に住べからずとか云ふのを聞きては、さすがに驚怖き惶懼たので、耆婆に對して汝我が爲にせずやとて、此の處置如何に爲すべきかを問ふたのである、耆婆は臣下と云ひ乍ら實は頻婆娑羅王の妾腹の子にして、阿闍世の爲めには異腹の兄に當る、けれども嫡子に義理

韋提希夫人阿難目連の來教を請ふ

を立て自ら王族たることを辭して臣籍に下り、生れながらに得た處の醫術を以て仕へて居るので、豫て阿闍世も重きを置き且つは親しき間柄で有るから、聰明多智なる大臣月光よりも先づ此の耆婆に問ふたのである、其時耆婆の言すには大王慎みて母を害すること莫れど、其暴惡を諫止めたので、道の阿闍世も聊か後悔懺悔の色を見せ劍を納めて殺害を止まつた、けれども内官に命令して、奥殿深き處に閉置め、復た出さしめずとて父王同様に監禁したのである。

三八〇

時韋提希被幽閉已愁憂憔悴遙向耆闍崛山爲佛作禮而作是言如來世尊在昔之時恒遣阿難來慰問我我今愁憂世尊威重無由得見願遣目連尊者阿難與我相見作是語已悲泣雨淚遙向佛禮

【訓讀】時に韋提希幽閉せられ已つて愁憂憔悴し、遙に耆闍崛山に向ひ佛の爲に禮を作て是言を作く、如來世尊在昔の時には恒に阿難を遣して、來りて我を慰問したまひき、我今も愁憂す世尊は威重く見たてまつることを得に由無し、願くは目連尊者阿難を遣して

我ために相見せしめたまへ、是語を作已て悲泣して涙を雨らし、遙に佛に向つて禮したてまつる。

【和解】 監禁せられた韋提希夫人は自身の不幸を歎くと共に、且つは大王の安否も心元無いので、愁憂憔悴とて深き愁憂に沈んだので有つたが、夫人も亦た信仰の人であるから愁憂を轉じて法悦を求むべく、耆闍崛山の方に向ひ佛を禮して請はるゝには、在昔の當時には恒に阿難尊者を遣はしめられ、來て我を慰問たまふたが、我今も斯かる愁憂に遇ひぬ此際頼り奉るは唯だ佛世尊のみなれば、其來臨を請ひたけれども、世尊は威重くして餘りに恐れ多ければ、目連尊者と阿難尊者を遣はされて、相見ることを聽許せ給へと涙乍らに念願された。

未舉頭頃爾時世尊在耆闍崛山知韋提希心之所念即敕大目健連及以阿難從空而來佛從耆闍崛山沒於王宮出

【訓讀】未だ頭を擧ざる頃に、爾時世尊耆闍崛山に在して、韋提希の心の所念を知めし、即ち大目健連及び阿難に敕して空より來

釋迦牟尼佛の來化

三八一

らしめ、佛は耆闍崛山より没して王宮に出たまふ。

【和解】 其時世尊釋迦牟尼佛は、耆闍崛山に在して韋提希夫人の所念を知見たので、請ひの如くに目連阿難の二尊者に命じて王宮へと遣はされた、然るに夫人の所念として佛の來臨を請ひたきは云ふ迄も無き處で、爾も所念を機會として、今や出世の本懐なる淨土教を、説く可き時節の到來せるを察せられたので、釋迦牟尼佛も亦直に彼の深宮へと現じ給ふた、其間の時間を云へば實に少時の程にして、韋提希夫人が念願しつゝ、未だ頭を擧げざる間であつたのである。

時韋提希禮已擧頭見世尊釋迦牟尼佛身紫金色坐百寶蓮華目連侍左阿難在右釋梵護世諸天在虛空中普雨天華持用供養

【訓讀】 時に韋提希禮し已て頭を擧るに、世尊釋迦牟尼佛の身は紫金色にして百寶の蓮華に坐し、目連は左に侍し阿難は右に在り、釋梵護世の諸天は虛空の中に在て普く天華を雨らし、持用て供養するを見たてまつる。

韋提希夫人救ひの道を求む

【和解】 其時韋提希念じ已りて頭を擧ぐれば、思ひ掛け無き釋迦牟尼佛の來臨で、佛身は紫金色にして百寶の蓮華に坐し給ひ、目連尊者は左に侍べり阿難尊者は右に在つて、釋梵護世の諸天とて梵天帝釋四天王其他の天衆は虛空の中より、普く天華を雨ふらして供養するを見奉つた。

時韋提希見佛世尊自絕瓔珞舉身投地號泣向佛白言世尊我宿何罪生此惡子世尊復有何等因緣與提婆達多共爲眷屬唯願世尊爲我廣說無憂惱處我當往生不樂閻浮提濁惡世也

【訓讀】 時に韋提希、佛世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち身を擧て地に投じ、號泣して佛に白して言く、世尊我宿何の罪あつて此の惡子を生るや、世尊も復た何等の因緣有て、提婆達多と共に眷屬と爲たまふや、唯願くは世尊我が爲に廣く憂惱無き處を説きたまへ、我當に往生すべし、閻浮提の濁惡世を樂はず。

【和解】 思ひ掛け無き釋迦牟尼佛の來臨を見奉つた韋提希夫人は、其の歡びと且つは亦た我身の愁憂憔悴して、取亂したる姿を恥て、自ら瓔珞を絶ちて擧身投地し、悲喜の涙に號泣しつゝ、佛に白して言すには、吾身宿世に何の罪有つて阿闍世の如き子を生みしか、扱は世尊も何等の因縁在して、提婆達多の如き惡人と從兄弟同士の眷屬と爲り給ふたか、唯だ願くは世尊我が爲めに斯かる憂惱の無き處を説き給へ、我身は其處に往生を願ふべく最早や浮世は厭果たれば、此の閻浮提の濁惡世を樂はずと、閻浮提とは須彌山を中心として其四方に四大洲有とてある中で、南方なるを閻浮提洲と稱し、其洲中に印度及び其他の各國有りとするので、他の三洲に比ぶれば此の一洲には濁惡多しとの意味を以て、特に閻浮提の濁惡世といふのである。

此濁惡處地獄餓鬼畜生盈滿多不善聚願我未來不聞惡聲不見惡人今向世尊五體投地求哀懺悔唯願佛日教我觀於清淨業處

【訓讀】 此濁惡の處には、地獄餓鬼畜生盈滿て不善聚多し、願くは未來に惡聲を聞かず惡人を見ざらんことを、今世尊に向ひて五體

を地に投げ、哀を求めて懺悔したてまつる、唯願くは佛日我をして清淨業の處を觀しめたまへ。

【和解】 此の閻浮提の濁惡處には、地獄も餓鬼も畜生も盈滿て、何れを見ても不善の聚團のみ多きは、我身の既に體驗して泌々感じた處である、是に依つて願ふ處は未來世に於て、惡聲を聞かず亦た惡人をも見ざらんことをと、五體を地に投げ哀を求めて懺悔すこと佛の救済を求めつゝ、唯願はくは佛日我をして、清淨業の處を觀せしめ給へと、佛の慈悲に絶つたのである。佛日とは佛の智慧の輝きを日光に喩たので、清淨業の處とは清淨なる業因を以て感ずる處といふ意義にて、即ち淨土の意味である、されば佛日智慧の光を以て吾身の無明の暗を照し、當に往生すべき處の淨土を我に觀せし給へと、茲に閻浮の濁世を厭ひて清淨業處を欣求られた、此の發心の緣に因つて淨土の門は開けるのである。

爾時世尊放眉間光其光金色徧照十方無量世界還住佛頂化爲金臺如須彌山十方諸佛淨妙國土皆於中現或有國土七寶合成復有國土純是蓮華復有國土如自在天宮復有國土如玻璃鏡十方國土皆於中現有如是等無量諸佛國土嚴

世尊の放
光金臺を
現す

顯可觀令韋提希見

【訓讀】爾時世尊、眉間の光を放ちたまふ、其光金色にして徧く十方無量の世界を照し、還て佛頂に住まりて化して金臺を爲る須彌山の如し、十方の諸佛淨妙の國土皆な中に於て現ず、或は國土有り七寶をもつて合成せり、復た國土有り純ら是れ蓮華なり、復た國土有り自在天宮の如し、復た國土有り玻瓈鏡の如く、十方の國土皆な中に於て現ず、是の如き等の無量諸佛の國嚴顯にして觀べく、韋提希をして見せしめらる。

【句義】眉間の光とは佛の眉間に在る白毫相の光にて、嚴顯とは莊嚴顯著にして見事なる意味。

【和解】爾時世尊は韋提希の請問と念願に對して、更に何等の答辯無くして、直に眉間の光を放ち給ふた、初め夫人の意志として何の罪にて惡子を生みしか、世尊は何故提婆達多と眷屬と爲り給へるかと請問たのは、如何にも當然なる疑問であつた、けれども其れは

韋提希夫人極樂淨土を欣求す

過去に屬せる緣言にて、未來の希望に比ぶれば何の必要無きのみならず、彼の希望は清淨業處で、當に往生すべき處を欣求るので有るから、扱こそ世尊は答へ給はず、無言の中に光を放ち彼が選ぶに任せんとして、諸佛の國土を現じ給ふた、されば眉間の光明は金色にして徧く十方の世界を照し、其れが還りて世尊の頂上に住まり、化して金臺となつたが其形狀須彌山の如くにて、其の金臺の中に於て十方諸佛の淨妙國土を現し給ふた、現し給ふた國土の中には七寶を以て合成したのが有る、亦是純ら蓮華の國土、復は快樂の無量なること自在天宮の如き國土、復は光明の耀くこと玻瓈鏡の如き國土、其他無量の諸佛淨土の嚴顯にして觀つべくとて、いとも見事に微妙なるを皆悉く見せしめ給ふた。

時韋提希白佛言世尊是諸佛土雖復清淨皆有光明我今樂生極樂世界阿彌陀佛所唯願世尊教我思惟教我正受

【訓讀】時に韋提希佛に白て言く、世尊是の諸の佛土復た清淨にして皆な光明ありと雖も、我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生れんことを樂ふ、唯願くは世尊、我に思惟を教たまへ我に正受を教たまへ

【和解】十方無量の諸佛淨土を觀ることを得た韋提希夫人は、其時世尊に請ひ奉りて

今ま觀る處の諸佛淨土は何れも清淨にして光明有り、何の不足は無けれど、殊に優れて微妙なるは極樂淨土と見奉りぬ、是に依つて我今多數の佛刹有る中にて、其の極樂世界の阿彌陀佛の所に生れんことを樂ふのである、唯だ願はくは世尊我れに思惟と正受とを教へ給へど、思惟正受とは觀察觀行の義にして、其の極樂往生の方法修行として、如何なる觀察觀行を爲すべきかを、教へ給へどの意味である。

爾時世尊即便微笑有五色光從佛口出一々光照頻婆娑羅頂爾時大王雖在幽閉心眼無障遙見世尊頭面作禮自然增進成阿那含

【訓讀】 爾時世尊即便ち微笑したまふに、五色の光有て佛の口より出で、一々の光頻婆娑羅の頂を照す、爾時大王幽閉に在り雖も、心眼障り無く遙に世尊を見たてまつり、頭面に作禮し自然に増進して阿那含を成す。

【句義】 頭面作禮とは頭面を下げて禮を爲す意味阿那含とは羅漢といふ法位に四果の階

級有る中の、第三果の證を云ふ。

【和解】 韋提希夫人が自ら選びて、極樂世界の阿彌陀佛所に往生せんことを樂ふたのは淨土の門の開ける所以にて、世尊の本意に適ふたので、即便ち微笑し給ふたが、微笑し給ふ佛口の中より、五色の光明が出て尙ほ七重の室内に在る頻婆娑羅王の頂きを照した、其時大王は監禁幽閉の中に在つても、心眼に障り有ること無く遙に世尊を見奉り、且つ光明の照しを受たので、頭面を下げて禮する程に、自然に増進して阿那含の證を得た、是れ佛力の然らしむる處とは云ひ乍ら、吾子の逆縁其儘に證果の因となつたのである。

爾時世尊告韋提希汝今知不阿彌陀佛去此不遠汝當繫念諦觀彼國淨業成者我今爲汝廣說衆譬亦令未來世一切凡夫欲修淨業者得生西方極樂國土

【訓讀】 爾時世尊韋提希に告たまはく、汝今ま知や否や、阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に念を繫て諦かに彼國を觀すべく、淨業成ぜん者なり、我今ま汝が爲に廣く衆譬を説ん、亦た未來世の

一切凡夫の淨業を修せんご欲する者をして、西方極樂國土に生るゝ
ことを得せしめん。

【句義】淨業とは清淨なる行業にて、極樂往生の修行と云ふ意味、衆譬とは極樂淨土の一切事物は凡慮を以て知り難ければ、其れを容易く諒解させんとて、此國の事物に比喩て説明し給ふ義で、普通の譬説にはあらず。

【和解】微笑を漏し光明を放ち給ふのみで、未だ何事をも説き給はざりし釋迦牟尼佛は茲に始めて言説を以て韋提希夫人に告たまはく、汝知らずや阿彌陀如來は此を去ること遠からずと、汝の樂ふ極樂淨土の阿彌陀如來は遠き隔ての有るでは無い、汝と阿彌陀は親近して在る、是に依つて汝當に彼國をば觀察せよ、淨業成せん者なりと、其觀行に因つて往生の淨業は成るのである、されば我今汝の爲めに衆譬を説くべく、亦た未來世の一切凡夫にて西方淨土を願ひて、淨業を修せんとする者の爲めにも、其の淨業なるものを教示て往生させんとするので有る。

欲生彼國者當修三福一者孝養父母奉事師長慈心不殺修
十善業二者受持三歸具足衆戒不犯威儀三者發菩提心深

信因果讀誦大乘勸進行者如此三事名爲淨業

【訓讀】彼國に生れんと欲する者は、當に三福を修すべし、一者父母を孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず十善業を修す、二者、三歸を受持し衆戒を具足して、威儀を犯さず、三者、菩提心を發し深く因果を信じ、大乘を讀誦し行者を勸進す。此の如き三事を名けて淨業と爲す。

【和解】されば彼國に往生を願ふ者は、當に三福を修すべく、三福とは一に敬上の行として父母を孝養して師長に奉事へ、亦た慈下の行として慈悲の心を以て殺生を爲さず、十善業を修するので、十善業とは不殺、不盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不兩舌、不惡口、不貪、不瞋、不愚痴の十善にて、即ち身口意三業の惡事を慎むので有つて、是等の行業は唯だ往生の爲めのみならず、此の世界に於ける假令如何なる人類にても、寧ろ當然に爲すべき善事なればとて、是を第一の世福と名け、亦た二つには佛法僧の三寶に歸依すべき三歸戒を受持ち、其他の衆戒を破らして、亦た威儀を犯さずとて、是等の諸戒に違反せる不行儀不品行を爲さぬのは、佛戒護持の功德なりとて是を第二の戒福とし、扱亦た三に

は菩提心を發すとて、上は菩提を求めて成佛を期すると俱に、下は普く衆生を化益とする心を發し、深く因果の道理を信じ、亦た大乘を讀誦すと此の觀經や無量壽經の如き、其他の大乗經典を讀誦て説の如きの修行を爲し、有らゆる行者を勸進ては惡を止めさせ善を爲さしむるは、何れも菩提の正因として最も必要なる行なりとて、是を第三の行福と稱するので、此の世戒行の三福即ち三事を、名けて淨業と爲すのである。

佛告韋提希汝今知不此三種業過去未來現在三世諸佛淨業正因

【訓讀】佛韋提希に告たまはく、汝今ま知や不や此三種の業は過去未來現在三世諸佛の、淨業の正因なり。

【和解】淨業三福を示し給ふた釋迦牟尼佛は、尙ほ其の三福の殊勝なるを説明すべく、更に韋提希に告給ひて、汝今ま知るや不や此三種の業とて、三福即ち三事の行業は、過去世と未來と現在世に於ける三世諸佛の淨業の正因にて、三世の諸佛が成佛されしは皆此の三福の淨業を正因とし給ふたので有るから、汝及び一切の凡夫にても往生を願ふとならば先づ此の淨業を修せねばならぬと。

佛告阿難及韋提希諦聽諦聽善思念之如來今者爲未來世一切衆生爲煩惱賊之所害者説清淨業善哉韋提希快問此

事阿難汝當受持廣爲多衆宣説佛語

【訓讀】佛阿難及び韋提希に告たまはく、諦かに聽け諦かに聽て善く之を思念せよ、如來今は未來世の一切衆生の煩惱賊に害せらる者、者の爲に、清淨業を説かんことす、善哉韋提希快く此事を問り、阿難汝當に受持して、廣く多衆の爲に佛語を宣説すべし。

【和解】さて其時釋迦牟尼佛は、是より説かんとする淨土の教法は韋提希夫人の致請とは云ひ乍ら、唯だ彼れ夫人の爲のみならず、未來一切衆生の爲めに宣傳すべき必要ありとて、特に侍者たる阿難尊者を主として及び韋提希に告給ふので、汝等諦かに聽て善く之を思念せよ、我今ま如來は未來世に於ける一切衆生の、煩惱賊に害せらるゝと、譬は煩惱は賊の如く其爲め有らゆる善事を侵奪れ、苦難の害を受ける者をば救済べく、清淨業を説かんとするのである、其の清淨業を説かんとするは、韋提希夫人の請問に因るとて善い哉快く此事を問へりと讚たまひて、扱ても阿難よ汝は當に我が此の佛語を受持し記

憶して、多衆の爲めに廣く是をば宣傳すべしと。

如來今者教韋提希及未來世一切衆生觀於西方極樂世界以佛力故當得見彼清淨國土如執明鏡自見面像見彼國土極妙樂事心歡喜故應時即得無生法忍

【訓讀】如來今は韋提希及び未來世の一切衆生をして、西方極樂世界を觀ぜしめん、佛力を以ての故に彼の清淨なる國土を見ここ、明鏡を執て自ら面像を見るが如くなることを得べく、彼の國土の極妙なる樂事を見れば、心歡喜するが故に時に應じて即ち無生法忍を得べし。

【和解】阿難尊者に未來の宣傳を命じ給ふた釋迦牟尼佛は、清淨業として直に念佛を勸め給ふのが本意で有つた、けれども韋提希の致請は思惟正受を教へ給へといふのであるから、其の念佛を説く可き前提として、彼れが致請に應ずべく、先づ其の觀行より説き給ふので、我今如來は韋提希及び未來世の一切凡夫に、西方極樂淨土に對する觀行を教へん

諸佛如來に異方便有り

とするので有つて、佛の力を以ての故に、彼の清淨なる極樂國土を見ること、明かなる鏡を執つて自ら面像を見るが如くなる事を得べく、尙ほ其國土の樂事を見ることを得た者は法悅歡喜するに因つて即時に無生法忍なる極めて優れし證を得べしと。
佛告韋提希汝是凡夫心想羸劣未得天眼不能遠觀諸佛如來有異方便令汝得見

【訓讀】佛韋提希に告たまはく、汝は是れ凡夫にして心想羸劣なり、未だ天眼を得ざれば遠く觀ここ能はじ、諸佛如來に異方便有り汝をして見ここを得せしむと。

【和解】扱其の極樂淨土を觀んとするには、韋提希汝の如きは是れ凡夫にして心想羸劣なりと、心想羸劣とは凡夫の心想は散亂れて、拙く劣るとの意味で、凡夫の心想は羸劣にて、爾も天眼を得ること無ければ、遠く觀ること能はざれども、諸佛如來に異方便として、それを觀るべき方法がある、いざ其の方便を説き示して、極樂淨土を見せしめんと、方便とは特殊の手段方法との意味で、是より以下に説き給ふ處の觀行が、其の異方便としての手段方法である。

時韋提希白佛言世尊如我今者以佛力故見彼國土若佛滅後諸衆生等濁惡不善五苦所逼云何當見阿彌陀佛極樂世界

【訓讀】時に韋提希佛に白て言さく、世尊我如きは今者佛力を以ての故に、彼國土を見たてまつりぬ、若し佛滅後の諸の衆生等は、濁惡不善にして五苦に逼らる、云何が當に阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべきや。

【句義】濁惡不善とは物皆な濁りて不善を爲す者多き意味にて、五苦とは生苦、老苦、病苦、死苦の外に愛別離苦とて、雙互に愛し愛せらるゝ間にても生別死別の悲痛有るを云ふ。

【和解】時に韋提希佛に白して言すには、我今ま佛力を以ての故にと、我れ韋提希の如きは實に心想羸劣の凡夫にして、遠く觀ること能はざれども、佛の力に因るが故に、既に世尊の頂上金臺の中に於て、幸慶にも彼國を見奉りぬ、爾れども、佛の滅後に於ける

諸の衆生にしては、濁惡不善の世の中に爾も種々なる苦に逼られ、有らゆる痛苦と悲哀とを爲しながら、云何して極樂淨土を見ることを得べきか、されば我れ韋提希のみならず其等の衆生の爲めとしても、其方便なる手段方法を教へ給へど。

佛告韋提希汝及衆生應當專心繫念一處想於西方云何作想凡作想者一切衆生自非生盲有目之徒皆見日沒當起想念正坐西向諦觀於日令心堅住專想不移見日欲沒狀如懸鼓既見日已閉目開目皆令明了是爲日想名曰初觀

【訓讀】佛韋提希に告たまはく汝及び衆生、應當に專心に念を一處に繫て西方を想すべし、云何が想を作ん、凡そ想を作さば一切の衆生生盲に非るよりは、有目の徒は皆な日の没するを見るべく、當に想念を起して正坐して西に向ひ、諦かに日を觀すべし、心をして堅住ならしめ專ら想して移さず、日の没せんご欲して狀懸鼓の如くなるを見よ、既に日を見已らば目を閉ぢ目を開くにも皆な明了なら

しめよ、是を日想と爲し名けて初観と曰ふ。

【和解】 扱て是よりは前段に示し給ふた、極樂淨土を觀るべき異方便の手段として定善十三觀の觀行といふのを説き給ふ中の初觀にて、其時世尊草提希に告給ふには、汝及び一切の衆生にして、其の觀行をせんとするには、先づ一心に西方を想すべく、云何が想を作さんとて、其の西方を想するには、如何なる衆生にても生盲に非ざる限りには、皆な太陽の没するを見るで有らう、其の太陽の没する時、正坐して西に向ひ、想念を起して諦かに日を觀すと、彼の太陽の没する處の西方には、吾人の往生すべき極樂淨土在ることを疑はず、其信念を堅住とて想念を凝らして心を外に移さしめず、圓き鼓を懸たる如き太陽の形狀を見て、阿彌陀如來の光明は此の日光にも幾倍して、吾身を照し給ふこと疑無しと信するるので、若夫れ雲の障りが有れば、此の日の形ちを見ること能はず、雲の障りは業障とて吾身の罪業の障りなれども、此の觀行を爲す時には其雲終に拂はれて、目を閉ぢ目を開くにも日光明了なることを得べし、是を日想と名けて初観と曰ふので有ると、此の觀行を以て先づ初めに極樂淨土は西方にして、其淨土には阿彌陀如來の現在し給ふことを想念するのである。

次作水想見水激清亦令明了無分散意既見水已當起冰想見氷映徹作瑠璃想此想成已見瑠璃地内外映徹下有金剛七寶金幢擎瑠璃地其幢八方八楞具足一々方面百寶所成一々寶珠有千光明一々光明八萬四千色映瑠璃地如億千日不可具見

【訓讀】 次に水想を作せ、水の激清なるを見て亦た明了にして分散の意無ら令よ、既に水を見已らば當に氷想を起し氷の映徹せるを見て、瑠璃の想を作べし、此想成し已らば瑠璃地の内外映徹せるを見よ、下に金剛の七寶金幢有て瑠璃地を擎ぐ、其幢八方にして八楞具足せり、一々の方面は百寶の所成にして、一々の寶珠に千の光明有り、一々の光明に八萬四千の色あつて瑠璃地に映ずること、億千の日の如くにして具に見る可からず。

【和解】 極樂淨土は西方に在つて、阿彌陀如來も亦た今現に實在し給ふことを想念した

者は、次に水想を爲して其淨土の土地の瑠璃なるを觀するので、斯く日想と云ひ水想と謂ひ十三觀の何れに於ても、想とか觀とか云ふことの有るものは、架空亦是假想の意味ならずして、其十三觀の何れにても、皆な現在せる淨土の莊嚴及び實況で、四十八願の成就功德に因つて實現されたのは、無量壽經に説き給ふた如くである、けれども未だ往生せざる者としては、それを親しく見ること能はざれば、其の莊嚴を眼前に觀るが如くに説き給ふて觀行せしめらるゝので、架空の説でも亦た假想の想像でも無い、何れも實觀實想にて此の觀行を爲す者は無量の罪を滅することを得て即ち往生の清淨業と成るのである。扱て此觀の水想とは先づ現在の水の激清を見て、水の如くに心意を澄して散亂せしめず、其水凝結は氷となるので水より氷の想を起し、氷に汚れも曇りも無くて映徹る形状は瑠璃の如しと見るので有つて、其瑠璃こそは極樂淨土の地面の相にて、氷の如く内にも外にも映徹れり其地の下には金剛七寶の金幢とて、七寶を以て飾れる金剛不壞の幢柱有つて、此の瑠璃の地を擎げて在るので、爾も其幢八方にして八楞具足せりと、八楞とは八角の意味にて、八角にして八面なるが、其一面の方面は百寶の珠玉より成りて、一々の寶珠には千の光明を放ち、其光明には八萬四千の色彩有つて此の瑠璃の地に映すること、宛も億千の日光が一時に照す如くである。

瑠璃地上以黃金繩雜廁間雜以七寶界分齊分明一々寶中有五百色光其光如華又似星月懸處虛空成光明臺樓閣千萬百寶合成於臺兩邊各有百億華幢無量樂器以爲莊嚴八種清風從光明出鼓此樂器演說苦空無常無我之音是爲水想名第二觀

【訓讀】 瑠璃地の上には黄金の繩を以て雜廁間錯し、七寶を界として分齊分明なり、一々の寶の中には五百色の光有て、其光り華の如く又た星月に似り、虚空に懸處て光明臺と成る、樓閣千萬あり百寶をもつて合成せり、臺の兩邊に於て各百億の華幢有り、無量の樂器以て莊嚴と爲す、八種の清風光明より出で此樂器を鼓きて、苦空無常無我の音を演説す、是を水想と爲し第二觀と名く。

【句義】 黄金繩とは黄金の道路が繩を曳しが如く眞直なりとの意味にて、雜廁間錯とは其眞直なる道路は七寶を以て造り作されて、白玉紫金と次から次へと整然たる狀を云ひ、

八種清風とは八方より吹來る風にて、苦空無常無我とは吾人の樂とし清淨とし常とし我とせるものは四顛倒とて、何れも顛倒の迷情なることを示して、樂は苦で有り身は空である心は無常にして法は無我なる理を演説する義。

【和解】さて其瑠璃の地上には、七寶の道路が有る、其道繩の如く眞直にて、第一道路が白玉なれば第二の道路は紫金で有ると、七寶各雜廁間錯て一路一道整然として其境界は分明である、其一々の寶中には五百色の光明有つて、其光明は華の如く亦た星と月との如く、虚空に懸て光明臺と成れるので、亦其臺中には百寶を以て合成せる千萬の樓閣有り臺の左右兩邊には亦た百億の華幢有つて、無量の樂器を其莊嚴と爲したるが、八種の清風八方の光明より出て此樂器を鼓く時は、是れ尋常の樂聲ならず苦空無常無我の法音を演説して、淨樂我常の四顛倒を覺醒さる、是を水想と爲して第二の觀と名けるのである。

此想成時一々觀之極令明了閉目開目不令散夫唯除睡時恒憶此事如此想者名爲粗見極樂國地若得三昧見彼國地了々分明不可具說是爲地想名第三觀

【訓讀】此想成ずる時、一々に之を觀じて極て明了ならしめよ、

目を閉ぢ目を開くにも散失せしめず、唯だ睡時を除きて恒に此事を憶へ、此の如く想するものを粗ば極樂國地を見、爲す、若し三昧を得れば彼の國地を見こ了々分明なり、具に説く可からず、是を地想と爲し第三觀と名く。

【和解】此想とは瑠璃地に三種の莊嚴とて、金剛七寶の金幢有る地下の莊嚴と、黃金繩を以て分界せる地上の莊嚴と、亦其の光明華の如く星月の如くに、虚空に懸つて光明臺と成れる虚空の莊嚴とを云ふので、それをば更に一々に觀じて明了ならしめ、睡眠を除くの外は目を閉ぢ目を開くにも、恒に此事を憶うて散失せざるを、粗ば極樂淨土の國地を見んと爲し、若し三昧とて此の觀行が成就すれば、愈淨土の國地を見ること明了なるに至る是を地想として第三觀と名けられた。

佛告阿難汝持佛語爲未來世一切大衆欲脫苦者說是觀地法若觀是地者除八十億劫生死之罪捨身他世必生淨國心得無疑作是觀者名爲正觀若他觀者名爲邪觀

【訓讀】 佛阿難に告たまはく、汝佛語を持して未來世一切大衆の苦を脱せんとする者の爲に是の觀地法を説べし、若し是地を觀する者は八十億劫生死の罪を除き、身を他世に捨て必ず淨國に生ず、心に疑ひ無きことを得よ、是觀を作せば名けて正觀とし、若し他觀するを名けて邪觀と爲す。

【和解】 此の一段は阿難尊者に對して、未來世一切衆生の爲に此觀成就の得益を説き給ふので、阿難汝は我が此の觀行を説く佛語を傳持して、未來世の一切衆生にして苦を脱れんとする者の爲めに、此觀地の法を説くべく、此の觀行を爲す者は八十億劫の間に於ける、生死無量の罪を滅して必ず往生するので有るから、疑心を爲してはならぬ、されば是をば正しき觀行として、若し他觀するをば名けて邪觀と爲すのであると、他觀するをば邪觀と爲すとは、地想を觀じて地想を見るのは正觀なれども、其他の想を見ること有らば是れ他觀にて、若し亦た往生の業以外なる他の意味を以て、此の觀行を爲すのも他觀にして、即ち邪觀とするのである。

佛告阿難及韋提希地想成已次觀寶樹觀寶樹者一々觀之

作七重行樹想一々樹高八千由旬其諸寶樹七寶華葉無不具足一々華葉作異寶色琉璃色中出金色光玻璆色中出紅色光瑪瑙色中出磲磔光磲磔色中出綠眞珠光珊瑚琥珀一切衆寶以爲映飾

【訓讀】 佛阿難及び韋提希に告たまはく、地想成し已らば次に寶樹を觀ぜよ、寶樹を觀ずとは一々に之を觀じて七重行樹の想を作せ一々の樹の高さ八千由旬にして、其諸の寶樹には七寶の華葉あつて具足せずといふこと無く、一々の華葉は異の寶色を作し、琉璃色の中よりは金色の光を出し、玻璆色の中よりは紅色の光を出し、瑪瑙色の中よりは磲磔の光を出し、磲磔色の中よりは綠眞珠の光を出し、珊瑚琥珀一切の衆寶以て映飾と爲せり。

【和解】 琉璃地の觀行成就すれば、次には寶樹を觀すべく、寶樹を觀すとは極樂淨土には整然として、七重に行列せる寶樹即ち七重行樹が有るのを一々に觀するので、扱其の行樹

は一々の樹の高さ八千由旬にして、其樹に各七寶の華と葉が具足せられ亦其の一々の華と葉には異なる寶色を現はすので、異なる寶色とは種々に異なる色光の意味にして、瑠璃色の華葉の中よりは金色の光を出し、玻璃色の華葉の中よりは紅色の光を出し、碼磤色の中よりは碼磤の光を出し、碼磤色の中よりは綠眞珠の光を出すのみならず、其他の珊瑚琥珀等の衆寶が、互に色光を放つて相映じ、以て飾りを爲してある。

妙眞珠網彌覆樹上一々樹上有七重網一々網間有五百億妙華宮殿如梵王宮諸天童子自然在中一々童子五百億釋迦毗楞伽摩尼寶以爲瓔珞其摩尼光照百由旬猶如和合百億日月不可具名衆寶間錯色中上者

【訓讀】妙眞珠の網あつて樹上を彌覆ひ、一々の樹上に七重の網有り、一々の網の間に五百億の妙華宮殿有て梵王宮の如し、諸天童子自然に其中に在り、一々の童子は五百億の釋迦毗楞伽摩尼寶をもつて以て瓔珞を爲せり、其摩尼の光百由旬を照す、猶し百億の日月を和合せるが如く具に名く可からず、衆寶間錯て色中の上たるものなり。

なり。

【句義】梵王宮とは梵天王の宮殿にて其莊嚴の最勝なるを喻とし、釋迦毗楞伽摩尼寶とは梵語にて、翻譯すれば能勝と稱し亦た如意寶珠とも名けられた、勝れし寶珠の一種を云ふ。

【和解】寶樹の上には妙眞珠とて、眞珠の寶王にて作りなされた網を彌覆ひ、亦其の空裏にも七重の網が有つて、一々の網間には五百億の妙華にて作れる宮殿が有る、其宮殿の莊嚴は梵王宮の如くにて、諸の天童子が其宮殿の中に在つて、一々の天童子は五百億の釋迦毗楞伽の摩尼寶を以て瓔珞と爲し、摩尼の光の耀く狀は百億の日月を和合たるが如くにて百由旬を照す、其光色の勝れしは具に名くべからずとて、何とも名狀する事が出来ぬ有らゆる衆寶の色を間錯て其光彩の無比なること、色中の上たるものなりと、すべての光色中に於ける其の最上である。

此諸寶樹行々相當葉々相次於衆葉間生諸妙華葉上自然有七寶果一々樹葉縱廣正等二十五由旬其葉千色有百種畫如天瓔珞有衆妙華作閻浮檀金色如旋火輪婉轉葉間涌

生諸果如帝釋瓶有大光明化成幢旛無量寶蓋是寶蓋中映現三千大千世界一切佛事十方佛國亦於中現

【訓讀】此諸の寶樹は行々相當り葉々相次ぎ、衆葉の間に於て諸の妙華を生ず、華上には自然に七寶の果有て一々の樹葉は縱廣正等にして二十五由旬なり、其葉千色にして百種の畫有り天の瓔珞の如し、衆の妙華有て閻浮檀金の色を作し、旋火輪の如くに葉間に宛轉せり、涌生せる諸果は帝釋瓶の如く、大光明有て化して幢旛無量の寶蓋と成る、是寶蓋の中に三千大千世界の一切の佛事を映現し、十方の佛國も亦た中に於て現す。

【句義】旋火輪とは廻轉せる車輪の意味にて、帝釋瓶は帝釋天の徳瓶とて有らゆる財寶を出すに喩ふ。

【和解】此諸の寶樹は整しく行列して亂雜ならず、一列一行相對して樹葉も亦た其如くに鱗次たるが、其衆葉の間には妙華を生じ、華の上には七寶の果實がある、爾も一々の樹葉は縱廣正等して、廣さは二十五由旬なるが、それに千色にして百種の畫有りと、葉目

の鮮明なること百種の畫有る天の瓔珞の如くにて、其葉間に在る衆多の妙華は、閻浮檀金の色を爲して光明廻つて轉すること旋火輪の如くである、亦其の華上に涌生せるは帝釋瓶の如くなる諸果にて、帝釋瓶が許多の寶を出すが如くに、此の諸果よりは大光明を出し、其光明が變じては無量の幢旛と寶蓋と化するのて有つて其寶蓋の中に於ては三千大千世界に在る、一切佛法の行事が映現れ十方諸佛の淨土も亦た其中に現するのである。

見此樹已亦當次第一々觀之觀見樹莖枝葉華果皆令分明是爲樹想名第四觀

【訓讀】此樹を見已りなば、亦當に次第に一々に之を觀すべく、樹莖枝葉華果を觀見して、皆な分明ならしめよ、是を樹想と爲し第四觀と名く。

【和解】此寶樹を見已らば、亦更に樹の莖と枝葉と華と果を一々次第に分明に觀見するを要するので、是を寶樹の想と爲して、第四の觀と名けるのである。

次當想水想水者極樂國土有八池水一々池水七寶所成其寶柔輓從如意珠王生分爲十四支一々支作七寶色黃金爲

渠渠下皆以雜色金剛以為底沙一々水中有六十億七寶蓮華一々蓮華團圓正等十二由旬

【訓讀】次に當に水を想すべし水を想すとは、極樂國土に入池水有て、一々の池水は七寶の所成なり、其寶柔軟にして如意珠王より生じ、分れて十四支と爲る、一々の支は七寶の色を作し黄金を渠とせり、渠下には皆な雜色の金剛を以て、以て底沙と爲す、一々の水中に六十七億の蓮華有り、一々の蓮華は團圓正等にして十二由旬なり。

【和解】次には水を想するので水を想すとは、極樂淨土に入池水がある、八池水とは八功德水を湛へし池にて、それが一箇所ならずして數箇所の池があるに因つて、一々の池水と云ひ、其池水の岸壁は七寶にて、七寶なりとは云ひ乍ら金銀にせよ珊瑚にせよ、いと柔軟き七寶にて、池の中には如意珠王と勝れし寶玉があるのであつて、それより水を生ずるので、其水分かれて十四支とて、十四の支流を爲したるが、十四の支流皆俱に七寶の色を作して、亦た黄金を渠としたり、渠の下には種々雜色の金剛を以て底沙とせるが、其一

々の池中には六十億の七寶の蓮華が有つて、何れも團圓正等なりと圓き形が正等して、十二由旬の大きさである。

其摩尼水流注華間尋樹上下其聲微妙演說苦空無常無我諸波羅密復有讚歎諸佛相好者如意珠王涌出金色微妙光明其光化爲百寶色鳥和鳴哀雅常讚念佛念法念僧是爲八功德水想名第五觀

【訓讀】其摩尼水は華間に流注して樹を尋て上下す、其聲微妙にして苦空無常無我諸波羅密を演說し、復た諸佛の相好を讚歎する者有り、如意珠王より金色微妙の光明を涌出し、其光化して百寶色の鳥と爲り、和鳴哀雅にして常に念佛念法念僧を讚す、是を八功德水の想と爲し第五觀と名く。

【和解】摩尼水とは如意寶珠より出る水にて、池の中なる如意寶珠よりは水を出して、其水蓮華の間に流注し、流れて池岸の上に到れば、岸の寶樹の樹枝に尋て、或は上り或は

下る、其上下せる水聲は苦空無常無我の法、亦た諸の波羅密とて説は微妙の聲とも聞え復た諸佛の圓滿し給へる、相好の徳を讚嘆のも有る、且亦た如意の珠玉よりは、金色微妙の光明を涌出し、光明化して百寶色の鳥となるので、其鳥常に哀雅の聲を以て、念佛念法念僧なる三寶讚美の和鳴を爲す、是を八功德水の想として第五の觀と名けるので、八功德水とは八徳を有する池水なること無量壽經和解の如くである。

衆寶國土一々界上有五百億寶樓閣其樓閣中有無量諸天、作天伎樂又有樂器懸處虛空如天寶幢不鼓自鳴此衆音中皆說念佛念法念比丘僧此想成已名爲粗見極樂世界寶樹寶地寶池是爲總觀想名第六觀若見此者除無量劫極重惡業命終之後必生彼國作是觀者名爲正觀若他觀者名爲邪觀

【訓讀】 衆寶國土の一々の界上には五百億の寶樓閣有り、其樓閣の中には無量の諸天有つて天の伎樂を作す、又た樂器有て虛空に懸

處り天の寶幢の如く鼓かざるに自ら鳴る、此衆音の中にも皆な念佛念法念比丘僧を説く、此想成し已るを名けて粗ば極樂世界の寶樹寶地を見と爲す、是を總觀想として第六の觀と名く、若此を見る者は無量億劫極重の惡業を除き、命終りて後必ず彼國に生る、是觀を作せば名けて正觀とし、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す。

【和解】 衆寶國土とは衆寶を以て成れる極樂國土といふ意味にて、其衆寶國土の一々の界上とて、黃金繩を張りしが如く整然たる瑠璃地の上には、五百億の寶樓閣が有つて、其樓閣の中には無量の天人が天の伎樂を作しつゝ在る、亦た無量の樂器が有つて虛空に懸り天の寶幢の如くに鼓かざれども自ら鳴る天の寶幢とは兜率天の寶幢との意味で、兜率天の寶幢には寶珠が有つて樂器と化し、鼓かざれども鳴るので有つて、極樂淨土の樂器も亦た其寶幢の如くにして、其樂聲も法音にて念佛念法念僧を説くので有る、此の觀行を爲し已るをば、粗ば極樂淨土の寶樹と寶地と寶池とを見んとし、是を總觀想として第六の觀と名けられた、總觀想とは寶樹寶地寶池の觀行を總合せの義にて、其總觀を爲す者は無量億劫に於ける極重の惡業を除きて、必ず彼國に生るゝことを得べく、是の觀を爲すをば名けて

正觀とし、若し他觀するをば邪觀とするのである。

佛告阿難及韋提希諦聽諦聽善思念之佛當爲汝分別解說除苦惱法汝等憶持廣爲大衆分別解說是語時無量壽佛住立空中觀世音大勢至是二大士侍立左右光明熾盛不可具見百千閻浮檀金色不得爲比

【訓讀】佛阿難及び韋提希に告たまはく、諦かに聽け諦かに聽て善く之を思念せよ、佛當に汝の爲に苦惱を除く法を分別し解説すべし、汝等憶持して廣く大衆の爲に分別し解説せよ、是語を説たまふ時無量壽佛空中に住立したまふ、觀世音大勢至是の二大士左右に侍立して、光明の熾盛なること具に見べからず、百千の閻浮檀金色も比ご爲すことを得ず。

【和解】其時釋迦牟尼佛は阿難尊者及び韋提希に告給うて、我當に汝等の爲に苦惱を除く法を分別して解説すべければ、汝等も亦た諦かに聽て思念すべく、特に阿難は憶持して

廣く大衆の爲めにも、之を分別解説せよと、是語を説き給ふ時に當つて、阿彌陀如來は其眞身を現し觀音勢至の二菩薩を侍立せしめて、空中に住立たまふを見たまつる、其光明の熾盛なること具に見るべからずとて、百千閻浮檀金の色も光も、比ぶることを得ざる程にて、眼も眩むばかりである。

時韋提希見無量壽佛已接足作禮白佛言世尊我今因佛力故得見無量壽佛及二菩薩未來衆生當云何觀無量壽佛及二菩薩

【訓讀】時に韋提希、無量壽佛を見たまつり已り、足を接して禮を作し佛に白して言く、世尊我今佛力に因が故に無量壽佛及び二菩薩を見たまつることを得たり、未來の衆生は當に云何が無量壽佛及び二菩薩を觀たまつることを得べきやと。

【和解】韋提希夫人は思掛け無く、阿彌陀如來と觀音勢至の二菩薩が來現されて、空中に住立し給ふのを見奉つたので、直ちに佛の御足を禮して扱て釋迦牟尼佛に言すには、世尊我今無量壽佛と二菩薩を見奉ることを得たのは、全く佛力の然らしむる所である

けれども未來の衆生としては、如何して之を観るべきかと。

佛告韋提希欲觀彼佛者當起想念於七寶地上作蓮華想令其蓮華作百寶色有八萬四千脈猶如天畫脈有八萬四千光了々分明皆令得見華葉小者縱廣二百五十由旬如是蓮華有八萬四千葉一々葉間各有百億摩尼珠王以爲映飾一々摩尼放千光明其光如蓋七寶合成徧覆地上。

【訓讀】佛韋提希に告たまはく、彼佛を觀んご欲せば當に想念を起すべし、七寶の地上に於て蓮華の想を作し、其蓮華の一々の葉をして百寶の色を作さしめよ、八萬四千の脈有て猶し天の畫の如く、脈に八萬四千の光あり、了々分明に皆な見こを得せしむ、華葉の小なるは二百五十由旬にして、是の如き蓮華に八萬四千の葉有り、一々の葉の間に各百億の摩尼珠王有て、以て映飾ご爲し、一々の摩尼より千の光明を放ち、其光蓋の如く七寶合成して、徧く地上に覆

へり。

【和解】韋提希夫人の問に對して、さて更めて告給ふには、彼佛なる阿彌陀如來を觀んと欲せば、當に想念を起すべく、其想念を起すとは極樂淨土の七寶瑠璃の地上に於て、一大蓮華を想するので、其蓮華の葉には百寶の色彩有つて、亦た八萬四千の葉脈がある、それが鮮明にして巧妙なること天の畫の如くにて、其亦た葉脈に八萬四千の光があり、華葉の小なるものにも縱廣二百五十由旬にして、八萬四千の葉間には各百億摩尼の珠玉有つて以て映飾とせられて有る、其一々の摩尼よりも千の光明を放ちて、其光明は蓋の如く七寶を以て合成され、徧く地上を覆うて有るのが、一大蓮華の想である。

釋迦毗楞伽寶以爲其臺此蓮華臺八萬金剛甄叔迦寶梵摩尼寶妙眞珠網以爲交飾於其臺上自然而有四柱寶幢一々寶幢如百千萬億須彌山幢上寶幔如夜摩天宮有五百億微妙寶珠以爲映飾。

【訓讀】釋迦毗楞伽寶以て其臺ご爲す、此蓮華臺は、八萬金剛甄叔迦寶、梵摩尼寶妙眞珠網、以て交飾ご爲せり、其臺上に於て自然に

四柱の寶幢有り、一々の寶幢は百千萬億の須彌山の如く、幢上の寶幔は夜摩天宮の如く、五百億の微妙の寶珠有て以て映飾を爲せり。

【句義】釋迦毗楞伽寶は如意寶珠にて、金剛とは金中の精牢なるものを稱し、甄叔迦寶は赤色の寶玉、梵摩尼寶とは清淨なる珠玉を云ひ、夜摩天宮とは須彌山の頂上に在る宮殿を云ふ。

【和解】前段は蓮華と蓮葉との莊嚴で有つたが、是より以下は其蓮華の中心なる蓮臺の莊嚴にて、其蓮臺は釋迦毗楞伽寶にして、爾も勝れし各種の珠玉と、眞珠の網とを取り交て交飾とせられ、臺の上には四柱の寶幢有つて其高きこと須彌山の如く、寶幢の上には寶幔とて寶の幔幕が張られて有る、其形狀須彌の頂上に夜摩天宮が在るに似たり、且亦た五百億の微妙の寶珠を以て其寶幢を映飾して在る。

一々寶珠有八萬四千光一一光作八萬四千異種金色一々金色徧其國土處々變化各作異相或爲金剛臺或作眞珠網或作雜華雲於十方面隨意變現施作佛事是爲華座想名第七觀

【訓讀】一々の寶珠に八萬四千の光有り、一々の光は八萬四千の異種の金色を作す、一々の金色其寶土に徧く、處々に變化して各異相を作す、或は金剛臺と爲り或は眞珠網と作り或は雜華雲と作り、十方面に於て意に隨ひて變現して佛事を施作す、是を華座想と爲し第七觀と名く。

【和解】寶幢を映飾れる五百億の微妙の寶珠は、其一々の寶珠に八萬四千の光が有つて一々の光は亦た八萬四千の異種の金色とて、種々に異なる光彩を放つ、其金色は寶土に徧く處々に變化して各異なる相狀を現し、或は金剛堅固の臺と爲り、或は眞珠の網と作り或は雜華の雲とも作つて、八方上下の十方面に於て、隨意自在に佛事を施作すと、佛事を施作すとは供養の資具を現出する意味にて、彼の金色の異相には金剛臺や眞珠網のみならず、飲食華香等の有らゆる供具も現はれるので、是を華座の想として第七の觀と名けるのである。

佛告阿難如此妙華是本法藏比丘願力所成若欲念彼佛者當先作此華座想作此想時不得雜觀皆應一々觀之一々葉

一々珠一々臺一一幢皆令分明如於鏡中自見面像此想成者滅除五萬劫生死之罪必定當生極樂世界作是觀者名為正觀若他觀者名為邪觀

【訓讀】 佛阿難に告たまはく、此の如き妙華は是本法藏比丘願力の所成なり、若彼佛を念ぜんご欲する者は、當に先づ此の華座の想を作べし、此想を作す時雜觀することを得ざれ、皆應に一々に之を觀すべし、一々の葉、一々の珠、一々の光、一々の臺、一々の幢、皆分明ならしむること、鏡中に於て自ら面像を見が如くせよ、此想成する者は五萬劫の生死の罪を滅除して、當に極樂世界に生るべし是觀を作をば名けて正觀とし、若他觀するをば名けて邪觀と爲す。

【和解】 此の如き妙華とは前段の一大蓮華即ち華座を云ふので、此の如き華座は本法藏比丘の願力とて、阿彌陀如來の四十八願の力に因つて成れる所なれば、彼佛を念せんとする者は先づ此の華座想を作すべく、此想を作すには他の雜觀を作すことを得ず、其華座に於ける一々の葉と珠玉と光明と臺と幢とを、分明に觀すること鏡中に對して、自ら面像を見るが如くなるのが必要にて、此想成就すれば五萬劫の生死の罪を滅し、必定して極樂世界に生るゝことを得べく、此の觀行を作すをば正觀とし、若し他觀するをば名けて邪觀と爲すと。

佛告阿難及韋提希見此事已次當想佛所以者何諸佛如來是法界身入一切衆生心想中是故汝等心想佛時是心卽是三十二相八十隨形好是心作佛是心是佛諸佛正徧知海從心想生

【訓讀】 佛阿難及ひ韋提希に告たまはく、此事を見已りなば次に當に佛を想すべし、所以は何ん、諸佛如來は是れ法界身にして、一切衆生の心想の中に入たまふ、是故に汝等心に佛を想ふ時、是心卽是れ三十八相八十隨形好なり、是心佛を作る是心是れ佛なり、諸佛正徧知海は心想より生ず。

【句義】法界身とは事法界とて一切衆生の有らん限りの世界に、諸佛如來の佛身が徧滿せる義、三十二相は無量壽經和解の如くにて、八十隨形好とは三十二相に伴ひたる好相を云ふので、譬へば眼といふのが相にて其眼が好とか醜とかいふのが隨形好にして、それに八十の好相有る意味、諸佛正徧知海とは佛の智慧は海の如く深廣にして徧く一切衆生の心念を知り給ふ義。

【和解】此事を見已るとは前段の蓮華座にて、華座の觀行を已りし者は次に佛を想するので、何故佛を想するならば諸佛如來は法界身とて、阿彌陀如來を主として一切諸佛の佛身は、有らん限りの世界に徧滿して、一切衆生の心想の中に入給ふのである、心想の中に入るとは、一切衆生の心想を知つて愛護し給ふ意味にして、譬へば父母の吾子の心を知つて愛し念ふが如くである、是故に汝等心に佛を想ふ時と、吾人が佛を念する時には、吾人の心が三十二相で、亦八十隨形好を有し給ふ佛と異なる所が無い、佛と異なる所が無くば是心にて佛を作る、是心即ち佛であると、けれども吾人が佛を念せずば父母を慕はぬ子の如くで、父母たる佛の慈愛も片思ひにて、父母の心と子の心と合一してこそ親しけれども、若し合一を缺く時には假令ひ一家の中に在るとも、更に何等の親近が無い、佛を念せぬ衆生の心は此の親近無き子と同然にて、佛の前に在りとても心と心に懸隔が有れば是心佛を作

らすして、是心即ち鬼で有るかも計り難い、それに反して眞實に佛を父母とし念するならば、父母の心は子に通ひ子の心は父母に通じて、何の懸隔も無きのみならず、遠國他所に離るゝとも、心と心は親近して在る如くにて、吾人が佛を想念して佛の心を心とせば、佛も吾人の心想に入り給ひて、更に何等の懸隔無く、吾人の心も三十二相の佛と異なる所が無い、即ち是心佛を作るので是心即ち佛である、されば諸佛正徧知海とて、佛の智慧の深廣なること大海の如くにして、徧く衆生の心念を知り給へば、心想より生ずるとて吾人が佛を念する時、其心想の中に佛が現はれ給ふこと、譬へば水無き池には月無けれど、水さへ有れば池毎に月影の映るが如くである。

是故應當一心繫念諦觀彼佛多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛
陀想彼佛者先當想像閉目開目見一寶像如閻浮檀金色坐
彼華上見像坐已心眼得開了々分明見極樂國七寶莊嚴寶
地寶池寶樹行列諸天寶幔彌覆其上衆寶羅網滿虛空中見
如此事極令明了如觀掌中

【訓讀】

是故に應當に一心に念を繫て、諦かに彼佛多陀阿伽度、

阿羅訶、三藐三佛陀を觀すべし、彼佛を想せん者は先當に像を想すべし、目を閉ち目を開くにも一の寶像を見よ、閻浮檀金の色の如く彼の華上に坐したまへり、像の坐したまへるを見已りなば、心眼開くことを得て、了々分明に極樂國の七寶莊嚴、寶地寶池寶樹行列し諸天の寶幔其上に彌覆し、衆寶の羅網虛空の中に滿ることを見ん、此の如き事を見て極て明了ならしむること、掌中を見が如くせよ。

【句義】 多陀阿伽度は梵語にて如來と譯され、阿羅訶も同様に應供と譯し、三藐三佛陀は等正覺と譯し、何れも佛徳十號の中にして佛の意味とす。

【和解】 されば諸佛正徧知海は衆生の心想より生ずるに因つて、當に一心に念を繫て多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀の、十號具足し給へる彼佛、即ち阿彌陀如來を觀すべく彼佛を觀せんとするには先づ當に像を想すべしと、佛の形像を想するので、目を閉ち目を開くにも閻浮檀金の色の如き寶像が、彼の華上に坐し給へるを見るべく、彼の華上とは前觀の寶座にて、其寶華座に坐し給へる佛の像を見已らば、心の眼を開くことを得て、極樂淨土に於ける寶地寶池の莊嚴とて、諸天の寶幔は七重行樹の上に彌覆ひ、衆寶の羅網は虛空の

中に滿るを見るので、それをば極めて明了に自ら掌中を觀るが如くせよと。

見此事已復當更作一大蓮華在佛左邊如前蓮華等無有異復作一大蓮華在佛右邊想一觀世音菩薩像坐右華座亦放金光如前無異想一大勢至菩薩像坐右華座

【訓讀】 此事を見已らば復當に更に、一の大蓮華を作て佛の左邊に在べく、前の蓮華の如く等しくして異り有ること無し、復た一の大蓮華を作て佛の右邊に在べく、一の觀世音菩薩の像の左の華座に坐するを想し、亦た金光を放つこと前の如く異なること無し、一の大勢至菩薩の像の右の華座に坐するを想せよ。

【和解】 阿彌陀如來の寶像が蓮華座に坐し給ふのを見已らば、復更に一の大蓮華が佛の左邊に在ることを想するので、其の蓮華座は前の華座觀の如く等しくして異りが無い、復次に一大蓮華が佛の右邊に在るのを想して、左の華座には觀世音菩薩、右の華座には大勢至菩薩が坐して、金光を放ち給ふこと阿彌陀如來の寶像の如く、異り無きをば觀するので

ある。

此想成時佛菩薩像皆放光明其光金色照諸寶樹一一樹下復有三蓮華諸蓮華上各有一佛二菩薩像徧滿彼國

【訓讀】此想成する時佛菩薩の像皆な光明を放つ、其光金色にして諸の寶樹を照す、一々の樹下に復た三蓮華有り、諸の蓮華の上に各一佛二菩薩の像有て、彼國に徧滿す。

【和解】此想成就する時には蓮華座に在る阿彌陀佛と觀音勢至の一佛二菩薩の像皆な光明を放つ、其光明金色にして諸の寶樹を照し給ふに、一々の樹下にも復た三蓮華が有り其蓮華座の上にも各一佛二菩薩の像有つて、彼國に徧滿すと到る所に在るのである。

此想成時行者當聞水流光明及諸寶樹鳧鴈鴛鴦皆說妙法出定入定恒聞妙法行者所聞出定之時憶持不捨令與修多羅合若不合者名爲妄想若有合者名爲羸想見極樂世界是爲像想名第八觀作是觀者除無量億劫生死之罪於現身中

得念佛三昧

【訓讀】此想成する時行者當に水流光明、及び諸の寶樹鳧鴈鴛鴦皆な妙法を説くを聞くべし、出定入定恒に妙法を聞かん、行者の所聞出定の時憶持して捨ず、修多羅と合せしめよ、若合せざるをば名けて妄想とし、若合すること有をば名けて羸想を以て、極樂世界を見るを爲す、是を像想と爲し第八觀と名く、是觀を作す者は無量億劫生死の罪を除き、現身の中に於て念佛三昧を得ん。

【和解】此想成就する時とて、前段の一佛二菩薩の國中に徧滿し給ふのを見た時には、其の觀行者は亦更に水の流れも光明も及び諸の寶樹も、鳧や鴈や鴛鴦までも、皆悉く妙法を説くを聞くべく、それが出定入定とて此の觀行を爲す時も爲さざる時でも、恒に其れをば聞くので有るから、行者は之を記憶して其れを修多羅と合せしめよと、修多羅とは契經の梵語にて、其の聞く所の妙法が經典所説の義に適合や否やを思考ので、若し合は無ければ妄想なれども、合ふこと有れば眞想にて粗ば極樂淨土を見たりと爲し、是を像想と

して第八觀と名け、此の觀行を爲す者は無量億劫生死の罪を除き、現身の中とて今現在に於て念佛三昧を得べしと、念佛三昧とは此の觀行に因つて佛身を見ることを得るとの義で今現在の世に於て佛の形像ならずして、其の眞身を見ることを得るのである。

四二八

佛告阿難及韋提希此想成已次當更觀無量壽佛身相光明阿難當知無量壽佛身如百千萬億夜摩天閻浮檀金色佛身高六十萬億那由他恒河沙由旬眉間白毫右旋婉轉如五須彌山佛眼如四大海水青白分明

【訓讀】佛阿難及び韋提希に告たまはく、此想成じ已らば次に當更に無量壽佛の身相光明を觀すべし、阿難當に知べし、無量壽佛の身は百千萬億夜摩天の閻浮檀金色の如く、佛身の高さは六十萬億那由他恒河沙由旬なり、眉間白毫は右に旋りて婉轉す五須彌山の如く佛眼は四大海水の如く青白分明なり。

【和解】前觀にては一佛二菩薩の形像を想するので有つたが、此觀にては無量壽佛の身

相光明とて、阿彌陀如來の眞身とを觀するので、阿彌陀如來の眞身は百千萬億夜摩天の閻浮檀金色とて、閻浮檀金の中にも夜摩天に在つて最上なる金色を百千萬億合せたるにも比ぶべき金色身にて、佛身の高さは六十萬億那由他由旬と、無量無邊にして數量の限りで無く、眉間の勝相白毫の光明は、右に旋りて高く顯はれ給ふこと五須彌山の如く、佛眼は四大海水の如くにて、青白最も鮮明なるのである。

身諸毛孔演出光明如須彌山彼佛圓光如百億三千大千世界於圓光中有百萬億那由他恒河沙化佛一々化佛亦有衆多無數化菩薩以爲侍者

【訓讀】身の諸の毛孔より光明を演出たまふこと須彌山の如く、彼佛の圓光は百億三千大千世界の如し、圓光の中に於て百萬億那由他恒河沙の化佛有り、一々の化佛に亦た衆多無數の化菩薩有て、以て侍者と爲す。

【和解】身の毛孔とは佛の全身との意味にて、全身金色なる佛身は亦た全身に光明を演

四二九

出たまふので、其光明の廣大なること須彌山の如く、そのみならず圓光にて御首の後肩の邊に圓形なる光明有つて、百億三千大千世界を照さる、其圓光の中には無量の化佛を現はして、一々の化佛に亦た無数の化菩薩有つて化佛の侍者と成り給ふ、即ち佛の圓光の中にも無数の化佛と觀音勢至の化菩薩が在すのである。

無量壽佛有八萬四千相一々相各有八萬四千隨形好一々好復有八萬四千光明一々光明徧照十方世界念佛衆生攝取不捨

【訓讀】 無量壽佛に八萬四千の相有り、一々の相に各八萬四千の隨形好あり、一々の好に復た八萬四千の光明有り、一々の光明は徧く十方世界を照し、念佛衆生を攝取して捨たまはず。

【和解】 扱て眞身の阿彌陀如來には、八萬四千の勝れし相が有つて、其一々の相には、各八萬四千の隨形好が有り、其好に復た八萬四千の光明があるので、其一々の光明は徧く十方世界を照して、如何なる所、如何なる人でも、照しに漏れる事が無い、けれども佛の目的として殊更に照し給ふのは、念佛衆生とて稱名念佛する衆生にて、爾もそれをば攝取し

て捨たまはずと、攝取とは光明の中に攝取して護念たまふといふ義にて、捨たまはずとは如來大悲の手を以て念佛衆生の手を執りたまひ、屹と握つて放さじとの意味で、即ち念佛する衆生は唯光明に照らさるゝのみならず、大悲の御手に吾身を託して晝夜不斷の護念を得らる、されば現在此世に於ては自然に三垢消滅して、心意柔順に安らげき生活を爲し、命終らば直に其の儘極樂淨土へ引接るゝのである。

其光明相好及與化佛不可具說但當憶想令心眼見見此事

者即見十方一切諸佛以見諸佛故名念佛三昧

【訓讀】 其光明相好及與化佛、具に説く可からず、但だ當に憶想して心眼をして見しむべし、此事を見る者は即ち十方一切の諸佛を見たてまつる、諸佛を見たてまつるを以ての故に、念佛三昧と名く。

【和解】 其光明相好とは前段に説き給ふた佛の光明と相好にて、佛の光明相好及び化佛の有様は、是の如く説くとは云へども、尙是れ萬分の一にして具に説くべからざれば、其一々の莊嚴と微妙の功德は、此の觀行を爲す者の自ら親しく、心眼を以て見るべきものに

て、此の觀行を爲す者は阿彌陀如來の眞身のみならず、即ち十方一切の諸佛をも見ることを得べく、是を念佛三昧と名けるのである。

作是觀者名觀一切佛身以觀佛身故亦見佛心佛心者大慈悲是以無緣慈攝諸衆生作是觀者捨身他世生諸佛前得無生忍是故智者應當繫心諦觀無量壽佛

【訓讀】 是觀を作をば一切の佛身を觀ずと名く、佛身を觀ずるを以ての故に亦た佛心を見る、佛心とは大慈悲是なり、無緣の慈を以て諸の衆生を攝したまふ、是觀を作す者は身を他世に捨て、諸佛の前に生じ無生忍を得べし、是故に智者應當に心を繫て、諦かに無量壽佛を觀すべし。

【和解】 此の觀行を爲す者ば、念佛三昧に因つて一切の佛身を觀ると名けるので、一切佛身を觀る者は亦た佛心を見らる、唯だ佛の眞身のみならず佛心の眞相をも見るべく、佛心の眞相とは大慈悲是なりとて、佛の心は大慈悲にて、爾も無緣の慈を以て衆生を攝し

給ふと、無緣の慈とは菩薩と雖も及び難き、佛にのみ有る慈悲心にて、佛心無緣の大慈悲は怨親平等にして偏頗無く、何なる衆生に對しても異りの無き慈愛を以て、普く救濟し給ふ義を觀想するのを、佛心を見らる稱して、此の觀行を爲す者は身を他世に捨てて、命終つて後は諸佛の前に生れて無生忍を得べく、諸佛の前とは諸佛等の義に依つて斯く稱すれども、阿彌陀如來の前との意味で、即ち極樂淨土に往生して無生忍の證を得らる、是故に智者とて此義を諒解する者は、當に諦かに無量壽佛を觀すべしと。

觀無量壽佛者從一相好入但觀眉間白毫極令明了見眉間白毫者八萬四千相好自然當現見無量壽佛者即見十方無量諸佛得見無量諸佛故諸佛現前授記是爲徧觀一切色身想名第九觀作此觀者名爲正觀若他觀者名爲邪觀

【訓讀】 無量壽佛を觀ずる者は一の相好より入るべく、但だ眉間白毫を觀ずること極て明了ならしめよ、眉間白毫を見る者は八萬四千の相好自然に當に現すべし、無量壽佛を見たてまつる者は、即ち

十方無量の諸佛を見たてまつる、無量の諸佛を見ることを得るが故に、諸佛現前に授記したまふ、是を徧く一切色身を觀する想として第九觀を名け、此觀を作せば名けて正觀とし、若他觀するをば名けて邪觀と爲す。

【和解】 扱其の無量壽佛を觀せんとする者は、八萬四千の相好は到底一々に觀すること能はざれば、一の相好より入るべしと、先づ眉間白毫相を觀じて明了ならしむべく、眉間の白毫を見る時には八萬四千の相好自然に現はる、斯くして無量壽佛を見る者は前段の如く即ち十方無量の諸佛を見るので有つて、諸佛現前に授記し給ふのである、授記とは成佛の記録にして未來成佛すべきを證明記録せらるべく、是を徧く佛の一切色身を觀する想として第九觀と名け、此觀を作せば名けて正觀とし、他觀するをば名けて邪觀と爲すと。

佛告阿難及韋提布見無量壽佛了々分明已次復當觀觀世音菩薩此菩薩身長八十萬億那由他由旬身紫金色頂有肉髻項有圓光面各百千由旬其圓光中有五百化佛如釋迦牟尼

其十觀音

尼佛一々化佛有五百化菩薩無量諸天以爲侍者

【訓讀】 佛阿難及び韋提希に告たまはく、無量壽佛を見たてまつることを了々分明にし已りなば、次に復當に觀世音菩薩を觀すべし、此菩薩の身長八十萬億那由他由旬なり、身は紫金色にして頂に肉髻有り、項に圓光有て面各百千由旬なり、其圓光の中に五百の化佛有て釋迦牟尼佛の如し、一々の化佛に五百の化菩薩有て、無量の諸天以て侍者と爲り。

【和解】 了々分明に阿彌陀如來を觀見せし者は、次に觀世音菩薩を想すべく、觀音菩薩は佛の侍者として左邊に在し、身長八十萬億那由他由旬にして、身色紫金の色を現はし頂には肉髻が有る、肉髻とは此菩薩に限らず佛世尊の頂上に在る勝相にて、頂骨の秀で、高く勝れし所を稱し、普通多くの佛像には珠玉を彫刻して表示して在るのが其れで、此菩薩の佛と異つて髻が結んで有る、亦た項とて吾人の身體に於ける首筋の邊に百千由旬の圓光が有り、圓光の中には五百の化佛有つて釋迦牟尼佛の如くなり、釋迦牟尼佛の如くな

りとは、其化佛の身相が今ま現在に見る所の釋迦牟尼佛の如しとの意味で、其化佛にも亦た五百の化菩薩が有つて、無量の諸天を以て侍者と爲せりと。

舉身光中五道衆生一切色相皆於中現頂上毗楞伽摩尼寶以爲天冠其天冠中有一立化佛高二十五由旬觀世音菩薩面如閻浮檀金色眉間毫相備七寶色流出八萬四千種光明一々光明有無量無數百千化佛一々化佛無數化菩薩以爲侍者變現自在滿十方世界譬如紅蓮華色

【訓讀】 舉身の光中に五道の衆生の一切の色相皆な中に於て現ず頂上には毗楞伽摩尼寶を以て天冠と爲し、其天冠の中には一の立る化佛有り高さ二十五由旬なり、觀世音菩薩の面は閻浮檀金の色の如く、眉間の毫相には七寶の色を備へて、八萬四千種の光明を流出す一々の光明に無量無數百千の化佛有て、一々の化佛は無数の化菩薩を以て侍者と爲し、變現自在にして十方世界に滿つ、譬へば紅蓮華

の色の如し。

【和解】 舉身とは全身の意味で、此菩薩の全身光明の中には五道の衆生とて、修羅人間地獄餓鬼畜生の有らゆる色相を現せらる、其色相を現せらるゝのは五道の衆生を救済ん爲めにて、頂上に在る摩尼寶玉の天冠の中には、高さ二十五由旬なる一の化佛が立ち給ふ、其化佛は阿彌陀如來で、此菩薩は因位の時阿彌陀如來を師とし給ふたに因つて、師恩を報答せんが爲めに斯く天冠に本師の化佛を戴かるゝのである、亦此の菩薩の面は閻浮檀金色にて、眉間に在る白毫相には七寶の色を備へて、八萬四千種の光明を流出さる、一々の光明に無量無數の化佛有つて、一々の化佛は亦た無數の化菩薩を以て侍者と爲し、其の變現の自在なること譬へば紅蓮華の色の如しと、化佛菩薩が十方に徧滿して種々なる化現を示し給ふこと、譬へば紅蓮華の池中に滿ちて、いと美麗き色に見ゆるが如くである。

有八十億光明以爲瓔珞其瓔珞中普現一切諸莊嚴事手掌作五百億雜蓮華色手十指端一々指端有八萬四千畫猶如印文一々畫有八萬四千色一々色有八萬四千光其光柔輒普照一切以此寶手接引衆生

【訓讀】八十億の光明有て以て瓔珞と爲し、其瓔珞の中に普く一切の諸の莊嚴の事を現す、手掌には五百億の雜蓮華色を作し、手の十指の端なる一々の指端には八萬四千の畫有て猶し印文の如く、一々の畫に八萬四千の色あり、一々の色に八萬四千の光有り其光柔輓にして普く一切を照し、此寶手を以て衆生を接引す。

【和解】亦此の菩薩には八十億の光明有て其光明を瓔珞と爲し、瓔珞の中には普く一切の莊嚴の事を現すと、莊嚴の事とは極樂淨土の一切の莊嚴及び其他の佛事を稱するので亦此の菩薩の手掌には五百億の雜蓮華の色を現はし、其の指端には八萬四千の畫有りとて、八萬四千の指紋が有つて、鮮明なること印畫の如く、其一々の畫に亦た八萬四千の色有つて、一々の色にも亦た八萬四千の光があり、其光り強烈ならず柔輓にして一切世界を照さる、斯かる微妙の寶手を以て有らゆる衆生を接引すとて、此手を以て極樂淨土へ接引るのである。

舉足時足下有千輻輪相自然化成五百億光明臺下足時有

金剛摩尼華布散一切莫不彌滿其餘身相衆好具足如佛無異唯頂上肉髻及無見頂相不及世尊是爲觀世音菩薩眞實色身想名第十觀

【訓讀】足を舉る時には足下に千輻輪相有り、自然に化して五百億の光明臺と成る、足を下す時には金剛摩尼の華有り、一切に布散して彌滿せずといふこと莫し、其餘の身相衆好具足し佛の如くにして異なること無し、唯だ頂上の肉髻及び無見頂相のみ世尊に及ばず是を觀世音菩薩の眞實の色身を觀する想と爲し、第十觀と名く。

【句義】千輻輪相は佛の足裏に在る勝相にて、四相十六好八文有りと傳へて有る、四相とは輪相、指端長纖相、足指鞞細相、足跟廣平相の四で、十六好とは五指の指端に各獅子口有り、亦其の端に寶印の如き螺形があり、亦た卍字形があり、尙亦た足跟に梵王頂相といふのが有つて、是れに五指の各相を合せば十六好で、八文とは金剛杵、魚王、華瓶、螺形、日像、寶幢、華輪、茅艸の八にて、大和藥師寺に在る佛足石を始めとして佛足石圖

といふ印書にも其圖がある、無見頂相とは肉髻相の別稱とも云ふ可く、肉髻相は三十二相の中にて、無見頂相は其相の勝れたる八十隨形好の一好を稱し、世尊に及ばずとは佛の肉髻は螺髮なれども、菩薩のは多く結髮にて、佛と菩薩と異なる所有るを云ふ。

【和解】亦此の菩薩が足を挙げ給ふ時には、佛と異らぬ千輻輪相が有つて、それが足下の足跡に現はるので、其の現はれたる輪相は自然に化して五百億の光明臺と成つて足を擎げ、亦其の足を下し給ふ時には、金剛摩尼華の蓮華を踏み、華と香とが布散て、一切如何なる所までも徧滿せずといふこと莫く、菩薩の身相是の如くに具足して佛と異なる所が無い、けれども頂上の肉髻と無見頂相のみは幾分世尊に及ばぬので、是を觀世音菩薩の眞實の色身を觀する想として、第十觀と名けるのである。

佛告阿難若有欲觀觀世音菩薩者當作是觀作是觀者不遇諸禍淨除業障除無數劫生死之罪如此菩薩但聞其名獲無量福何況諦觀若有欲觀觀世音菩薩者先觀頂上肉髻次觀天冠其餘衆相亦次第觀之亦令明了如觀掌中作是觀者名爲正觀若他觀者名爲邪觀

【訓讀】

佛阿難に告たまはく、若し觀世音菩薩を觀ぜんご欲する者有らば、當に是觀を作すべし、是觀を作す者は諸禍に遇ず業障を淨除して無數劫の生死の罪を除く、此の如きの菩薩は但だ其名を聞すら無量の福を獲、何に況んや諦かに觀ぜんをや、若し觀世音菩薩を觀ぜんご欲する者有らば、先づ頂上の肉髻を觀じ次に天冠を觀ぜよ、其餘の衆相亦次第に之を觀じて、亦た明了なるご掌中を觀るが如くならしむべし、是觀を爲すをば名けて正觀とし、若し他觀するをば名けて邪觀ご爲す。

【和解】此の觀世音菩薩を觀んとする者は、此の觀行を爲すべく、此の觀行を爲す者は一切の業障を淨除て諸の禍災に遇はず、亦た無數劫の罪をも除かる、此の菩薩の如きは但だ其名を聞くすらも、無量の福を獲るので有るから、何に況んや諦かに觀せんをやと、此の觀行を爲す者にして、業障を除きて災禍に遇はぬは何の疑ふ所も無い、されば此の菩薩を觀するには、先づ頂上の肉髻を觀じ次に天冠を觀すべく、其餘の身相亦た次第に觀じ

て明了ならしむること、自ら掌中を觀るが如くせよと、是觀を爲すをば名けて正觀とし、若し他觀するをば名けて邪觀とするのである。

次復應觀大勢至菩薩此菩薩身量大小亦如觀世音圓光面各百二十五由旬照二百五十由旬舉身光明照十方國作紫金色有緣衆生皆悉得見但見此菩薩一毛孔光即見十方無量諸佛淨妙光明是故號此菩薩名無邊光以智慧光普照一切令離三塗得無上力是故號此菩薩名大勢至

【訓讀】次に復た大勢至菩薩を觀すべし、此菩薩の身量大小亦た觀世音の如く、圓光は面各百二十五由旬にして、二百五十由旬を照す、舉身の光明十方國を照すに紫金の色を作し、有緣の衆生皆悉く見ることを得、但だ此菩薩の一毛孔の光を見れば、即ち十方無量諸佛の淨妙の光明を見たてまつる、是故に此菩薩を號して無邊光と名け、智慧の光を以て普く一切を照し、三塗を離れしむるに無上力を

得たり、是故に此菩薩を號して大勢至と名く。

【和解】次には阿彌陀如來の右邊に在せる勢至菩薩を觀するので、勢至菩薩の身量は觀音菩薩に異り無く、其圓光の面積は百二十五由旬にして二百五十由旬を照し、全身の光明十方國を照らさるゝに、其光明に觸るゝもの何れも紫金の色を爲して、有緣の衆生皆悉く見ることを得と、有緣の衆生とは此菩薩に結縁する衆生の意味で、極樂往生を願ひて念佛する者は、此菩薩の本意に適ふので有るから、最も有緣の衆生にして、其光明を見ることを得るのである、亦此の菩薩の一毛孔の光明を見る者は、十方無量諸佛の清淨にして微妙なる光明をも見ることを得べく、斯く一毛孔の光明にも特殊の徳を有せらるゝは、阿彌陀如來に異り無しとて、是故に此菩薩を號して無邊光と名くと、無邊光とは阿彌陀如來の光明を讚へし徳號の一にして、其徳號と同様なる別稱を得らるゝので、亦此の菩薩の智慧の光は普く一切衆生を照して、三塗の苦痛を離れしむるに、無上の力を得たるが故に、亦此の菩薩を大勢至と名くと、勢とは力勢にて至とは至極の意味で有つて、絶對至極の力勢即ち無上力を有せらるゝ義を以て、大勢至とは名けられた。

此菩薩天冠有五百寶華一々寶華有五百寶臺一々臺中十

方諸佛淨妙國土廣長之相皆於中現頂上肉髻如盃頭摩華於肉髻上有一寶瓶盛諸光明普現佛事餘諸身相如觀世音等無有異

【訓讀】此菩薩の天冠には五百の寶華有り、一々の寶華に五百の寶臺有り、一々の臺中には十方諸佛の淨妙國土の廣長の相皆な中に於て現ず、頂上の肉髻は盃頭摩華の如く、肉髻の上に於て一の寶瓶有り、諸の光明を盛て普く佛事を現ず、餘の諸の身相は觀世音の如く、等くして異り有ること無し。

【和解】此菩薩の天冠は五百の寶華を以て莊嚴せられ、一々の寶華には五百の寶臺有つて、其寶臺中に十方淨土の相を現じ、亦た頂上の肉髻は盃頭摩華の如くとして、盃頭摩華とは赤色蓮華の梵語にて、其肉髻の美麗きこと赤色蓮華を見るが如く、其美麗き肉髻の上には光明輝く寶瓶が有つて、其寶瓶の光明には普く一切の佛事を現すと、淨土に於ける有らゆる佛事を映現せらる、其餘の身相は觀音菩薩の身相と等くして異りが無い。

此菩薩行時十方世界一切震動當地動處有五百億寶華一々寶華莊嚴高顯如極樂世界此菩薩坐時七寶國土一時動搖從下方金光佛刹乃至上方光明王佛刹於其中間無量塵數分身無量壽佛分身觀世音大勢至皆悉雲集極樂國土側塞空中坐蓮華座演說妙法度苦衆生作是觀者名爲正觀若他觀者名爲邪觀見大勢至菩薩是爲觀大勢至色身想名第十一觀

【訓讀】此菩薩の行く時には十方世界一切震動す、地の動する處に當りて五百億の寶華有り、一々の寶華は莊嚴高顯なること極樂世界の如し、此菩薩の坐する時には七寶國土一時に動搖す、下方の金光佛刹より乃し上方の光明王佛刹に至るまで、其中間に於る無量塵數の分身の無量壽佛、分身の觀世音大勢至皆悉く雲の如くに極樂國土に集り、空中に側塞て蓮華座に坐し、妙法を演說して苦の衆生を

度したまふ、此觀を作をば名けて正觀とし、若し他觀するをば名けて邪觀と爲す、大勢至菩薩を見る是を大勢至の色身を觀する想と爲し、第十一觀と名く。

【和解】此菩薩の行く時とは、教化の爲めに極樂淨土の本坐を起ちて、他の十方世界へ行かるゝ時にて、其時には十方世界が震動して、其處に五百億の寶華が現はる、現はれたる寶華は莊嚴高顯とて、最勝にして微妙なること本國極樂淨土の如しと、亦此の菩薩の十方世界より本坐に歸つて坐する時には、七寶國土一時に動搖すと、七寶國土とは極樂國土を意味するので、極樂世界の七寶國土が一時に動搖を感じて、下方は金光佛の淨土より、上方は光明王佛の淨土に至るまでの、其中間に在る無量塵數の阿彌陀如來と觀音勢至の分身が、皆悉く雲の如くに此の極樂淨土に集り給ふと、分身とは阿彌陀如來及び二菩薩の身を分ちて、十方佛刹に在るのが本國に集り給ふので、其三尊が空中に側塞て蓮華座に坐し、苦の衆生を濟度べく、各妙法を演說せらると、此の觀行を爲すをば正觀とし、若し他觀するをば邪觀と名け、是の如くに此菩薩を見るのを大勢至菩薩の色身を觀する想として第十一觀と名けるのである。

觀此菩薩者除無量劫阿僧祇生死之罪作是觀者不處胞胎常遊諸佛淨妙國土此觀成已名爲具足觀觀世音大勢至

【訓讀】此菩薩を觀する者は無量劫阿僧祇の生死の罪を除き、是觀を作す者は胞胎に處せず、常に諸佛の淨妙國土に遊ぶ、此觀成じ已るを名けて、具足して觀世音大勢至を觀すと爲す。

【和解】此菩薩を觀する者は、無量阿僧祇劫の生死の罪を除き、亦た此觀行を作す者は胞胎に處せずと、胞胎とは母の胎内との意味にて、三界六道の衆生は多く母の胎内に處して生を受け、爾も種々なる苦を感ずるのであるが、今此の觀行を爲す者は母の胎内即ち胞胎に處せずして、常に諸佛淨妙の國土に遊ぶと、諸佛淨妙の國土とは極樂淨土を主とせる諸佛の淨土にて、三界六道に於ける胞胎の苦を受けず、直ちに淨妙なる極樂淨土に往生すべしと、此觀行の成就するをば前觀と俱に具足して觀音勢至の二菩薩を觀すと爲すのである。

見此事時當起自心生於西方極樂世界於蓮華中結跏趺坐作蓮華合想作蓮華開想蓮華開時有五百色光來照身想眼

目開想見佛菩薩滿虛空中水鳥樹林及與諸佛所出音聲皆演妙法與十二部經合出定之時憶持不失見此事已名見無量壽佛極樂世界

【訓讀】 此事を見る時當に自心を起すべし、西方極樂世界に生れて蓮華の中に於て結跏趺坐し、蓮華合する想を作し蓮華開ける想を作せ、蓮華開ける時には五百色の光有り、來りて身を照すご想せよ眼目開くご想せよ、佛菩薩の虚空の中に滿たまへるを見ごき、水鳥樹林及與び諸佛の出す處の音聲、皆な妙法を演べ十二部經ご合す、出定の時憶持して失せざれ、此事を見已るを無量壽佛の極樂世界を見るご名く。

【和解】 此事を見るとは最初の日想觀より勢至觀迄の十一觀を云ふので、其十一觀の觀行を爲せし時は、當に自心を起すべしと、前來の十一觀は佛身光明及び淨土の莊嚴を觀じたので、未だ自身の往生を想して無いから、此觀にては自ら心を起して自身の往生を想す

るのである、さて西方極樂淨土に往生すれば、蓮華の中に結跏趺坐すと七寶蓮華の中に坐するので、先づ其蓮華の合する想と開く想とを爲して、開く時には五百色の光明有つて吾身を照し、證果の眼目開けては、佛と菩薩が虚空の中に滿ちたまへるを見たてまつる、其時水鳥樹林とて前段にも有るが如く、水の流れも鳥の聲も寶樹の風も、及び諸佛の出し給ふ音聲も皆な妙法の演説なるを聞くので有つて、其演説は十二部經に合して更に異なる所無きを、出定の時とて此觀行を終る時にも、尙ほ記憶して失せざれと、十二部經とはすべての大乗經典には、十二の深義を具備すとて大乘經の稱とするので、其十二部經に合すとは、水鳥樹林の音聲も諸佛の演べ給ふ妙法も、皆悉く大乘經の義に合して、異り無しとの意味である。

見此事已名見無量壽佛極樂世界是爲普觀想名第十二觀無量壽佛化身無數與觀世音大勢至常來至此行人之所

【訓讀】 此事を見已るを無量壽佛の極樂世界を見るご名け、是を普觀想ごして第十二觀ご名く、無量壽佛の化身無數にして觀世音大勢至ご與に、常に此行人の處に來至したまふ。

【和解】 此事を見已るとは、此の極樂往生の想を爲して、水鳥樹林の説法を記憶すればとの意味にて、それを名けて無量壽佛の極樂世界を見たとし、是を普觀想として第十二觀と名くと、普觀想とは普往生觀想といふべきを略されたので、普往生觀想とは極樂淨土に往生して、佛菩薩の眞相及び莊嚴と水鳥樹林に至る迄も皆普く觀るとの義にして、阿彌陀如來無數の化身は觀音勢至の二菩薩と與に、此の觀行を爲す人の所に來至て、常に其人を護念たまふのである。

四五〇

佛告阿難及韋提希若欲至心生西方者先當觀於一丈六像
在池水上如先所說無量壽佛身量無邊非是凡夫心力所及
然彼如來宿願力故有憶想者必得成就但想佛像得無量福
何況觀佛具足身相

【訓讀】 佛阿難及び韋提希に告たまはく、若し至心あつて西方に
生れんご欲せば、先當に一の丈六の像の池水の上に在せるを觀すべ
し、先の所説の如く無量壽佛は身量無邊にして、是れ凡夫心力の及
ぶ所に非ず、然るに彼の如來の宿願力の故に、憶想すること有らば

必ず成就することを得、但だ佛像を想するすら無量の福を得、何に
況や佛の具足せる身相を觀ぜんをや。

【和解】 若し至心あつてとて眞實に西方淨土へ往生せんと欲する者は、先づ其淨土の池
水の中なる寶蓮華の上に、一の丈六の像として身量一丈六尺ばかりの、阿彌陀如來の形像の
在ることを想するので、斯く丈六の形像を想するのは、先の所説の如くとて第九觀にも説
き給ふた如くに、阿彌陀如來の身量は六十萬億の無邊身にて、其眞身を觀せんとするは是
れ凡夫心力の及ぶ所に非ずと、吾人凡夫の及ばぬ所である、是れに依つて先づ此の形像を
想することを教へ給ふので、如何に吾人の凡夫にても至心に形像を想すれば、彼の如來の
宿願力とて阿彌陀如來の誓願力にて、次第に其觀成就して終には眞身を見ることを得べく
但だ佛の形像を想するすら、無量の福とて、有らゆる生死の罪を滅して無量の功德を得る
ので有るから、何に況や身相具足し給へる佛の眞身を觀せんをやと、其眞身を見るを得ば
無邊の功德有ること云ふ迄も無い。

阿彌陀佛神通如意於十方國變現自在或現大身滿虛空中
或現小身丈六八尺所現之形皆眞金色圓光化佛及寶蓮華

如上所說觀世音菩薩及大勢至於一切處身同衆生但觀首
相知是觀世音知是大勢至此二菩薩助阿彌陀佛普化一切
是爲雜想觀名第十三觀

【訓讀】阿彌陀佛は神通如意にして、十方國に於て變現したまふ
こと自在なり、或は大身を現すれば虚空の中に満ち、或は小身を現
ずれば丈六八尺なり、現する處の形は皆な眞金色にして、圓光の化佛
及び寶蓮華は上の所說の如し、觀世音菩薩及び大勢至は一切の處に
於て身同じ、衆生但だ首相を觀て是れ觀世音なりと知り是れ大勢至
なりと知る、此二菩薩は阿彌陀佛を助けて普く一切を化す、是を雜
想の觀と爲し第十三觀と名く。

【和解】阿彌陀如來は神通如意にして一切衆生の意志に應じ、十方國に於て種々なる化
益を爲んとて、其身を變現し給ふこと自在である、是に依つて或は大身を現じ給へば虚空
に満ち、或は小身を現じ給へば一丈六尺亦は八尺の身相を示さる、其現はし給ふ所の形は皆

な眞金色にして、圓光化佛及び寶蓮華は上の所說の如しと、圓光化佛は第九觀に、寶蓮華
は第七觀に説き給ふ如くで有つて、觀音勢至の二菩薩は一切の所に於て身同じと、其身量
は同様に例へば觀世音が八尺の身をせば、大勢至も同く八尺の身を現じて、其他の身
相にも異りが無い、異なる所は首相とて頂上に在る天冠に化佛を戴くを是れ觀世音なりと知
り、寶瓶有るのを是れ大勢至なりと知らるゝので、此二菩薩は阿彌陀如來と深き因縁有る
を以て、影の形に隨ふ如く佛を助けて相離れず一切衆生を化益せらる、是を雜想の觀と爲
して第十三觀と名くと、雜想とは他の觀行と異つて此觀では、佛の形像や寶蓮華や觀音勢
至の二菩薩や種々に雜へて觀想する義で、他の觀行を爲し得ざる者の爲めに此雜想を説
き給ひて、先づ形像より眞佛へ淺きより深きへと、漸次に觀想することを教へられたので、
亦た漸觀とも稱するのである。

以上十三の觀行は之を定善と稱し、初め韋提希夫人が極樂往生の觀行として、我に思惟
を教へたまへ我に正受を教へたまへとの致請に因つて説き給ふた、けれども衆生の機類と
て衆生各機の不同が有つて、此雜想觀の如きですら、尙ほ作し難き者が多い、況や其他の
觀行は定機といふのを除きて、常に心の散亂せる者の到底及ぶ所で無い、此義を察知し給
ふた釋迦牟尼佛は、韋提希夫人の致請無きにも拘らず、それらの衆生の爲めに是より以下

に於て、佛自ら三輩九品往生の相を説き給ふので、十三觀を定善と名けるに對して、之を散善と稱するのである。

佛告阿難及韋提希上品上生者若有衆生願生彼國者發三種心即便往生何等爲三一者至誠心二者深心三者回向發願心具三心者必生彼國

【訓讀】 佛阿難及び韋提希に告たまはく、上品上生の者は若し衆生有て彼國に生れんと願はば、三種の心を發すべし即便ち往生す何等を三と爲す、一には至誠心、二には深心、三には回向發願心、三心を具すれば必ず彼國に生る。

【和解】 上品上生とは極樂往生を願ふ衆生に、上中下輩の三類が有りとして、其品類の勝れたるを上輩の上品とし、劣れるをば下輩の下品とするので、斯く上中下の差別有るは往生する衆生に就ての階級にて、淨土に於ける階級では無い、けれども上輩の人は勝れし品類なれば勝れし果報を受け、下輩の人は劣れるに因つて亦た劣れる果報を感ずるのは當然にて、淨土に階級無けれども果報に差別有るは是非無き次第で、それを分類て上品上生

亦は下品下生と稱するのである。

扱て上品上生の者とは、若し衆生有つて彼國に生れんと願はばとて、極樂淨土の彼國に往生せんとするならば三種の心を發すべく、三種の心を發す者は即便ち往生するので有つて、三種の心とは一に至誠心とて、其往生を願ふ心が眞實にして虚偽無く、亦た其修行の上にて於ても飾りを爲さず、内外表裏有ること無くして、佛を念ふこと幼兒の母を慕ふが如く、淨土を欣求こと渴して水を求むる如くに、何の飾りも偽りも無き心情を云ふので、二に深心とは深く信する心なりとて、佛の本願を疑はずして念佛を稱ふる者は、假令い何なる人にも必ず往生すべしと信する義にて、三に回向發願心とは稱ふる念佛は勿論にて、其他有らゆる所作の善事功德を、皆悉く往生の爲めに回向するので、回向とは唯だ一筋に振向て餘事に爲さぬ意味にして、念佛其他の善事功德も唯だ往生の一事に振向け、餘事を願はぬ心意氣にて、此の三心を極樂往生の安心と稱するので、安心とは安意亦は安神と云ふが如き意味では無く、安は安置の義なりとて、意志の持様、置き所と云ふ義にて、極樂往生を願ふ者は此三心の意志を持ち、此三心の如くに意志を安置て動かさぬのである、されば此三心を具するとして、其一心をも缺ける事無く、是を具備する者ならば、必ず彼國に生るべしと。

復有三種衆生當得往生何等爲三一者慈心不殺具諸戒行
二者讀誦大乘方等經典三者修行六念回向發願願生彼國
具此功德一日乃至七日即得往生

【訓讀】復た三種の衆生有て當に往生を得べし、何等を三とす、
一には慈心にして殺さず諸の戒行を具す、二には大乘方等經典を讀
誦す、三には六念を修行し、回向發願して彼國に生れんと願ふ、此
功德を具して一日乃至七日すれば、即ち往生するを得。

【句義】大乘方等經典とは大乘經を讀誦する意味にて、方等とは大乘の通名なりとて、
有らゆる大乘經には皆此の方等といふ義が有るので、方等即ち大乘にて別に經典が有るの
では無い、六念を修行すとは六念法とて、念佛念法念僧念戒念捨念天の修行を云ふので、
念佛とは阿彌陀如來及び諸佛の功德を念する義にて、念法とは其諸佛が證し給ふ所の法を
念じ、念僧とは一切の諸菩薩を念じ、念戒とは諸佛の戒法にて、念捨とは諸佛諸菩薩が吾
人衆生の爲めに難作の行を作し、捨て難きを能く捨て給ふたのを念するので、念天とは諸
の菩薩が三祇長劫の修行を終り、萬徳の行既に成滿せらるゝを念する意味にて、其時菩薩

は最後身とて兜率天に在りとの義に因つて念天と云ふ。

【和解】復た三種の衆生が有つて往生することを得べく、三種類とは一に慈心にして
殺さずと、慈悲の心を以て殺生を爲さず、亦た諸の戒法を持ち、二に大乘の經典を讀誦
し、三に六念を修行するので、是を以て回向發願して此功德をば極樂往生の爲めに振向
れば、一日乃至七日とて長の期間の修行は無論、假令ひ一日七日の功德にても、即ち往生
するのである。

生彼國時此人精進勇猛故阿彌陀如來與觀世音大勢至無
數化佛百千比丘聲聞大衆無數諸天七寶宮殿觀世音菩薩
執金剛臺與大勢至菩薩至行者前

【訓讀】彼國に生るゝ時、此人精進勇猛なるが故に、阿彌陀如來
觀世音大勢至、無數の化佛百千の比丘、聲聞大衆無數の諸天七寶の
宮殿と與にして、觀世音菩薩は金剛臺を執り大勢至菩薩と與に、行
者の前に至らる。

【和解】彼國とは極樂淨土にして、此人とは三種の心を發した人と復た三種の衆生に

て、此人が彼國に生る、時節到來すれば、精進勇猛の故に、志を以て精進なる修行を爲せしが故に、阿彌陀如來は觀音勢至の二菩薩及び無數の化佛、百千の比丘聲聞大衆無數の諸天と與に來迎たまふので、それと同時に七寶の宮殿とて、極樂淨土の宮殿樓閣其他の莊嚴も眼前に現はれ、觀音菩薩は金剛臺とて此人の乘るべき蓮華座を執つて、勢至菩薩と與に行者の前へと至らると、行者とは此の往生すべき人を云ふので、即ち此人の前へと近づき給ふのである。

阿彌陀佛放大光明照行者身與諸菩薩授手迎接觀世音大勢至與無數菩薩讚歎行者勸進其心行者見已歡喜踊躍自見其身乘金剛臺隨從佛後如彈指頃往生彼國

【訓讀】 阿彌陀佛は大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩と與に手を授けて迎接したまひ、觀世音大勢至は無數の菩薩と與に、行者を讚歎して其心を勸進せらる、行者見已て歡喜踊躍し、自ら其身を見れば金剛臺に乗り、佛後に隨從て彈指の頃の如くに彼國に往生す。

生す。

【和解】 其時阿彌陀如來は大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩と與に御手を以て迎接たまへば、觀音勢至の二菩薩は其他の菩薩と諸共に、行者を讚嘆して其心を勸進す。此人の精進勇猛なりしことを讚て、愈心を勸進さるゝので、此人既に來迎の嚴儀を見亦此の讚嘆を聞きて、踊躍んばかりの歡喜を爲し、自ら其身を見れば早や觀世音菩薩が執りたまへる金剛臺へと打乗られ、佛の後に隨從て彈指の頃と指彈きをする程の、少時の頃に彼國に往生するのである。

生彼國已見佛色身衆相具足見諸菩薩色相具足光明寶林演說妙法聞已即悟無生法忍經須臾間歷事諸佛徧十方界於諸佛前次第授記還到本國得無量百千陀羅尼門是名上品上生者

【訓讀】 彼國に生れ已つて佛の色身の衆相具足したまへるを見たてまつり、諸の菩薩の色相具足せるを見る、光明寶林妙法を演説す

るを聞已つて即ち無生法忍を悟る、須臾の間を経て諸佛に歴史し十方界に徧して諸佛の前に於て次第に授記せられ、還つて本國に到りて無量百千の陀羅尼門を得、是を上品上生の者名く。

【和解】彼國に生れ已つては、阿彌陀如來の色身の衆相具足とて、三十二相八十隨形好を具備たまふを見奉り、亦た諸の菩薩の色相を見るのみならず、光明寶林皆俱に妙法を演説せるを聞きて、即座に無生法忍なる菩薩の悟りを得るので有つて、須臾の間に十方の淨土に到り諸佛に歴史て供養を爲し、其の諸佛の前に於て次第に授記せらるると、成佛すべき記録を受けて、頓て本國の極樂淨土に還れば、亦た無量百千の陀羅尼門を得べく、是を上品上生の者名けるので、陀羅尼門とは有らゆる善法を集めて散失せぬ義にして菩薩の中にも高く勝れし法位を得るとの意味である。

上品中生者不必受持讀誦方等經典善解義趣於第一義心不驚動深信因果不謗大乘以此功德回向願求生極樂國

【訓讀】上品中生の者は、必ずしも方等經典を受持し讀誦せざるも、善く義趣を解して第一義に於て心驚動せず、深く因果を信じ

上輩の二
上品中生

て大乘を謗らず、此功德を以て回向して極樂國に生れんことを願求ふ。

【和解】上品中生の者は上品上生の人の如く必ずしも大乘方等經典を讀誦せざるも、善く義趣を解して、善く方等經典の義趣を諒解して、第一義に於て心驚動せずとて、第一義とは諸法に了達すれば畢竟空で有つて此空の理は一切諸法に超絶して第一なりとの意味で、是の如き大乘の深義を聞きて更に狐疑はぬを心驚動せずと云ひ、亦深く因果の道理を信じて大乘の法を謗らず、此の信解の功德を回向して、極樂國に生れんことを願求するのである。

行此行者命欲終時阿彌陀佛與觀世音大勢至無量大衆眷屬圍繞持紫金臺至行者前讚言法子汝行大乘解第一義是故我今來迎接汝與千化佛一時授手行者自見坐紫金臺合掌叉手讚歎諸佛如一念頃即生彼國七寶池中

【訓讀】此行を行ずる者命終らんご欲する時には、阿彌陀佛觀世

音大勢至無量の大衆と與に、眷屬に圍繞せられ、紫金臺を携しめ行者の前に至りたまひ讚して言はく、法子汝大乘を行じて第一義を解せり、是故に我今來りて汝を迎接し、千の化佛と與に一時に手を授けたまふ、行者自ら見れば紫金臺に坐せり、合掌叉手して諸佛を讚歎したてまつる、一念の頃の如くにして即ち彼國の七寶池の中に生る

【和解】 此人往生の時節到來して此世の生命終らんとする時には、阿彌陀如來觀音勢至無量の大衆と與に眷屬に圍繞せられてとて、眷屬とは此の無量の大衆を意味するので、無量大衆の眷屬に圍繞たまひつゝ、觀世音菩薩に紫金臺を持せて其人の前に至り、法子汝大乘を行じて第一義を解すと、法子とは佛の法化より生ずる子といふ義、即ち佛子亦是佛弟子の意味にて、法子汝は大乘法を行じ第一義を諒解せりとて讚嘆したまひ、是故に我今來りて汝を迎ふと、千の化佛と與に御手を授けらる、此人自ら見れば早や紫金臺の上にいるので、合掌叉手と掌を合せて、阿彌陀如來及び諸佛を讚嘆たてまつりて、法悦感謝の意を表する程に、一念の頃の如くと少時の間に彼國に生れて、七寶池中に在るのである。

此紫金臺如大寶華經宿則開行者身作紫磨金色足下亦有

七寶蓮華佛及菩薩俱時放光明照行者身目即開明因前宿習普聞衆聲純說甚深第一義諦即下金臺禮佛合掌讚歎世尊

【訓讀】 此の紫金臺は大寶華の如く、宿を経て則ち開き、行者の身は紫磨金色と作り、足下に亦た七寶の蓮華有り、佛及び菩薩俱時に光明を放ちて行者の身を照したまひ、目即ち開明す、前の宿習に因て普く衆聲を聞に純ら甚深の第一義諦を説く、即ち金臺より下りて佛を禮し、合掌して世尊を讚歎したてまつる。

【和解】 此の紫金臺とは行者即ち往生人の坐して迎へられた金臺にして、其金臺は大寶華の如くにして宿を経て開くと、宿とは夜といふ義で有つて極樂淨土には晝夜の差別無けれども、蓮華の開くを以て晝とし閉るを以て夜とするので、此の金臺も寶蓮華の閉ちては開く如くにて、一旦閉ちて有つたのが頓て開ける意味にして、開くと同時に此人の身は紫磨金色とて、佛や菩薩と異り無き金色身を得て、足下にも七寶の蓮華が有り、佛と菩薩と一

四六四
時に俱に光明を放ちて、此人を照らし給へば、目即ち開明すと一旦華に閉ぢられたれば茲に眼の覺しが如くに、有らゆる淨土の衆聲を聞くのである、其衆聲は法音にして前の宿習に因つてとて、曾て自身が修學せる第一義諦を説くのを聞き、即ち金臺を下り合掌禮拜して、更に改めて世尊を讚嘆し奉る。

經於七日應時即於阿耨多羅三藐三菩提得不退轉應時即能飛行徧至十方歷事諸佛於諸佛所修諸三昧經一小劫得無生忍現前授記是名上品中生者

【訓讀】 七日を経て時に應じて即ち阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、時に應じて即能く飛行して徧く十方に至り、諸佛に歷事し諸佛の所に於て諸の三昧を修し、一小劫を経て無生忍を得て現前に授記せらる、是を上品中生の者と名く。

【句義】 阿耨多羅三藐三菩提は梵語にて、阿耨多羅を無上、三藐を正等、三菩提を正覺と翻譯して、無上正覺即ち佛果を成滿する義とす。

【和解】 其後亦た七日を経て阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得と、無上正覺の佛果

を成滿するまで、更に退轉せざる位不退といふのを得て、それと同時に神通を以て飛行して十方の佛國に至り、徧く諸佛を供養し奉り、諸佛の所に於て諸の三昧を修すと種々の修行を爲し、亦た一小劫といふ期間を経て無生忍の證を得、現前に授記せらるると佛の前にて成佛の證明記録を授けらる、是を上品中生の者と名けるのである。

上品下生者亦信因果不謗大乘但發無上道心以此功德回向願求生極樂國行者命欲終時阿彌陀佛及觀世音大勢至與諸眷屬持金蓮華化作五百化佛來迎此人五百化佛一時授手讚言法子汝今清淨發無上道心我來迎汝

【訓讀】 上品下生の者は、亦因果を信じて大乘を謗らず、但だ無上道心を發す、此功德を以て回向して極樂國に生れんことを願求ふ、行者命終らんと欲する時、阿彌陀佛及び觀世音大勢至、諸の眷屬と共に金蓮華を持し、五百の化佛を化作して此人を來迎したまひ五百の化佛一時に手を授けて讚して言はく、汝今清淨にして無上

道心を發せり、我來りて汝を迎ふこ。

【和解】 上品下生の者とは、亦た因果を信じてとて、亦とは此人曾ては因果を信せざる時もありしが、今亦た其れを信ずとの意味で、今は因果の道理を信じて大乘の法を謗らず、無上道心を發すとて、無上道心とは自己も往生し他をも往生させんと思ふ菩提心にて、其功德を回向して極樂へ生れんことを願求のである、されば此行者命終らんとする時には、阿彌陀如來觀音勢至諸の眷屬大衆、及び五百の化佛と與に、金蓮華を持して來迎たまひ、五百の化佛一時に手を授けて讚嘆たまふには、汝ち今ま罪業滅して清淨なるのみならず、亦た既に無上道心を發せり、是に依つて我來りて汝を迎ふこ。

見此事時即自見身坐金蓮華坐已華合隨世尊後即得往生七寶池中一日一夜蓮華乃開七日之中乃得見佛雖見佛身於衆相好心不明了於三七日後乃了々見聞衆音聲皆演妙法

【訓讀】 此事を見る時即ち自ら身を見れば金蓮華に坐せり、坐し已れば華合し世尊の後に隨ひて、即ち七寶池の中に往生するここを

得、一日一夜にして蓮華乃ち開き、七日の中に乃ち佛を見たてまつるここを得、佛身を見るこ雖も衆の相好に於て心明了ならず、三七日の後に於て乃ち了々こして見たてまつり、衆の音聲皆な妙法を演るを聞く。

【和解】 此の來迎の嚴儀を見る時、自ら吾身を見れば早や金蓮華に坐しつゝ、在る、けれども此の金蓮華は坐すると俱に華合して、其の儘世尊の後に隨ひ七寶池中に往生した後、一日一夜にして華が開け、亦た七日の中に於て佛身を見ることを得るので有つて、佛身を見ることは雖も微妙の相好に於ては尙ほ明了ならず、更に三七日を経て初めて了々に見たてまつり、其時衆の音聲とて有らゆる水鳥樹林の聲が、皆な妙法を演るのを聞くのである。

遊歷十方供養諸佛於諸佛前聞甚深法經三小劫得百法明門住歡喜地是名上品下生者是名上輩生想名第十四觀
【訓讀】 十方に遊歷して諸佛を供養し、諸佛の前に於て甚深の法を聞き、三小劫を経て百法明門を得て歡喜地に住す、是を上品下生

の者ご名け、是を上輩生想ご名け、第十四觀ご名く。

四六八

【和解】 既に了々に佛身を見奉つた後には、更に十方佛國を遊歴して諸佛を供養し、諸佛の前に於て甚深の妙法を聞き、三小劫を経て百法明門を得て歡喜地に住すと、諸佛の前にて妙法を聞きたる後、三小劫の間を経て種々百法の法門を明らめ、智慧を増長することを得たに因つて、歡喜の心に満ちたる證を歡喜地に住すといふので、是を上品下生の者と名け、亦た上輩生想と名けて第十四觀とするのである。

佛告阿難及韋提希中品上生者若有衆生受持五戒持八戒齋修行諸戒不造五逆無衆過患以此善根回向願求生於西方極樂世界臨命終時阿彌陀佛與諸比丘眷屬圍繞放金色光至其人所演說苦空無常無我讚歎出家得離衆苦

【訓讀】 佛阿難及び韋提希に告はく、中品上生の者ごは若し衆生有て五戒を受持し八戒齋を持し、諸戒を修行して五逆を造らず衆の過患無し、此善根を以て回向して西方極樂世界に生れんことを願求

中輩の一
中品上生

ば、命終る時に臨みて阿彌陀佛諸の比丘と與に眷屬に圍繞せられ、金色の光を放ちて其人の所に至り、苦空無常無我を演說し、出家して衆苦を離るゝことを得たるを讚歎したまふ。

【句義】 五戒は在家の人の持つべき戒法にて、殺生偷盜邪淫妄語飲酒を慎むので、八戒齋とは無量壽經和解の如く此五戒の外に歌舞往聽等の三戒を加へて、尚ほ不過中食といふことを持つ戒法にて、諸戒とは出家の持つべき有らゆる戒法を云ふ。

【和解】 中品上生の者ごは在家の人なれば五戒八戒齋を持ち、出家は其八戒齋及び其他の諸戒を破らず、俱に大罪なる五逆を造らず衆の過患無しとて多くの過患を犯さずして此善根を廻向して極樂往生を願ふ人にて、其人命終る時に臨み阿彌陀佛如來は諸の比丘と與にと、比丘とは僧形の意味にて觀音勢至の二菩薩が此時僧侶の形相を示さるので、其僧形の二菩薩と其他の眷屬諸共に、金色の光を放ちて其人の處に至り、苦空無常無我の法を演說せられ、若し其人が出家の身なれば、出家の功德を讚歎たまふのである。

行者見已心大歡喜自見己身坐蓮華臺長跪合掌爲佛作禮
未舉頭頃即得往生極樂世界蓮華尋開當華敷時聞衆音聲

四六九

讚歎四諦應時即得阿羅漢道三明六通具入解脫是名中品上生者

【訓讀】行者見已つて心大いに歡喜し、自ら己の身を見れば蓮華臺に坐したり、長跪合掌して佛の爲に禮を作し、未だ頭を擧ざる頃に即ち極樂世界に往生することを得て蓮華尋ち開く、華の敷く時に當りて衆の音聲の四諦を讚歎するを聞き、時に應じて即ち阿羅漢道を得、三明六通あつて八解脫を具す、是を中品上生の者名く。

【句義】四諦とは苦、集、滅、道の四にて、苦とは吾人の身體は總て苦にして、集とは其如き苦身を受けし因はと云へば罪業煩惱にて、其れを以て苦を招集めたりとの義、滅とは其業煩惱と苦とを滅する意味にて、道とは通行の義なりとて、業煩惱と種々の苦とを消滅すべき修行を爲すは、生死の迷ひを脱する行路なりとの義で、此四の道理を諦めるに因つて四諦と稱し、阿羅漢道とは小乘聲聞と云ふ法位に四果の階級有る中の第四の果證を得たる名にて、三明六通とは六神通の中の、宿命智通と他心智通と漏盡智通を三明とし、それに神境、天眼、天眼の三を加へて六通と稱し、八解脫とは八背捨とも稱して、不淨相

を觀じて色欲を捨てるとか、亦た貪愛の欲念を捨てるとかの八種の迷情を背捨のが、解脫の因なりとて八解脫と云ふ。

【和解】行者見已つて此人來迎の嚴儀に接して、心大に歡喜しつゝ、自ら己の身を見れば、早や蓮華臺の上に在るので長跪合掌して佛を禮し奉り、其敬禮の頭を擧げざる頃に即ち極樂淨土に往生を得るので有つて、一旦閉ぢたる蓮華臺の華も此時尋ち敷くと同時に有らゆる淨土の音聲が法音にて、殊に四諦を讚歎する聲を聞きては、三明六通の自由自在と八解脫とを得るに因つて、小乘聲聞の極果である阿羅漢道の果位に達す、是を中品上生の者と名けるのである。

中品中生者若有衆生若一日一夜受持八戒齋若一日一夜持沙彌戒若一日一夜持具足戒威儀無缺以此功德回向願求生極樂國戒香熏修如此行者命欲終時見阿彌陀佛與諸眷屬放金色光持七寶蓮華至行者前

【訓讀】中品中生の者は、若し衆生有て若は一日一夜八戒齋を受持ち若は一日一夜沙彌戒を持し、若は一日一夜具足戒を持ち、威

儀欠るこそ無し、此功德を以て回向して極樂國に生れんことを願ふ、戒香熏修するをもつて此の如き行者命終らんことを欲する時、阿彌陀佛諸の眷屬と與に金色の光を放ち、七寶の蓮華を持して行者の前に至りたまふを見たとまつる。

【句義】沙彌とは初めて出家して尙ほ俗情の存せる僧の名稱にて、其持つべき戒法を沙彌戒と號し、八齋戒の上に尙ほ二を加へたるものを云ひ、具足戒とは僧として持つべき最上の戒法にて、之を受持するをば大僧大尼と稱す。

【和解】中品中生の者とは一日一夜の間八齋戒を持ち、亦是沙彌戒、具足戒を持ち、威儀缺けること無しと動作進退悉く戒法に順じて律儀に違はず、此の功德を廻向して往生を願ふのである、されば戒香熏修とて持戒の徳を香に喩えて、香風遠く達する如く戒徳も亦た普く熏修に因つて、此人命終る時には阿彌陀如來觀音勢至等の諸の眷屬と與に、金色の光明を放ち七寶の蓮華臺を持して、其前に至りて來迎たまふと。

行者自聞空中有聲讚言善男子如汝善人隨順三世諸佛教故我來迎汝行者自見坐蓮華上蓮華即合生於西方極樂世

界在寶池中經於七日蓮華乃敷華既敷已開目合掌讚歎世尊聞法歡喜得須陀洹經半劫已成阿羅漢是名中品中生者

【訓讀】行者自ら聞けば空中に聲有り讚して言はく、善男子汝が如き善人三世諸佛の教に隨順ふが故に我來りて汝を迎ふと、行者自ら見れば蓮華の上に坐して、蓮華即ち合し、西方極樂世界に生れて寶池の中に在り、七日を経て蓮華乃ち敷く華既に敷き已れば目を開き合掌して世尊を讚歎し、法を聞て歡喜して須陀洹を得、半劫を経已つて阿羅漢を成ず、是を中品中生の者と名く。

【和解】其時空中に阿彌陀如來の讚言が有つて、善男子よ汝は善人にして、三世諸佛の教に隨順ふが故に我來りて汝を迎ふと、三世諸佛の教とは諸の惡を作ること莫れ、衆の善を奉行よとある諸佛通誡の意味にて、今此人が種々なる戒法を受持て、威儀に缺けたる處無きは、此の通誡に隨順ふ者なればとて、それを善人として讚言たまふので、其讚言を聞くと同時に、自身を見れば七寶蓮華の上に坐し、一旦華は合しても頓て七寶地の中に生れ、七日を経れば華敷き合掌して世尊を讚る、法を聞きて歡喜すと、法とは四諦の法にして、

四諦の法を聞きて須陀洹を得、亦た半劫の間を過て阿羅漢の果を得べく、須陀洹とは小乘聲聞に四果有る中の、初果の法位を得るので有つて、是を中品中生の者と名けるのである

中品下生者若有善男子善女人孝養父母行世仁慈此人命欲終時遇善知識爲其廣說阿彌陀佛國土樂事亦說法藏比丘四十八願聞此事已尋卽命終譬如壯士屈伸臂頃卽生西方極樂世界生經七日遇觀世音及大勢至聞法歡喜經一小劫成阿羅漢是名中品中生者是名中輩生想名第十五觀

【訓讀】 中品下生の者は、若し善男子善女人有て、父母を孝養し世の仁慈を行す、此人命終らんと欲する時、善知識の其が爲に廣く阿彌陀佛國土の樂事を説き、亦た法藏比丘の四十八願を説くに遇ひ、此事を聞已つて尋卽ち命終するに、譬は壯士の臂を屈伸する頃の如くに、卽ち西方極樂世界に生る、生れて七日を經て觀世音及び大勢至に遇ひ、法を聞て歡喜し一小劫を經て阿羅漢を成す、是を中

品下生の者名け是を中輩生想名け、第十五觀名く。

【和解】 中品下生の者とは善男子善女人とて、男子婦人の何れにても善事を好む人が有つて、父母を孝養し亦た世の仁慈を行すとて、慈悲同情の心を有して、有らゆる救濟慈善の事を爲さば、假令ひ一生淨土教を聞くべき機會無くして、佛教の信仰を得ること無くとも其善縁に因つて命終らんとする時には、善知識とて僧にも有れば俗にもあれ亦は知己親族にもあれ、淨土教を信する人に遇ふことを得るので有つて、其善知識より極樂淨土の樂事と亦た四十八願の大悲深重なる理を聞き、茲に初めて信仰の心を發し、曾て爲したる孝養父母や行世仁慈の善事を廻向して往生を願求ひなば、其時既に命終るとも必ず佛の來迎有つて、譬は壯士の臂を屈伸する頃の如くと、壯士とは壯年者にて壯年の人が臂を屈伸するは、何の造作も無き、最も少時の時間なりとの喩の意味で、此人命終るや否や壯士の臂を屈伸する如き、少時の頃に極樂淨土に生れ、七日を經たる後には觀音勢至の二菩薩に遇ひ、四諦の法を聞くことを得て、無量の法悅歡喜を爲し、亦た一小劫を經て阿羅漢の證果を得らる、是を中品下生の者として中輩生想と名け、第十五觀と名けるのである。

佛告阿難及韋提希下品上生者或有衆生作衆惡業雖不誹

謗方等經典如此愚人多造衆惡無有慚愧命欲終時遇善知識爲讚大乘十二部經首題名字以聞如是諸經名故除卻千劫極重惡業智者復教合掌叉手稱南無阿彌陀佛稱佛名故除五十億劫生死之罪

【訓讀】 佛阿難及比丘提希に告はく、下品上生の者は或は衆生有て衆の惡業を作る、方等經典を誹謗すも雖も此の如きの愚人、多く衆惡を造りて慚愧有こし無し、命終らんご欲する時善知識の爲に大乘十二部經の首題の名字を讚するに遇り、是の如きの諸經の名を聞くを以ての故に、千劫の極重の惡業を除卻し、智者復た教へて合掌叉手して南無阿彌陀佛と稱せしむ、佛名を稱するが故に五十億劫生死の罪を除く。

【和解】 下品上生の者とは衆多の惡業を作る衆生にて、方等經典を誹謗せずとて大乘佛教の理こそ誹謗ねども、多くの惡事を造り乍ら其れを慚愧ともせぬ愚人である、其人命終

らんと時に臨み幸に淨土教を信する善知識に遇ふて、其善知識より大乘十二部經の首題名字を讚すとて、十二部經とは大乘經の總稱にて、首題名字とは其題號の名義を意味するので例へば此の觀無量壽經とか阿彌陀經とかの題號の名義にて、此人命終るの時に臨んで善知識より、大乘經の首題の名義を聞くことを得たに因つて、千劫の間に於ける極重の惡業を除卻かれ、亦た智者とて其善知識より念佛を教ふるられたので、教への如く合掌して南無阿彌陀佛と稱えたのは、蓋し此人に取りて一生涯の間に於ける、念佛の唱え初めにして亦た唱え終りて有つたのである、けれども稱名の功德に因つては、五十億劫生死の罪を除きて化佛の來迎を受けるのである。

爾時彼佛即遣化佛化觀世音化大勢至至行者前讚言善男子汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝作是語已行者即見化佛光明徧滿其室見已歡喜即便命終乘寶蓮華隨化佛後生寶池中

【訓讀】 爾時彼佛即ち化佛化觀世音化大勢至を遣し、行者の前に至らしめて讚して言はく、善男子汝佛名を稱るが故に諸罪消滅せり

我來りて汝を迎ふこ、是語を作し已りたまふに即ち化佛光明の其室に徧滿するを見る、見已て歡喜して即便ち命終り、寶蓮華に乗り化佛の後に隨ひて、寶池の中に生る。

【和解】 爾時彼佛阿彌陀如來は、化佛化菩薩を遣はして、其人の前に至らしめ、汝念佛を稱ふるが故に諸罪消滅せり、我來つて汝を迎ふとの讚言を與へらる、此時既に化佛光明の其室内に徧滿して有るので、其人を見て歡喜に堪へず、其儘命終りて寶蓮華の上に乗せられ、化佛の後に隨ひて七寶池の中に生る。

經七々日蓮華乃敷當華敷時大悲觀世音菩薩及大勢至放大光明住其人前爲說甚深十二部經聞已信解發無上道心經十小劫具百法門得入初地是名下品上生者得聞佛名法名及聞僧名聞三寶名即得往生

【訓讀】 七々日を経て蓮華乃ち敷く、華の敷く時に當りて大悲觀世音菩薩及び大勢至、大光明を放ちて其人の前に住し、爲に甚深の

十二部經を説く、聞已つて信解して無上道心を發し、十小劫を経て百法門を具して初地に入こを得、是を下品上生の者名け、佛名法名を聞き及び僧名を聞くこを得、三寶の名を聞きて即ち往生を得。

【和解】 寶池の中に生れて後、七々日を経て蓮華乃ち敷くので、其華開の時に當りて大悲觀世音菩薩は大勢至菩薩と俱に、大光明を放ちて此人の前に住まり、爲めに甚深の十二部經を説くと、十二部經を説くとは、大乘の眞理を説くとの義にて、此人命終るの時には僅かに大乘經の首題名字を聞いたので有つたが、今斯く往生しては其甚深なる眞理を聞くこを得て、それに依つて此人聞已て無上道心を發すと、無上道心とは菩提心にて、其後亦た十小劫を経て百法門の功德を具備して初地と云ふ果を得らる、是を下品上生の者名けるので、次に佛名法名とて、阿彌陀如來の名號亦は諸佛の名を念する者、十二部經の首題の如き法の名を念する者、及び僧名とて菩薩の名を念する者を、三寶の名を聞く者として、亦此の下品上生の往生を得るのである。

佛告阿難及韋提希下品中生者或有衆生毀犯五戒八戒及

具足戒如此愚人偷僧祇物盜現前僧物不淨說法無有慚愧以諸惡業而自莊嚴如此罪人以惡業故應墮地獄命欲終時地獄衆火一時俱至

【訓讀】佛阿難及び韋提希に告はく、下品中生の者は或は衆生有て、五戒八戒及び具足戒を毀犯す、此の如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧物を盗み、不淨說法して慚愧有ること無く、諸の惡業を以て自ら莊嚴す、此の如きの罪人は惡業を以ての故に地獄に墮べく、命終らんと欲する時地獄の衆火一時に俱に至る。

【句義】僧祇物とは大衆物として寺院に於ける共有財産其他の什物類にて、現前僧物とは僧侶に布施供養せる金錢衣類等を云ひ、不淨說法とは無學にして學解有るが如くに法を説き亦是は利欲の爲めに説教する類を云ふ。

【和解】下品中生の者とは、五戒八戒を破り亦た僧として有らゆる戒法を毀犯する人にて此の如き愚人はと此様な破戒無慚愧の人は、假令學識有りと雖も開は物質的の學解にて精神上には愚人である、されば是等の人達は僧祇物として寺院共有の什物財産を、自己の勝

手に私用し亦は横領し、現前僧物として衆僧の爲めに布施供養せる物品を盜用し、亦た不淨說法として無學なるにも拘らず、學識有るが如くに法を説くとか、或は利欲の爲めに説教するなどは、何れも慚愧有ること無しと慚愧を知らざる處業にて、斯かる惡業を以て自ら莊嚴として居ると、此一段は僧侶の破戒を主要として有るやうなれども、檀中信徒亦是は居士とか稱する人達にして、若し寺院の財産所有地什物類及び祠堂寄附金等を、私用し横領すること有らば、即ち僧祇物や現前僧物を偷盜するので、僧侶の破戒と同罪なるべく、亦た無信仰なる人にして、謾に信者居士と稱し糊口の爲めに法義を説かば、亦是れ不淨說法の類にて、此の如きの罪人は應に地獄の中に墮べく、其命終るの時來れば地獄の衆火一時に至ると、種々怖るべき地獄の苦相が、先づ眼前に現はるのである。

遇善知識以大慈悲爲說阿彌陀佛十力威德廣說彼佛光明神力亦讚戒定慧解脫解脫知見此人聞已除八十億劫生死之罪地獄猛火化爲清涼風吹諸天華華上皆有化佛菩薩迎接此人如一念頃即得往生

【訓讀】善知識の大慈悲を以て、爲に阿彌陀佛の十力威德を説き

廣く彼佛の光明神力を説き、亦た戒定慧解脱解脫知見を讚するに遇ひて、此人聞已つて八十億劫生死の罪を除かれ、地獄の猛火化して清凉の風を爲り、諸の天華を吹に華上に皆な化佛菩薩有て、此人を迎接たまひ、一念の頃の如くに即ち往生するここを得。

【句義】 十力威徳とは阿彌陀如來内證智慧の威徳にて、是處非處力亦是業智力等の十箇の勝力有るを云ひ、光明神力とは阿彌陀如來外用光明の威徳にて、能く勝つ者無きに因つて十力亦是神力と稱し、戒定慧解脫とは阿彌陀如來が因位修行の時、戒定慧の三學を修して、それに因つて涅槃の解脫を得給ひし意味にて、解脫知見とは其戒定慧解脫の因を以て、佛果菩提の果を得給ひ、自由に衆生を救済する、義で、即ち解脫の活動を知見と云ふ。

【和解】 其時此人幸にも善知識に遇ふことを得て、其善知識が大慈悲心を以て、阿彌陀如來の大悲本願の理を説き、念佛を唱えさせんとて、阿彌陀如來に無量の佛徳有る中にも、殊に勝れし十力威徳や光明神力やの、内證外用の徳を讚え、亦た解脫知見とて衆生を救済し給ふのに、自由の活動有ることを説き聞かせたので、此人それを聞已りて茲に初めて後悔懺悔の心を發すと俱に、勧められたる念佛を唱えて、救済の御手に縋つたのである。

其時早くも八十億劫生死の罪を除かれ、今迄眼前に在りし地獄の猛火は、忽ち清凉の風と變り、風の中より許多の天華を吹散じて、華の上には化佛と菩薩が現はれ給ひ、此人を迎接して少時の頃に、即ち往生を得るのである。

七寶池中蓮華之内經於六劫蓮華乃敷當華敷時觀世音大勢至以梵音聲安慰彼人爲說大乘甚深經典聞此法已應時即發無上道心是名下品中生者

【訓讀】 七寶池の中の蓮華の内にして六劫を経て蓮華乃ち敷く、華の敷く時に當りて觀世音大勢至、梵音聲を以て彼人を安慰し、爲に大乘甚深の經典を説くに、此法を聞已つて時に應じて即ち無上道心を發す、是を下品中生の者名く。

【和解】 往生を得た後、七寶池の中の蓮華の内にて六劫を経て、其華乃ち敷くので、華の敷ける時に當りて觀音勢至の二菩薩は、梵音聲とて清く尊き聲を以て安慰られ、爲めに大乘甚深の經典とて大乘法の眞義を説き聞かせらる、其大乘の眞義を聞くに因つて、此人

即ち無上道心なる菩提心を發して頓て證果を得らるべく、是を下品中生の者と名けるのである。

佛告阿難及韋提希下品下生者或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善如此愚人以惡業故應墮惡道經歷多劫受苦無窮

【訓讀】 佛阿難及び韋提希に告はく、下品下生の者は或は衆生有て、不善の業なる五逆十惡を造り諸の不善を具す、此の如きの愚人は惡業を以ての故に應に惡道に墮て多劫を經歷し、苦を受ること窮り無るべし。

【和解】 下品下生の者とは、不善の業として最上なる五逆十惡の極惡を造り、諸の不善を具すと善事としては一毫も有ること無く、罪惡としては爲さるること無き人にて、此の如きの愚人とて假令知識學問有る人にも、善惡因果の道理を知らずば、天性無智の徒輩に異はらぬ愚人にして、其惡業を以ての故に應に惡道に墮て多劫の間、苦を受ること

窮まり無きは、是れ當然なる結果であると、此處に惡道とあるのは三惡道に通ずれども、主として地獄を意味するのである。

如此愚人臨命終時遇善知識種々安慰爲說妙法教令念佛此人苦逼不遑念佛善友告言汝若不能念者應稱無量壽佛如是至心令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛稱佛名故於念念中除八十億劫生死之罪命終之時見金蓮華猶如日輪住其人前如一念頃即得往生極樂世界

【訓讀】 此の如きの愚人命終の時に臨て、善知識の種々に安慰して、爲に妙法を説き教るて念佛せしむるに遇へり、此人苦に逼られて念佛するに遑あらず、善友告て言く汝若し念ずること能はざれば無量壽佛と稱すべしと、是の如く聲を絶ずして十念を具足し、南無阿彌陀佛と稱へしむ、佛名を稱ふるが故に念念の中に於て、八十億劫の生死の罪を除き、命終の時には金蓮華の猶し日輪の如くなるが

其人の前に住を見て、一念の頃の如くに即ち極樂世界に往生することを得。

【和解】此の如き愚人なれば命終の時には種々の苦相が現はるのである、然るに其時幸に善知識が有つて、其苦を安んずる爲めに妙法を説くとて、阿彌陀如来大悲本願の妙法あることを説き聞かせて念佛を勧められた、けれども此人苦に逼られて、病苦と死苦と尙ほ眼前に地獄の苦相が現はれて有るので、心静かに念佛すべき道が無い、其時亦も善友とて彼の親切なる善知識か或は其他の人が有つて、汝若し心静かに念佛すること能はずば強て心を静めるにも及ぶまじく、聲に任せて疑ひ無く唯だ南無阿彌陀佛と稱すべく、イザ我が聲に随ひて其念佛を稱へよと教へられたので、此人教への儘に善知識の聲に随ひ漸く十聲を稱へたのを、聲を絶えずして十念を具足すと云ふので、十念具足と云ひ乍ら必ずしも十聲には限らず、若し時間有れば二十三十、若し時間無ければ一聲にても、助け給へと念ふ心に偽り無くば、其聲毎に八十億劫生死の罪を除かれて、いよいよ命終の時に至れば地獄の苦相に打變りて、金蓮華の光り耀くこと日輪の如くなるが、吾が眼前に在るを見て即ち往生を得るのである。

於蓮華中滿十二大劫蓮華方開觀世音大勢至以大悲音聲爲其廣說諸法實相除滅罪法聞已歡喜應時即發菩提之心是名下品下生者是名下輩生想名第十六觀

【訓讀】蓮華の中に於て十二大劫を滿して蓮華方に開く、觀世音大勢至大悲の音聲を以て、其が爲に廣く諸法實相除滅罪の法を説く聞已つて時に應じて即ち菩提の心を發す、是を下品下生の者ご名け是を下輩生想ご名け、第十六觀ご名く。

【和解】淨土に往生を得た後、十二大劫の間蓮華の中に在つたが、其期を過ぎて蓮華方に開くれば、觀音勢至の二菩薩は大悲の音聲を以て、此人の爲めに諸法實相除滅罪の法を説くと、總ての罪惡は縁に從つて生ずるもので、元來罪惡といふ自性は無い理にて、唯だ罪惡のみならず一切諸法も皆其の如くなるを諸法實相と稱し、此の理を念するのが除滅罪の法とて、是れに依つて一切の罪業を消滅する義を説き聞かざる、此人是を聞已て前には八十億劫の罪を除かれ、今亦た其餘の除滅罪の法を聞いたのを歡喜び、即時に菩提心を發

して頓て證果を得べく、是を下品下生の者として下輩生想と名け、第十六觀と名けるのである。

說是語時韋提希與五百侍女聞佛所說應時即見極樂世界
廣長之相得見佛身及二菩薩心生歡喜歎未曾有廓然大悟
得無生忍五百侍女發阿耨多羅三藐三菩提心願生彼國世
尊悉記皆當往生生彼國已得諸佛現前三昧無量諸天發無
上道心

【訓讀】 是語を説たまふ時、韋提希五百の侍女と與に佛の所説を
聞き、時に應じて即ち極樂世界の廣長の相を見、佛身及び二菩薩を
見ここを得て、心に歡喜を生じ未曾有なることを歎じ、廓然と大悟
して無生忍を得、五百の侍女は阿耨多羅三藐三菩提心を發して、彼
國に生れんことを願へり、世尊悉く皆當に往生すべく彼國に生已つ
て、諸佛現前三昧を得んことを記したまひ、無量の諸天は無上道心

を發しぬ。

【和解】 是語を説きたまふ時とは、此三輩九品の次第を説き終り給ふた時にて、其時韋
提希夫人は五百人の侍女と與に佛の所説き聞奉り、時に應じて極樂世界の廣長の相とて
前には親しく淨土の莊嚴を見、亦た第七觀の時には佛身及び二菩薩が空中に住立して現は
れ給ふたのを見、尙ほ懇切なる佛の所説を聞いたので、是れ未曾有の事なりとて、初めは
吾子の暴惡に對して怨みもしたり歎きもしたので有つたが、今は其等の妄情悉く打忘れ
て、唯々法悅歡喜の心のみなれば、茲に廓然大悟して無生忍の證果を得た、其れと同時に
五百の侍女も菩提心を發して、極樂往生を願ふたので、それに對して釋迦牟尼佛は皆當に
往生して、諸佛現前三昧を得んことを證明し給ふた、諸佛現前三昧とは極樂淨土へ往生す
れば阿彌陀如來は云ふにも及ばず、其他の諸佛も皆な目前に在して、常に見奉ることを
得るとの義にて、斯く韋提希と五百の侍女の得益のみならず、虚空に在つて聽聞せる釋梵
護世の諸天人も、無上道心を發しぬとて、皆な諸共に極樂往生を願ふ心を發したのである

爾時阿難即從座起前白佛言世尊當何名此經此法之要當
云何受持佛告阿難此經名觀極樂國土無量壽佛觀世音大

勢至亦名淨除業障生諸佛前汝當受持無令忘失

【訓讀】 爾時阿難即ち座より起て、前すんで佛ぼつに白まをて言まをく、世尊せたん當まさに何いかんが此經このきやうを名なけ、此法このほふの要まをば當まさに云何いかんが受持じゆぢすべき、佛阿難ぼつあなんに告つげはく、此經このきやうをば觀極樂國土無量壽佛觀世音大勢至くわんごくらくこくどきむりやうじゆぼつくわんせおんだいせいしと名なけ、亦またた淨除業障生諸佛前じゆぢやうしやうしよぼんぜんと名なくべし、汝當なんまさに受持じゆぢして忘失わうしつせしむるこそ無なれ。

【和解】 爾時阿難尊者は座を起て佛前に進み出で、此佛説を表示には何なる名をば以てすべきか、亦其の所説の大意は云何に受持して傳ふべきかを問ひ奉つた、是こそ尊者の任務にして、佛傳持の約束を有するのみならず、汝が佛語を宣説せよとか亦は忘失せしむること無かれとかの、既に度々教命を受けて居たので、扱てこそ斯くは問ふたのである其時世尊の答として此佛説を表示には、觀極樂國土無量壽佛觀世音大勢至の名を以てすべく、亦其の説の大意は淨除業障生諸佛前である、是に依つて汝當に之を信受し傳持して我が滅後の末代までも忘失させること無かれと、觀極樂國土とは此の觀行を以て極樂淨土の莊嚴樂事と、阿彌陀如來及び二菩薩の色身を見ることの意味で、是を佛の自題と稱し觀無量壽經と名けられた所以にして、諸經に稀なる事例である、亦た淨除業障とは此の觀行に

因つて、有らゆる業障を消滅して諸佛の前に生ずると、即ち極樂淨土に往生する義で、觀極樂國土の觀行を因として、生諸佛前の結果を得べく、是が此經所説の大意なりと。

行此三昧者現身得見無量壽佛及二大士若善男子善女人但聞佛名二菩薩名除無量劫生死之罪何況憶念

【訓讀】 此三昧を行ずる者は、現身げんしんに無量壽佛及及び二大士を見みることを得、若し善男子善女人但ただ佛の名二菩薩の名を聞きすら、無量劫の生死の罪を除く、何に況んや憶念せんをや。

【和解】 此の三昧とは觀行にて、此の觀行を爲す者は、現在に阿彌陀如來及び二大士とて、觀音勢至の二菩薩を見ることを得るのは、前來既に説き給ふた如くで、若し善男子善女人にして、但だ阿彌陀如來の佛名と二菩薩の名を聞きすらも、無量劫の間に於ける生死の罪を除かるべく、何に況んや憶念せんをやと、憶念とは觀行して忘れざる意味で、何に況んや觀行せんものは現身に佛と菩薩を見ること當然にして疑ひ無しと、此一段を定善十三觀の勸持と稱し、觀行に堪え得る者の爲めに、其觀行を勸めて受持せしめらるゝのである。

若念佛者當知此人是人中分陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友當坐道場生諸佛家

【訓讀】 若念佛せん者は當に知べし、此人は是れ人中の分陀利華なり、觀世音菩薩大勢至菩薩其の勝れたる友を爲り、當に道場に坐すべきをもつて、諸佛の家に生るべし。

【句義】 分陀利華とは梵語にて、翻譯すれば蔡華と稱し、好華希有華等の五種の異名を有する、極めて香ばしき最上の蓮華を云ひ、道場とは得道の處を道場と名くとして、成佛すべき場處の義にて、諸佛の家とは諸佛等として阿彌陀如來と諸佛と等同じ理にて、諸佛と有れども阿彌陀如來の家庭の意味で、即ち極樂淨土を云ふ。

【和解】 此一段は散善三輩の中にて特に念佛を勸持し給ふとして、三輩九品の中には觀行云外に種々の修行を示されたれども、其中にて特に撰みて念佛を勸持するるので、若し念佛せん者はと、此の念佛は前段の如き憶念の意味では無くして、稱名口唱の念佛即ち南無阿彌陀佛と稱へる念佛にて、其念佛は十三定善の觀行にも三輩九品の諸行にも勝れて、最勝無比の行なれば、其念佛を稱へる人も亦た最勝無比にして、是れ人中の分陀利華なりと

分陀利華が蓮華の中にて最上なるが如くに、此人も亦た人中の最上であると、華に喩ゑて讚たまふた、されば唐朝の善導大師は此の分陀利華に五種の異名有るに因つて、其五種をば念佛する人の嘉號として、是れ人中の好人である、亦た人中の妙好人、人中の上々人、人中の希有人、人中の最勝人なりと稱讚られた、是に依て觀音勢至の二菩薩は其勝れたる友と爲ると、現世に於いては觀音勢至が友と爲りて、其他の菩薩諸共に影の形に隨ふ如くに晝夜不斷に護念たまへば、未來は當に道場に坐すべきとして、頓て道場の坐に於て成佛すべきが爲めに、阿彌陀如來の家庭である極樂淨土に生るべしと。

佛告阿難汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名

【訓讀】 佛阿難に告はく、汝好く是語を持せよ、是語を持せよこは、即ち是れ無量壽佛の名を持せよこなり。

【和解】 其時世尊釋迦牟尼佛は、此の經説の完結として所説の本意を示すべく、更に改めて阿難尊者に對し、汝好く是語を持せよと命じ給ふた、是語とは此の觀無量壽經の所説を意味するので、阿難よ汝好く此の經典の所説を受持して、我が滅後に於る末代の一切衆生に傳へよと、付屬たまふたのである、然るに此の經典の所説としては、三福の行が有つ

た、定善十三觀の觀行が有つた、亦た三輩九品の説相も有つて、種々なる諸行を説き給ふたので、其所説の本意を説明すべく、世尊自ら是語といふ義を解釋し給ふて、是語を持せよとは即ち是れ無量壽佛の名を持せよとなりと、我か付屬て末代までも傳ふべき是語といふは、種々に説きたる諸行で無く、無量壽佛の名を持す義にて、無量壽佛の名を持すとは阿彌陀如來の名號を稱ふる意味で、即ち口稱の念佛なれば、汝好く是語を持して其念佛を傳へよと、最も慇懃に命じ給ふた、是を釋迦牟尼佛の本意とし、亦此の觀無量壽經の肝要として念佛付屬と稱するので、斯く釋迦牟尼佛が諸行の中より、唯だ念佛の一行のみを選びて付屬し流通せしめ給ふのは、諸行各殊勝の行なれども、元來彌陀の本願ならずして爾も觀行と云ひ持戒と云ひ、何れも難作の修行にて堪え得る人の稀なるに反して、口稱念佛の一行は假令ひ何なる人にも、修し易くして持ち易く、無上の功德を具備たる彌陀本願の行なれば、堪え得る人の少くして、亦た本願の行で無き種々の諸行を差排きて、此念佛を傳えよと命じ給ふた所以である、是に依つて元祖大師法然上人の選擇本願念佛集には「釋尊定散の諸行を付屬せず唯だ念佛を以て阿難に付屬し給ふ文」といふ一章を設けられて釋尊の諸行を付屬し給はざる所以は、即ち是れ彌陀の本願に非ざる故なり、亦念佛を付屬し給ふ所以は、即ち是れ彌陀の本願なる故なり、今又た善導和尚の諸行を廢して念佛

に歸せしめらる、所以は、香だ彌陀本願の行なるのみに非ず、亦是れ釋尊付屬の行なればなり、故に知りぬ諸行は機に非ず時を失し、念佛往生は機に當り時を得ることを、感應豈に唐捐ならんや、當に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も、隨自の後には還つて定散の門を閉づ、一たび開きて以後永く閉ぢざるは、唯是れ念佛の一門のみなり、彌陀の本願釋尊の付屬意此に在矣。
と示し給ふた、されば阿難に付屬して末代までも傳へられた念佛を稱ふるのは、唯だ阿彌陀如來の本願に順するのみならず、亦此の釋迦牟尼佛の本意にも適ふのである。

佛説此語時尊者目健連阿難及韋提希等聞佛所説皆大歡喜

【訓讀】佛此語を説たまふ時、尊者目健連阿難及び韋提希等、佛の所説を聞たてまつりて、皆大に歡喜す。

【和解】此語を説きたまふ時とは、此の念佛を付屬して宮中に於る説法を終り給ふた時で、其時左右に侍せし目連阿難は云ふに及ばず、韋提希夫人と五百の侍女其他空中に在つて聽聞せる、護世の諸天に至るまで、此の説法を聞終りて、皆な大なる歡喜を爲せり。

爾時世尊足歩虚空還耆闍崛山爾時阿難廣爲大衆說如上事無量諸天及龍夜叉聞佛所說皆大歡喜禮佛而退

【訓讀】 爾時世尊、足虚空を歩いて耆闍崛山に還りたまへば、爾時阿難廣く大衆の爲に、上の如きの事を説く、無量の諸天及び龍夜叉佛の所説を聞たてまつり、皆大に歡喜して佛を禮して退きぬ。

【和解】 爾時世尊釋迦牟尼佛は宮中に於る教化を終り、虚空を歩みて耆闍崛山へ還り給ひて、直に阿難尊者に對し宮中説法の復説を命じ給ふた、爾時尊者は世尊の命を奉じ、大衆の爲めに上の如きの事を説くと、宮中説法の有様を復説して、韋提希夫人の得益や阿彌佛如來の來現やを、其儘ま悉く演たので、それを聞きたる許多の大衆無量の諸天、及び天龍夜叉の輩までも、阿難尊者の復説なれども、其説く處は佛説なれば、佛の所説を聞たてまつると、自ら宮中に隨ひて會坐に在りしと異り無き、法益を得たのを歡喜し、各世尊を敬禮して退きたりぬと。

斯く一經にして復説の有つたのは、一切諸經の中に於て最も稀なる事實なりとて、澄圓菩薩の淨土十勝論には、特に佛前重説勝なる一章を立て『今此の觀經は釋迦牟尼如來耆闍

崛山より没して、王宮に於て國母韋提希の爲めに、直に十六想觀の方軌を示し、侍者の阿難は王舍大城より還り、鷲嶺に在つて親しく教主慈尊に向ひ、九品往生の始終を重説す、夫れ三百餘會の轉法輪を案するに、未だ兩會の重説有らず、唯吾が淨土の一教のみ此の秀句あり、尤も以て一勝と爲すに足れり』と記して在る、されば吾が此の淨土教は末代衆生に知らしめて、皆悉く往生させたき釋尊出世の本懷なれば、僅かに宮中に於る所説に止めず、普く大衆に示さんとて斯くは復説せしめ給ふた、如何に大悲の深重にして亦た懇切なるかを、仰いで之を信せねばならぬ。

佛說阿彌陀經和解

孝養父母行世仁慈

三條中將實隆

今ぞ知る庭の教に順かふも

眞の道のしるへなりとは

化爲清涼風吹諸天華

中納言宣胤

目の前に燃る焰の色消へて

涼しき風に華を散りかふ

上人の給く阿彌陀經は、唯だ念佛往生ばかりを説くとは心得べからず、文に隱顯ありと雖も廣略の義をもて心得れば、四十八願を悉く説き給へる經なり、舍利弗如我今者讚嘆阿彌陀佛不可思議功德といへる、阿彌陀ほとけの功德は即ち四十八願なり、念佛往生を説くは其中の第十八の願を指すなり。『勅修傳第二十四卷』

佛說阿彌陀經和解

佛說阿彌陀經

題號の由來
【和解】此の經典の題號にて、此の經典は六方諸佛の讚嘆し給ふ所に依つて、稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經と名くべきを、略して護念經とも呼ぶのである、けれども其れを阿彌陀經と號されたは、多くの經典は何者かの請問に因つて説き給ふのが例なるにも拘らず、此の經典は無問自説として其何者かの請問を俟たず、釋迦牟尼佛が自ら本意を現はすべく、舍利弗尊者を對告衆として、直ちに極樂淨土の莊嚴と念佛功德と、尙ほ六方諸佛の證誠護念とを示して、専ら阿彌陀如來に關する事のみを説き給ふたに因つて、斯く題號とせられたのである。

姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

【和解】此の經典を翻譯された時代と翻譯者の人名にて、此の經典は支那姚秦の時に、三藏法師なる鳩摩羅什が、詔旨を奉じて翻譯されたので、姚秦とは支那の秦朝に亡秦、前

翻譯の年
代と譯者
の傳記

秦、後秦、西秦の四秦有る中の後秦にて、當時の秦王が姚氏にして、字を興と號したに因つて姚秦と稱するので、三藏法師とは經律論の三に通達せる高僧の名稱にて、其三藏法師なる譯者鳩摩羅什は印度の人にて、鳩摩羅什とは父の名を鳩摩羅琰と呼び、母の名を耆婆と稱したに因つて、父母の名を取つて鳩摩羅耆婆と名けられたのを略したので、幼年にして聰明多智で有つたが、七歳の時出家して師に隨ひて經典を受くるに、日に千偈を記憶したりといふ、九歳にして更に法師盤頭達多といふ人を師として、阿含經の深義を研究し、それより多年各地の名師に參學して、大小の經論外道の典籍、陰陽曆算悉く通曉せすと云ふこと無く、壯年にして既に凡人に非ずとの稱が有つた、後ち支那に迎へられて姚秦の長安城に入り、興王の詔旨を奉じて經論を翻譯すること、此の阿彌陀經を初めとして、十三部三百餘卷に及んだので有つたが、弘始十一年八月二十日壽七十歳にて遷化す、傳ふる所に依れば此の阿彌陀經の翻譯は弘始四年二月にして、我朝の履仲天皇三年壬寅に當るのである。

如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園與大比丘衆千二百五十人俱

【訓讀】是の如きを我聞く、一時佛舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、大比丘衆千二百五十人俱りき。

【和解】是の如きを我聞くとは、此經典を傳持た阿難尊者の辭にして、釋迦牟尼佛が是の如くに説き給ふたのを、我が聞きたる儘に傳へるので有るから、我辭にして我説にあらす、即ち佛の直説なりとの意味で、一時釋迦牟尼佛が舍衛國の祇樹給孤獨園といふ僧園に於て、千二百五十人の大比丘衆とて、羅漢果と稱する證を得た大比丘なる佛弟子と俱に在した事が有つたと、舍衛國とは中印度に於ける北橋薩羅國の都城の名で、橋薩羅國には南北の兩國が有つて、舍衛城の有るのが北橋薩羅國で有るから、其國を稱して舍衛國とも呼ぶので、實は北橋薩羅國の舍衛城である、祇樹給孤獨園とは其都城に在る僧園の名稱にて、祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響きありと諸はれて、我國までも聞えたる祇園精舍といふのは此僧園の略稱にて、祇樹とは國王波斯匿王の太子にして此園地の持主なる、祇陀といふ人の名を取り、給孤獨とは其國の大臣須達長者といふ人を賞美した德號にて、長者平素施與を好みて、孤獨の窮民を賑給せるに因つて、斯く德號を以て稱せられたが、最も佛敎の信者にして、當時摩竭陀國に在した釋迦牟尼佛を、此舍衛城の方へ迎へ奉らんと

て佛の許諾を受けて佛弟子舍利弗尊者と俱に、精舎を建つべき地を相して、都城の南方支那里數にして五六里許りの所に於て、適當なる園地を見立たので、其地の持主祇陀太子に讓與を請ふた、すると太子の答へには、此地の全面に互つて高さ五寸に滿る程の黄金を布敷ば、其れを代價として賣渡さうといふたので、長者直ちに其希望に應ずべく、許多の黄金を集積たのを見て、驚いたのは太子にして、前言は戯語である左程にするには及ぶまじくと、止めたけれども給孤長者は尙ほ約束を重んじて、既に全地の九分迄も黄金を敷いたので、太子愈篤志を感じて、園内衆多の林樹を擧げて、殘る一部の地所と俱に、悉皆寄附を爲したに因つて、規模廣大にして整備せる、一大僧園の結構も日ならずして竣成したので、長者豫ての志願の如く、一千二百五十人の大衆と共に、佛を此處に迎へ奉つた、其時佛は阿難尊者に告給うて、園地は給孤の購ふ所、林樹は祇陀が施す所なれば、永く兩人の功德を記念すべく、其名を以て此の僧園の名とせよとて、即ち祇樹給孤獨園と稱せしめられたのである。

斯かる特殊の因縁を有する、祇園精舎と舍衛城とは、現今如何なる状況で有るのであらうか、例に據つて最近佛蹟巡禮者の紀行に依れば、左の如く記載してある。
 現今のマヘトは往昔の舍衛城にて、印度鐵道バルラムブアー驛より十三四哩の所に在

つて、彼の靈鷲山の有る王舍城よりは、直徑三百哩を隔てた西北の方に當り、彼が高燥なる風物と豊富なる温泉を以て、誇りとするに對して、是はヒマラヤ雪山の遠望と祇園林の近景とを以て、其勝觀として居るので、亦た王舍城の城壁は石造なるに反して、此の舍衛城のは赤煉瓦である、其赤煉瓦の城壁は、荒廢しながら今尙ほ二丈餘の高さを保つて故城址を繞つて居る、城址は殆ど灌木生ひ茂つて僅に一路を通ずるのみなれども、所々に存せる赤煉瓦の遺址に據つて、當時の繁盛を偲ぶに足る。

祇園精舎の遺址は今是をサヘトと稱し、舍衛城址より數町の南方に當り、小丘の上になつて一廓を爲し、樹木がそれを蔽うて在るばかりで、其他何等の遺物も無い、無論此の精舎の荒廢は既に久しきものにして、第五世紀の初め法顯三藏が訪ふた頃には、尙ほ九十八所の僧伽藍が存して居た容子であれども、其以後二百年玄奘三藏が巡禮の時には、堂宇廢絶して纔に阿育王の石柱のみが有つたと云ふから、其れより一千二百數十年を経た今日にして、遺物が無いのは寧ろ當然で、今見る所の遺址すらも、近年發掘して之を保存されたのである。(巻頭寫眞参照)

皆是大阿羅漢衆所知識

【訓讀】 皆是れ大阿羅漢にして、衆に知識せられたり。

【和解】 皆是れ大阿羅漢とは、釋迦牟尼佛と俱に祇樹給孤獨園に在る一千二百五十人の大比丘衆は、皆な羅漢果といふ證を得た佛弟子なりとの意味で、證を得たる大阿羅漢なるに因つて、衆に知識せられたりと、其智其德尋常ならず、衆多の人に知識れて尊崇せらるる佛弟子なりと。

長老舍利弗摩訶目犍連摩訶迦葉摩訶迦旃延摩訶俱絺羅
離婆多周利盤陀伽難陀阿難陀羅喉羅憍梵波提

【訓讀】 長老舍利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉、摩訶迦旃延、摩訶俱絺羅、離婆多、周利盤陀伽、難陀、阿難陀、羅喉羅、憍梵波提。

【和解】 長老とは臘高くして徳重き人の尊稱にて、一千二百五十人の佛弟子は、皆な阿羅漢にして衆に知識せられたりとは云ひ乍ら、茲に列名された舍利弗尊者以下の十六羅漢は、其中に於ける長老なりとの意味で、其長老としての舍利弗は、智慧第一の聲譽が有つて身子とも稱せられ、摩訶目犍連は略して目連と呼び、亦た神通第一の稱がある、摩訶迦旃延は那羅陀と稱し、無量壽經三十一聖中の尊者大住にて、摩訶俱絺羅は舍利弗の親族に

十六人の長老

して、勉學の爲め爪を剪る寸暇無しとて、常に長爪の儘在りしに因つて、長爪梵士とも呼ばる、離婆多是星宿亦是室宿とも翻譯せられて、其父母星宿を禱つて得たる兒なるを以て名けられしと、周利盤陀伽は普通に般特と稱し、兄弟二人有る中で兄を盤陀迦と呼び、弟を周利と號し、初め愚人にして後ち證果を得たりと云ふ、或は兄が周利にして弟が般特なりとの説も有つて、未だ何とも決し難い、難陀は釋迦牟尼佛異腹の親弟にて、無量壽經の三十一聖中には尊者流灌としてある、阿難陀は無量壽經以來既に熟知の阿難尊者にして羅喉羅は同經にある尊者羅云にて、即ち釋迦牟尼佛の佛子である、憍梵波提も亦た同經の尊者牛王にして、牛同とも稱せらる。

賓頭盧頗羅墮迦留陀夷摩訶劫賓那薄拘羅阿菟樓駄

【訓讀】 賓頭盧頗羅墮、迦留陀夷、摩訶劫賓那、薄拘羅、阿菟樓駄。

【和解】 賓頭盧頗羅墮の賓頭盧は字、頗羅墮は姓にて、不動利根と翻譯せられ、跋蹉國の都俱隣彌城の國師の子にして、風采最も勝れたりしと云ひ、亦或は賓頭盧と頗羅墮は兩人なりと云ふ説もある、迦留陀夷は黑曜亦是麤黒とも翻譯して、身體極めて黑色なるに因

つて名けられ摩訶劫寶那は房宿とも稱し、無量壽經の尊者劫寶那にして、薄拘羅も亦た同經の尊者面王にて、阿菟樓駄は同經にて尊者離障と號せられ、天眼第一を以て稱せられた阿那律である。

五〇六

如是等諸大弟子並諸菩薩摩訶薩文殊師利法王子阿逸多菩薩乾陀訶提菩薩常精進菩薩

【訓讀】 是の如き等の諸の大弟子、並に諸の菩薩摩訶薩あり、文殊師利法王子、阿逸多菩薩、乾陀訶提菩薩、常精進菩薩。

【和解】 是の如き等とは上段の十六羅漢及び一千二百五十人と、尙其他の佛弟子にて、並に諸の菩薩摩訶薩ありと、摩訶薩とは大菩薩の義にして、唯だ聲聞羅漢の佛弟子のみならず、大小の菩薩も亦た一處に集會せられたので、文殊師利法王子とは文殊菩薩にて、法王子とは佛を法王として其嗣子なりとの義を以て、菩薩の上首なる意味とし、阿逸多菩薩とは彌勒菩薩にして、乾陀訶提菩薩とは香象菩薩にて、菩薩の徳風遠く達すること、香象の如くなりとて名を得らる、常精進菩薩とは衆生救済の爲めに、常に努力精進せらるゝに因つて、此名を稱するのである。

與如是等諸大菩薩及釋提桓因等無量諸天大衆俱

【訓讀】 是の如き等の諸の大菩薩、及び釋提桓因等の、無量の諸天大衆と俱なりき。

【和解】 文殊師利法王子や常精進菩薩の如き、衆多の大菩薩と、及び釋提桓因等の無量の諸天神、其他の大衆も亦俱に、此の僧團なる祇園精舍に集會たりと、釋提桓因とは釋迦因陀羅と稱し、亦た帝釋天とも名け切利天の天主にして、無量諸天の最長者である。

爾時佛告長老舍利弗從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀今現在說法

【訓讀】 爾時佛長老舍利弗に告はく、是より西方十萬億の佛土を過て世界有り、名けて極樂と曰ふ、其土に佛有す阿彌陀と號したてまつる、今現に在して說法したまふ。

【和解】 爾時とは前段の如く祇園精舍に多數の菩薩羅漢天神大衆の集會し時にて、其時世尊釋迦牟尼佛は諸大弟子中の長老にして、爾も智慧第一の稱有る舍利弗尊者を對告衆と

五〇八
して説法を始め給ふた、由來佛の説法は洪鐘響くと雖も叩くを俟つて當さに鳴ると、大聲を發する洪鐘にても、叩かざれば鳴らぬが如くに、何者かの致請に因るとか、亦是請問者有るをば俟つて説き給ふのが、大抵諸經の例なるに反して、此の阿彌陀經は其如き、致請も無ければ亦た請問者の無きにも拘らず、釋迦牟尼佛自ら本懷を示すべく説き出し給ふたので、叩かざれども洪鐘の鳴るが如く是を無問自説の經典と稱するのである、されば其時舍利弗尊者に告給ふには、是より西方十萬億の佛土とて、衆多諸佛の淨土を過ぎて亦一つの世界が在る、それを名けて極樂と稱し、其の極樂世界に有す佛を阿彌陀と號し奉り、今現に在して説法し給ふと、十萬億の佛土とは必ずしも十萬億といふ數量を限つた義では無く、多數諸佛の淨土を過ぎてとの意味で、今現に在して説法し給ふとは、今尙ほ不斷に活動し給ふ義にて、極樂淨土の教主阿彌陀如來は、他の諸佛の如くに涅槃の雲に隠れ給はず、常恒に現在し給ふて説法教化せらるゝので、唯其の淨土に於ての説法教化のみならず普く十方世界に於ける一切衆生を救濟べく、今尙ほ活動し給ふのである。

舍利弗彼土何故名爲極樂其國衆生無有衆苦但受諸樂故名極樂

【訓讀】 舍利弗彼土を何が故に名けて極樂と爲す、其國の衆生諸の苦有ること無く、但だ諸の樂のみを受く、故るに極樂と名く。

【和解】 されば今尙ほ現在して常恒不斷に活動し給ふ、阿彌陀如來の在す國土を何故名けて極樂と曰ふかと云へば、其國の衆生とて其極樂に在る衆生は、吾人が受けつゝ有る如き衆多の苦痛有ること無く、但だ諸の樂のみを受けるに因つて、極樂と名けられたと、極とは最上至極の義で、今現在に吾人が受けつゝ在るのは、生老病死や飢寒貧苦や或は風水盜火不時の災害等の衆苦にして、假令ひ種々なる歡樂有るにもせよ、多くは夢の如き一時の歡樂ならざれば、金錢を以て購求めた最も劣等の娛樂なるに反して、彼土のは永久にして最上なる樂みなりとて、極樂と名けられたのである。

又舍利弗極樂國土七重欄楯七重羅網七重行樹皆是四寶周市圍繞是故彼國名曰極樂

【訓讀】 又舍利弗、極樂國土には七重の欄楯、七重の羅網ある七重の行樹あり、皆是れ四寶にして周市に圍繞せり、是故に彼國を名

けて極樂と曰ふ。

【句義】欄楯とは縦なるを欄と稱し、横なるを楯と號して、樓上に在る欄干の如きものを云ひ、羅網は網にて、行樹とは樹々行列して亂雜無き義、四寶は金、銀、瑠璃、玻璃を云ふ。

【和解】當段も亦た極樂淨土の説明にて、極樂國土には七重の欄楯を有して、七重の羅網の懸れる七重の行樹が在る、此の七重の行樹とは根莖枝條葉華果の七つを具備して整列するので、それが皆是れ四寶とて、金銀瑠璃玻璃の寶を以て合成せられて、周市し圍繞せりと、周市とは國中に徧滿する意味にして、有らゆる宮殿樓閣を圍繞て在る、是故に彼國を名けて極樂と曰ふと、前段にては其國に於ける受樂に就て、極樂といふ義を示され、當段にては其莊嚴の一部を説きて、亦た極樂の意義を説明し給ふたのである。

極樂淨土の功德莊嚴其一

又舍利弗極樂國土有七寶池八功德水充滿其中池底純以金沙布地四邊階道金銀瑠璃玻璃合成

【訓讀】又舍利弗、極樂國土には七寶の池有り、八功德水其中に充滿せり、池の底には純ら金沙を以て地に布き、四邊に階道あり金

銀瑠璃玻璃をもつて合成せり。

【句義】七寶とは金、銀、瑠璃、玻璃、砗磲、赤珠、碼瑙にて、八功德水とは一に澄淨、二に清冷、三に甘美、四に輕軟、五に潤澤、六に安和、七に除飢渴、八に長養諸根の徳を具備せる池水を稱し、階道は池に降り堂に昇る階梯を云ふ。

【和解】亦た極樂國土には七寶より成れる池岸を有せる池が在つて、八功德水が其中に充滿してある、池の底には金沙を布きて、其四邊には階道とて金銀瑠璃玻璃の四寶を以て合成された階梯が有つて、それを降りて池にも臨むべく、亦た其れを昇つて何れの樓閣へも往くことを得らる。

上有樓閣亦以金銀瑠璃玻璃砗磲赤珠碼瑙而嚴飾之池中蓮華大如車輪青色青光黄色黄光赤光白光白光微妙香潔舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴

【訓讀】上に樓閣有り、亦た金銀瑠璃玻璃砗磲赤珠碼瑙を以て之を嚴飾れり、池中には蓮華あり大さ車輪の如く、青色には青光あり

黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あつて微妙香潔なり、舍利弗極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

五二二

【和解】池の上には金銀瑠璃などの七寶を以て嚴飾れる樓閣が有り、池の中には蓮華がある、其大きさは車輪の如くと圓形にして車輪の如く、青色の蓮華には青色の光を放ち、黄色にも赤色にも白色にも亦各黄赤白の光が有つて、何れも微妙の芳香を放ちつゝあるされば極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せりと、功德莊嚴とは阿彌陀如來が法藏菩薩たりし因位より今現在の成佛まで、有らゆる難作の修行を爲して、功を積み徳を累ね給ふた無量の功德に因つて、出來上りし莊嚴なりとの意味で、成就せりとはいふは得已て失はざるを成就と云ふとて、極樂淨土の莊嚴は功德の中より現出たれば、永久亡失こと無しとの義にて、吾人の邸宅庭園の如きは如何に宏壯にして善美の莊嚴を爲すとも、其持主の徳に因つて出來たるものは尠くして、大抵金錢の力を以て造り作された、多くは驕奢の沙汰で有るから、亦た金錢を以て賣却せられ亦た金錢に因つて絶滅すれども、極樂淨土の樓閣宮殿池水の一切の莊嚴は、阿彌陀如來の清淨き功德の發現なれば、永久絶滅ること無しとて是を功德の莊嚴といふのである。

極樂淨土
の功德莊
嚴其二

又舍利弗彼佛國土常作天樂黃金爲地晝夜六時而雨曼陀羅華其國衆生常以清旦各以衣被盛衆妙華供養他方十億佛卽以食時還到本國飯食經行舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴

【訓讀】又舍利弗、彼佛の國土には常に天樂を作し、黃金を地爲り、晝夜六時に曼陀羅華を雨す、其國の衆生常に清旦を以て各衣被を以て、衆の妙華を盛て他方十億の佛を供養し卽ち食時を以て本國に還到て飯食し經行す、舍利弗極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

【句義】曼陀羅華は適意華亦是如意華とも翻譯せられて、其香を開き其色を見る者皆な喜悅するとの意味で、赤白其他種々なる色彩有りと云ふ、衣被は華を盛て佛に供養する器具にて、花筐亦是華籠の類を云ふ、經行とは佛閣講堂等の邊りを靜かに歩行往復する修行にて、歩行亂雜ならず一路を往來すること、織物に於ける經糸の如しとの意味。

五二三

【和解】 彼佛の國土とは極樂淨土にて、彼佛の極樂國土には常に微妙の天樂があり、且亦た淨土は黄金を地と爲して、虚空よりは晝夜不斷に種々なる曼陀羅華を雨すのである、是に依つて其國に在る衆生は常に清旦とて、毎日の早朝には供養の器具なる衣被の中に、彼の種々なる曼陀羅華を盛て阿彌陀如來に供養し奉り、亦た他方の佛國に往きて十萬億の諸佛とて無量の諸佛に供養して、即ち食時を以てとて少時の間に本國の極樂に還到て、飯食し經行するので、極樂國土には是の如き功德莊嚴を成就してある。

復次舍利弗彼國常有種々奇妙雜色之鳥白鵠孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命之鳥是諸衆鳥晝夜六時出和雅音其音演暢五根五力七菩提分八聖道分如是等法其土衆生聞是音已皆悉念佛念法念僧

【訓讀】 復次に舍利弗、彼國には常に種々奇妙なる雜色の鳥有り白鵠、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥、是衆の鳥晝夜六時に和雅の音を出す、其音五根、五力、七菩提分、八聖道分、是の如

き法を演暢す、其土の衆生是の音を聞已つて、皆悉く佛を念じ法を念じ僧を念す。

【句義】 白鵠は鶴の一種にて、脚の長きを鶴とし脚の短きを鶴と云ふ、舍利は水鳥の一種にて鶖鷺とも譯してある、迦陵頻伽は妙聲亦は妙音鳥とも翻譯されて、唯だ音聲の美妙なるのみならず、羽毛亦た特殊の色彩有りと云ふ、共命鳥は一身兩頭の鳥にて、一頭生るゝ時は他の一頭も共に生れ、一頭死すれば他の一頭も亦共に死するに因つて此名有り、五根とは信根、精進根念根、定根、慧根にて、是を聖道の根本とする義に因つて五根と稱し、五力とは信力、精進力、念力、定力、慧力にて、是を以て有らゆる業障を排除するに因つて力と名け、七菩提分とは七覺支とも稱して念覺、擇法覺、精進覺、喜覺、輕安覺、定覺、捨覺の七にて、八聖道分とは八正道にて、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八を云ふ、此他に四念處、四正勤、四如意足を加へて、三十七科の道品と稱す。

【和解】 復次に彼國なる極樂淨土には、常に種々奇妙なる雜色の鳥が有る、其種々なる鳥の中に於ても、白鵠孔雀鸚鵡舍利、迦陵頻伽共命の鳥など最珍しき鳥が有つて、晝夜六時に和雅の音聲を出すのである、其音聲は法音にて五根五力七菩提分八聖道分等の三十七

科の道品を初めとして、其他の諸法を演暢るので、是を聞きたる極樂淨土の衆生は、皆悉く佛を念じ法を念じ僧を念すと、是等の諸法を聞きしに因つて、佛を念じては佛恩の重きを知ると俱に、其覺位に到らんことを願ひ、法を念じては功德の深きを知ると俱に、勤めて修學せんことを願ひ、僧を念じては其徳の勝れたるを知ると俱に、愈其徳を全うせんことを願ふのである。

舍利弗汝勿謂此鳥實是罪報所生所以者何彼佛國土無三惡趣舍利弗其佛國土尚無三惡道之名何況有實是諸衆鳥皆是阿彌陀佛欲令法音宣流變化所作

【訓讀】 舍利弗、汝此鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふこと勿れ、所以は何ん、彼佛の國土には三惡趣無し、舍利弗其佛の國土には尚し三惡道の名も無し、何に況んや實有んや、是の諸衆の鳥は皆是れ阿彌陀佛の、法音をして宣流せんめんご欲して、變化して作たまふ所なり。

【和解】 前段にては極樂淨土に法音を發する衆鳥有ることを説き給ふたに因つて、當段では其衆鳥は尋常普通の畜類ならぬ義を説明し給ふので、斯く法音を發する奇妙の鳥は、罪報の所生とて罪報に因つて生を受けたる、普通の畜類なりとは謂ふべからず、元來佛の國土には三惡趣無しとて、極樂淨土には阿彌陀如來の本願にて、地獄や餓鬼や畜生の三惡道無く、尙其の三惡道の名も無いのである、何に況んや實有んやと、三惡道の名も無き國土に何うして畜生道の一部なる鳥類の實が有らうぞ、けれども斯かる鳥の有るのは、阿彌陀如來の變化の所作で、衆生を愛し給ふに因つて速く道果を得させんとて、是の諸衆の鳥ども變化して諸法の聲を宣傳し給ふのである。

舍利弗彼佛國土微風吹動諸寶行樹及寶羅網出微妙音譬如百千種樂同時俱作聞是音者皆自然生念佛念法念僧之心舍利弗其佛國土成就如是功德莊嚴

【訓讀】 舍利弗、彼佛の國土には微風吹て諸の寶行樹及び寶羅網を動し微妙の音を出す、譬は百千種の樂を同時に俱に作が如し、是音を聞く者は皆な自然に、念佛念法念僧の心を生ず、舍利弗其佛の

國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

【和解】 亦彼の極樂淨土には、遅からず亦た速からぬ微風が有つて、七重行樹と其羅網とを吹動かし、譬へば百千の音樂を一時に俱に作すが如き、常に微妙の音を出す、其風聲を聞く者は前段に於ける鳥音と同様に、亦皆な自然に念佛念法念僧の心を生ずるので、鳥音風聲兩つながら斯くも不思議の利益有るは、何れも阿彌陀如來の本願力の然らしむる所にして、極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就してある。

舍利弗於汝意云何彼佛何故號阿彌陀舍利弗彼佛光明無量照十方國無所障礙是故號爲阿彌陀

【訓讀】 舍利弗、汝が意に於て云何ぞ彼佛を何が故に、阿彌陀と號したてまつる、舍利弗彼佛は光明無量にして、十方の國を照すに障礙する所無し、是故に號して阿彌陀と爲す。

【和解】 汝が意に於てとは、舍利弗尊者の意志を察して告給へる意味にして、されば舍利弗、汝の意に思ふには、此の極樂の教主をば何故阿彌陀と號するかと、其解釋を與ふべく阿彌陀と名け奉つた意義を説き給ふので、舍利弗尊者を對告衆として、其意志を察し

給ふとは云ひ乍ら、實は末代滅後の吾人に迄も、普く其義を示さるゝのである、扱て何故に阿彌陀と號し奉るかと云ふに、阿彌陀は無量の義で有つて、無量の徳を備へ給ふに因つて即ち佛號となつたので、其無量の徳の中にも殊更ら勝れ給ふのが、光明無量の徳にして、阿彌陀如來の光明は無量にして際限無く、十方諸國を照し給ふに何等の障礙あること無ければ、是故に號して阿彌陀と爲すと、其光明の徳に因つて阿彌陀如來と名けたのである。

又舍利弗彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫故名阿彌陀

【訓讀】 又舍利弗、彼佛の壽命及び其人民、無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名けたてまつる。

【和解】 亦彼の阿彌陀如來の壽命は無量にして、及び其人民とて極樂淨土に在る衆生は教主の佛と同様に阿僧祇劫とて無量無邊の壽命を得らる、唯其の佛の壽命無量なるのみならず、其國に往生する者も皆悉く壽命の無量なるに因つて、阿彌陀と名けたてまつると

舍利弗阿彌陀佛成佛已來於今十劫又舍利弗彼佛有無量

無邊聲聞弟子皆是阿羅漢非是算數之所能知諸菩薩衆亦復如是舍利弗彼佛國土成就如是功德莊嚴

【訓讀】 舍利弗、阿彌陀佛成佛より已來、今に於て十劫なり、又舍利弗、彼佛に無量無邊の聲聞弟子有り、皆な阿羅漢にして是れ算數の能知る所に非ず、諸の菩薩衆も亦復た是の如し、舍利弗彼佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり。

【和解】 扱其の阿彌陀如來の壽命無量なれば、四十八願の力に因つて極樂淨土を構へ出され、茲に成等正覺して佛位に就き給うてより、既に十劫といふ長き年序をば經て有れども、今尙ほ現に在して説法活動し給ふので、亦其の阿彌陀如來には無量無邊の聲聞弟子とて、證果を有せる無數の弟子有つて、皆是れ阿羅漢といふ法位を得たる弟子にして、算數の能知る所に非ずとて、其數無量無邊なれば算數で數ふる事が出来ぬ、其他の菩薩も亦其の如くにて、極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就してある。

又舍利弗極樂國土衆生者皆是阿鞞跋致其中多有^一一生

補處其數甚多非是算數所能知之但可以無量無邊阿僧祇劫^一說

【訓讀】 又舍利弗、極樂國土に衆生する者は、皆是れ阿鞞跋致なり、其中に多くは一生補處有り其數甚だ多し、是れ算數の能之を知る處に非ず、但だ無量無邊阿僧祇劫を以て説べし。

【句義】 阿鞞跋致とは梵語にて、不退轉と翻譯せられ、位不退行不退念不退處不退の四種有る中の處不退とて、極樂淨土に往生する者は其淨土の土徳として、法位も修行も念願も皆俱に退轉せぬを意味し、一生補處とは菩薩の中の最上位にて、今一生を經て直ちに佛位を得るとの義を云ふ。

【和解】 假令ひ佛道修行を爲すとても、種々の妨害有る時には法位も修行も念願も、俱に退轉するのが多い、然るに極樂淨土に於ては阿彌陀如來の本願力にて、其淨土の土徳として皆な俱に退轉せず、何れも進むばかりにて退く事無きを阿鞞跋致の不退轉と稱し、其中に多くは一生補處有りと、極樂淨土に生るる者は斯かる不退の法位を得るので、其中に一生補處とて頓て佛位を得べき最上級の菩薩が多い、其數無量無邊にて阿僧祇劫の長

年月を以て説かねばならぬ程の多數であるから、是れ算數の能知る所に非ずとて、其菩薩の數量は數ふる事を得ぬのである。

舍利弗衆生聞者應當發願願生彼國所以者何得與如是諸上善人俱會一處

【訓讀】 舍利弗衆生聞ん者は、應當に發願して彼國に生れんことを願ふべし、所以は何ん、是の如き諸の上善人と俱に一處に會するここを得ればなり。

【和解】 衆生聞ん者はとは、是を聞きたる衆生はこの意味で、斯かる淨土の功德莊嚴と及び不退轉位を得ること等を聞きたる衆生は、當に發願して彼國に生れんことを願ふべしと、茲に極樂往生を勧め給ふた、所以は何んと何故勧め給ふとならば、是の如き諸の上善人とて、前段に於ける聲聞菩薩や一生補處の最も勝れし法位の人と、如何なる凡夫衆生にても、俱に一處に會することを得ればなりと、平等一處に會するのであるから、當に發願して生れんことを願ふべしと。

舍利弗不可以少善根福德因緣得生彼國

【訓讀】 舍利弗、少善根福德の因緣を以ては彼國に生るゝことを得べからず。

【和解】 およそ何事を爲すにもあれ、願と行とを相伴ふのが必要にて、それを願行具足と稱し、願のみ有つて行無ければ、其願成就すること能はず、例へば目的のみにして手段が其れに伴はずば、其目的を達し難きと同然にて、亦た行有つて願無ければ、手段のみにて目的の無きが如く、あたらの手段も徒爾にて、如何なる行も無効である、されば極樂往生にも此の願行が必要にて、前段にては當に發願して生れんことを願ふべしと、即ち願を勧め給ふたので、當段にては其行を示すべく、極樂往生をせんとするには、其れに相應せる修行を爲さねばならぬ、爾も其の修行として少善根福德の因緣とて、些少の善事や劣れる福德にては、生るゝことを得ぬのであると、大往生をせんとするには、大善根で無ければならぬ、大福德で無ければならぬと、是より正に説かんとし給ふ念佛の一行が、大善功德なることを暗示された。

執持名號
舍利弗若有善男子善女人聞說阿彌陀佛執持名號若一日
若二日若三日若四日若五日若六日若七日一心不亂其人

臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前是人終時心不顛倒
即得往生阿彌陀佛極樂國土

【訓讀】 舍利弗若し善男子善女人有て、阿彌陀佛を説を聞きて名
號を執持すること、若し一日若し二日若し三日若し四日、若し五日
若し六日若し七日、一心不亂なれば、其人命終る時に臨て阿彌陀佛
諸の聖衆と與に、現に其前に在す、是人終る時心顛倒せず、即ち阿
彌陀佛の極樂國土に往生することを得。

【和解】 善男子善女人とは、有らゆる一切諸人といふ意味にて、一切諸人の中には悪人
も有れども、假令如何なる悪人にも、其造惡を自覺して往生せんと願ふ時には、其意
志既に善なる方面に向つてあるので、最早や以前の悪人ならねば、茲に一切諸人をば斯く
善男子善女人と呼び給ふので、其善男子善女人が阿彌陀佛を説くを聞きて、阿彌陀佛如來
の深重なる本願大悲の義を聞きて、即ち往生爲さんとて名號を執持するのが、前段に於け
る少善根に對しての多善根にして亦た多福徳である、名號を執持すとは佛の名號を口に執

持て唱ふる意味にて、即ち念佛を唱ふるので、其念佛を唱ふること若し一日若し七日とて
若し一日七日にても若し一念十念にても、乃至は多念を相續して千萬念を唱ふることも、時
間の長短と數の多少に拘らず、一心不亂なるときは、其人命終る時に臨みて、阿彌陀佛如來
は諸の聖衆と與に來迎たまへば、是人心顛倒して極樂淨土に往生することを得らるる
一心不亂とは意志を一所に集中することか、亦は他の妄念雜念などを絶滅する意味では無く
唯だ一心に往生を願ふ意志にて、唯だ一心に往生を願ふとは、佛の本願を信じて疑ひ無く
餘行を修せずして唯一向に念佛する心を云ふので、觀無量壽經に三心を説き給うて、至誠
心深心廻向發願心と有るのも、無量壽經の十八願に至心信樂欲生我國と説き給ふたのも、
此の一心に外ならぬのである。

元より往生の行として諸行各勝劣無しとは云ひ乍ら、阿彌陀佛如來の本願にては、諸行
を以て往生の行とは爲給はず、唯だ念佛の一行を以て往生の正因と爲給ふたに因つて、勝
れし諸行も極樂往生の爲めには少善根にて、唯此の名號を執持する即ち念佛の一行のみ、
多善根にして多福徳たる所以で、元祖大師法然上人の選擇本願念佛集には此義を説明し給
うて『少善根とは多善根に對する言なり、然らば則ち雜善は是れ少善根なり念佛は是れ多
善根なり、故に龍舒の淨土文に云く襄陽石刻の阿彌陀經は乃ち隋の陳仁稜の書する所、字

畫清婉にして人多く慕玩す、一心不亂より下に、専ら名號を持すれば、名を稱するを以ての故に諸罪消滅す、即ち是れ多善根福徳の因縁なりと云ふ、今世の傳本此の二十一字を脱すと、雷だ多少の義有るのみに非ず亦た大小の義有り、謂く雜善は是れ小善根なり、念佛は是れ大善根なり、亦た勝劣の義有り、謂く雜善は是れ劣善根なり、念佛は是れ勝善根なり、其義知るべし」と示してある。

舍利弗我見是利故說此言若有衆生聞是說者應當發願生彼國土

【訓讀】 舍利弗、我れ是利を見るが故に此言を説く、若衆生有て是說を聞かん者は、應當に發願して彼の國土に生るべし。

【和解】 我れとは釋迦牟尼佛の自稱にて、是利とは此經典に説き給ふ所の極樂往生の利益といふ義にて、別しては執持名號の念佛功徳を意味するので、見るとは自證の知見とて佛の自證を以て是を知るとの義にて、我れ釋迦牟尼佛は既に佛の自證を以て、此の念佛の大善根にして多福徳なる是利を知見が故に、此言を説くとて斯く極樂往生を説きて念佛を勧めるのである、されば衆生にして我が此說を聞く者は、當に發願して彼國に生れんことを欣求べしと。

を欣求べしと。

舍利弗如我今者讚歎阿彌陀佛不可思議功德東方亦有阿閼鞞佛須彌相佛大須彌佛須彌光佛妙音佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相徧覆三千大千世界說誠實語

【訓讀】 舍利弗、我今更阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如く、東方にも亦た阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛有する是の如き等の恒河沙數の諸佛各其國に於て、廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説たまふ。

【句義】 阿閼鞞佛とは不動佛と翻譯して、佛身靜寂にして變遷無しとの義を以て名け、須彌相佛とは佛身の容狀須彌山の如しとの意味に因り、大須彌佛とは諸相甚大にして須彌の如くなりとの義、須彌光佛とは身光亦た須彌山に似たるが故に、妙音佛とは佛音清徹微妙にして遠く聞ふるが故に名を得給へりと云ふ、爾れども諸佛の名義は唯是れのみに限らず、尙ほ甚深の意味を有し給ふので、茲には僅かに其一端を示して有るに過ぎぬ、以下の

諸佛も亦其の如くである。

【和解】阿彌陀佛の不可思議功德とは、極樂淨土の莊嚴且つは佛身の光明佛壽の無量を始めとして、一切諸人の往生念佛の利益等を總稱しての功德にて、是等の功德は佛の知見を以てしても、容易く思議べからずとて不可思議と稱し給ふたので、扱て我が迦釋牟尼佛が阿彌陀如來の不可思議功德を讚嘆するが如く、諸佛如來も亦た同様に讚嘆し給ふとて、是より以下に於て六方諸佛の讚嘆を擧げ給ふた、先づ東方世界には阿閼鞞佛及び妙音佛の諸佛が有す、けれども東方諸佛としては唯此の五佛のみならず、此他に尙ほ洹河沙數の諸佛が有すので、洹河沙數とは洹河と云へる河川に在る沙數との意味にて、無量無邊の比例とせられたので、されば東方世界に在る阿閼鞞佛を初めとして、洹河沙數の如き無量の諸佛も、釋迦牟尼佛と同様に念佛功德を讚嘆せんとて、各其國の淨土に於て廣長の舌相を出すとて、各舌相を展たまうて三千大千世界に覆ひ、誠實の言を説き給ふと、誠實の言とは諸佛の言説は眞實にて虚妄が無いとの意味にして、爾も廣長の舌相を出し給ふたは、其の虚妄の無き誠實の言なることを表明されたので、我此の諸佛の言説にして若し誠實ならざれば、此舌相即ち壞爛して再び元に返るまじとの證據を表明たまふたのである。

汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經

【訓讀】汝等衆生、當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【和解】されば諸佛が舌相を展て、表明された誠實の言とは、此の汝等衆生の一段にて稱讚不可思議功德とは、既に釋迦牟尼佛が稱讚られたが如く、我等の諸佛も亦俱に稱讚するは念佛不思議の功德なりとの意味で、不思議功德の念佛なれば、一切諸佛皆俱に其念佛する者をば護念らるべく、其義を説かれた經典なれば、此の阿彌陀經をば一切諸佛所護念する者ば護念らるべく、汝等衆生は皆當に一切諸佛が稱讚して、亦た一切諸佛が護念する、此の經と稱せられて、汝等衆生は皆當に一切諸佛が稱讚して、亦た一切諸佛が護念する、此の阿彌陀經をば信すべしと、阿彌陀經をば信すべしとは、此經典の肝要なる不可思議功德の念佛を信せよとの誠實の言にて、斯く誠實の言を以て諸佛が讚嘆し給ふたは、尋常普通の讚嘆ならず特に舌相を出して證據と爲し、念佛往生の虚妄ならざることを、證明されたる讚嘆なれば、是を諸佛の證據と稱するのである。

舍利弗南方世界有日月燈佛名聞光佛大焰肩佛須彌燈佛無量精進佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相徧

覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經

【訓讀】 舍利弗、南方世界に日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛有す、是の如き等の恒河沙數の諸佛各其國に於て、廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説たまふ、汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信ずべし。

【句義】 日月燈佛とは日光月光燈火の三光が有らゆる闇を照すが如くに、三途の迷暗を照し給ふとの義、名聞光佛とは名聲遠く十方世界に聞えて、佛光も亦た十方を照すとの意味、大焰肩佛とは佛身兩肩の光明殊に勝れ給ふ義、須彌燈佛とは佛光の勝れたること須彌山の光明の如く、無量精進佛とは無量の大悲を以て無量の衆生を濟度し給ふこと、精進にして懈怠無しの義に因つて、名を得たまふた。

【和解】 念佛不思議の功德を讚嘆證明し給ふは、唯だ東方の諸佛のみならず、南方世界

にも日月燈佛及び無量精進佛等の恒河沙數の諸佛有して、各其國に於て舌相を出し、徧く三千大千世界に覆ひ誠實の言を以て、汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信ずべしと、亦た諸共に證明し給ふので、三千大千世界とは有らゆる世界の義にして舌相を出して三千大千世界に覆ふとは、各其國の衆生のみならず有らゆる世界の一切衆生に對して、證明せらるゝ意味である。

舍利弗西方世界有無量壽佛無量相佛無量幢佛大光佛大明佛寶相佛淨光佛有如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相徧覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經

【訓讀】 舍利弗、西方世界に無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛有す、是の如き等の恒河沙數の諸佛各其國に於て、廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説たまふ、汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護

六方諸佛
の證誠其
三
西方世界

念經を信すべし。

【句義】無量相佛とは佛身の相好に無量の徳有るに因り、無量幢佛とは佛徳無量にして高く勝れ給ふこと幢の如しとの義、大光佛とは佛光遍く照し給ふに因つて、大明佛とは佛智の高明なる義に因り、寶相佛とは佛身相好の功徳は寶の如く尊崇すべしとの意味にて、淨光佛とは清淨なる光明を有し給ふとの義を以て、各其の名を得給ふたのである。

【和解】扱亦た西方世界には、無量壽佛及び淨光佛等の恒河沙數の諸佛が有つて、各其國に於て廣長なる舌相を出し、徧く三千大千世界に覆ひ誠實の言を以て、是の稱讚不可思議功徳一切諸佛所護念經を信すべしと、他の諸佛と同様に亦是れ證明し給ふのである、然るに此の西方世界に列名された諸佛の最初に、無量壽佛といふのが有るので、此の無量壽佛は極樂淨土の無量壽佛即ち阿彌陀如來と解する説と、果して是を阿彌陀如來なりとすれば、自己の功徳と自己の念佛を證明せらるゝので、それでは所謂る自畫自讚で自己證明とも云ふべきものなれば、恐らく阿彌陀如來で無く同名異體の他佛で有らうと云ふ説と、二説が有つて各一理を存するので、未だ何とも決し難い、けれども是を極樂淨土の無量壽佛として、自己の功徳を自讚し給ふとしても、其自讚し給ふのは普通の利己的自讚なら

すして、釋迦牟尼佛の所説に對して證明し給ふ意味で有るから、此の自畫自讚が有つてこそ、釋迦牟尼佛の所説をして、更に一層重からしむる所以で有るとも云ふことを得べく、爾れば是をば阿彌陀如來の自讚としても、何等の差支が無きのみならず、却て必要が有るのである。

舍利弗北方世界有焰肩佛最勝音佛難沮佛日生佛網明佛
如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相徧覆三千大千
世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功徳一切諸
佛所護念經

【訓讀】舍利弗、北方世界に焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛
網明佛有す、是の如き等の恒河沙數の諸佛各其國に於て、廣長の舌
相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説たまふ、汝等衆
生當に是の稱讚不可思議功徳一切諸佛所護念經を信すべし。

【句義】焰肩佛の肩とは雙肩の意味にして、雙肩とは大悲と智慧との兩光明を有し給ふ

を、左右兩肩に比喩られ、最勝音佛とは音聲美妙にして最勝なるに因り、難沮佛の沮とは沮害の義なりとて、佛德絶妙にして何なる者も沮害すること難しとの意味、日生佛の日生とは日出の意味にて、日出て諸闇を破るが如く、一切衆生の迷暗を覺し給ふ義に因り、網明佛とは大悲の網を以て漏らさず衆生を救済し給ふ故に、各其の名を得られたのである。

【和解】 亦た北方世界には、焰肩佛網明佛等の恒河沙數の諸佛有つて、各其國に於て廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界に覆ひ誠實の言を以て、汝等衆生是の稱讚不可思議功德所護念經を信すべしと、證明讚嘆し給ふのである。

舍利弗下方世界有師子佛名聞佛名光佛達磨佛法幢佛持法佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相徧覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經

【訓讀】 舍利弗、下方世界に師子佛、名聞佛、名光佛、達磨佛、法幢佛、持法佛有す、是の如き等の恒河沙數の諸佛各其國に於て、

廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説たまふ汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【句義】 師子佛とは佛德の勝れたるを獅子の獸中の王たるに比喩られ、名聞佛とは名聲十方に超絶せるに因り、名光佛とは名を聞き光を見る者は皆な覺悟を得るが故に、達磨佛の達磨とは法と翻譯して、一切の法を以て衆生を教化せらるゝ義、法幢佛とは法身の高勝なること幢の如くなりとの義に因り、持法佛とは過去の法を維持して未來に傳へ給ふとの義を以て、各其名を得給ふたのである。

【和解】 亦た下方世界には師子佛及び持法佛等の恒河沙數の諸佛が有つて、各其國に於て廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を以て汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべしと、證明し給ふのである。

舍利弗上方世界有梵音佛宿王佛香上佛香光佛大焰肩佛雜色寶華嚴身佛娑羅樹王佛寶華德佛見一切義佛如須彌山佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相徧覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一

切諸佛所護念經

【訓讀】 舍利弗、上方世界に梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛有す、是の如き等の恒河沙數の諸佛、各其國に於て廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を説たまふ、汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

【句義】 梵音佛の梵とは清淨の意味にて、清淨なる法音を有せらるゝ義、宿王佛の宿王とは星宿の王たる月の義にて、月の星宿に王たる如く佛德衆聖に勝れたりとの意味、香上佛とは佛德は香の如く衆聖に超絶せる義、香光佛とは佛德は香の如く、佛智の光明亦た勝れたりとの義、大焰肩佛とは南方世界の大焰肩佛と同名異體にして、雜色寶華嚴身佛とは萬行を修し給ふた因を以て、法身の果を嚴るとの義、娑羅樹王佛とは娑羅樹の冬夏に色を變せざるが如く、佛身にも變易無しとの義に因り、寶華德佛とは萬德を有し給ふこと寶華の如しとの意味、見一切義佛とは五智を以て一切の義を知見し給ふ義、如須彌山佛とは須彌山が衆山の王たる如く、佛德も亦た超絶せりとの義に因つて、各其の名を得給ふたの

である。

【和解】 亦た上方世界には、梵音佛及び如須彌山佛等の恒河沙數の諸佛が有つて、各其國に於て廣長の舌相を出し徧く三千大千世界に覆ひて、誠實の言を以て、汝等衆生是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべしと、斯く六方恒沙の諸佛が皆な釋迦牟尼佛の讚嘆の如くに、念佛功德を證明し給ふたに就ても、其念佛を唱ふる者は、唯だ阿彌陀如来の本願と釋迦牟尼佛の本懷とに順するのみならず、亦此の六方恒沙諸佛の本意にも適へる義を信せねばならぬ。

舍利弗於汝意云何何故名爲一切諸佛所護念經舍利弗若有善男子善女人聞是諸佛所說名及經名者是諸善男子善女人皆爲一切諸佛共所護念皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提

【訓讀】 舍利弗汝が意に於て云何ぞ、何が故に名けて一切諸佛所護念經を爲すこ、舍利弗若し善男子善女人有て、是の諸佛所說の名

及び經の名を聞く者は、是の諸の善男子善女人、皆な一切諸佛の爲に共に護念せられて、皆な阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを待。

【和解】 既に六方恒沙諸佛の證誠を説き終り給ふた釋迦牟尼佛は、舍利弗尊者の意を察して、更に何故諸佛が讚嘆して此經典をば所護念經と名けられたかを説明し給ふので、されば舍利弗汝が意に於て、何故是を一切諸佛所護念經と名けるかと言は、若し善男子善女人にして、是の諸佛所説の名及び經の名とて諸佛所説の名とは諸佛が讚嘆證明された阿彌陀如來の名號にて、經の名とは此の阿彌陀經を意味するので、此の經典の所説を信じて彌陀の名號を念する者、即ち念佛を唱ふる者は、阿彌陀如來の光明攝取の護念を受けるのみならず、一切諸佛も皆共に護念せられて、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得と罪を滅して善を生じ有らゆる障礙有ること無く、頓ては極樂淨土へ往生して佛道増進するに因つて、所護念經と名けらる。

是故舍利弗汝等皆當信受我語及諸佛所説

【訓讀】 是故に舍利弗、汝等當に我語及び諸佛の所説を信受すべ

し。

【和解】 是故にとは斯く一切諸佛に護念せらるゝ故にとの意味にて、阿彌陀如來の名號を唱ふる者は、斯く一切諸佛にも護念せらるゝに因つて、舍利弗及び汝等とて、茲に汝等と呼び給ふたのは、舍利弗尊者と此會座に在る其他の大衆のみならず、末代滅後の吾人も籠め給ふたので、舍利弗及び其他の大衆と、我が滅後に於ける一切諸人に至るまで、我語及び諸佛の所説を信受すべしと、我語とは釋迦牟尼佛の所説にて、諸佛の所説とは一切諸佛の證明で、我が釋迦牟尼佛の所説を信じ、亦た諸佛の證明を信じて、疑ふ事無く念佛すべしとの勧めである。

舍利弗若有人已發願今發願當發願欲生阿彌陀佛國者是諸人等皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提於彼國土若已生若今生若當生是故舍利弗諸善男子善女人若有信者應當發願生彼國土

【訓讀】 舍利弗若人有て、已に發願し、今發願し、當に發願して

阿彌陀佛の國に生れんと欲する者は、是の諸の人等皆な阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得て、彼の國土に於て若は已に生じ、若は今生じ、若は當に生ず、是故に舍利弗諸の善男子善女人、若し信ずること有ん者は、應當に發願して彼の國土に生るべし。

【和解】 前段に於て我語及び諸佛の所説を信すべしと、念佛功德と極樂往生の虛妄ならざる義を信せよと勸め給ふたに因つて、當段にては其信念の發現として、往生を願ひ求むる心を發すべき理を示し給ふので、若し人有つて已に發願すとは、此の釋迦牟尼佛の所説の無き以前の人にて、未だ此の經典を説き給はぬ以前の時にても、已に往生を願ふ心を發して念佛する人はとの意味にて、今ま發願すとは今現在に此の經説を聞きて發願する人を云ひ、當に發願すとは滅後末代の吾人にして發願する者を稱し給ふので、斯く已に發願し今ま發願し、當に發願して念佛する者は、何れも皆な阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得と、其信念も其修行も退轉せずして、已に發願せる者は已に往生し、今ま發願する者は今現在に往生し、當に發願する者は當來必ず往生するのである、是故に善男子善女人にして、信すること有らん者はと、我語及び諸佛の所説を信する者は、應當に發願してと

極樂往生を願ふ心を發して、彼國に生るべしと發願心を勸め給ふたのである。

舍利弗如我今者稱讚諸佛不可思議功德彼諸佛等亦稱說我不可思議功德而作是言釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事能於娑婆國土五濁惡世劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁中得阿耨多羅三藐三菩提爲諸衆生說是一切世間難信之法

【訓讀】 舍利弗、我今ま諸佛の不可思議功德を稱讚するが如く、彼の諸佛等も亦我が不可思議功德を稱説して、是言を作たまはく、釋迦牟尼佛能く甚難希有の事を爲て、能く娑婆國土五濁惡世の、劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に是の一切世間難信の法を説こ。

【句義】 娑婆國土とは今ま吾人が現在せる此國土を稱するので、娑婆とは梵語にて堪忍と翻譯せられ、有らゆる苦惱を堪へ忍ぶべき國土といふ意味、五濁惡世とは其娑婆國土に於ける現在の世の中には、五の濁りありとの義にて、五の濁りとは劫濁見濁煩惱濁衆生

濁命濁の五にして、劫濁とは劫波亦は時分とも稱し、今ま現在の世の中は時既に澆季となりて、善事少くして唯だ諸惡のみ年々に増加する惡時世なりとの義で、見濁とは正信正智の人稀れにて、邪見無信の輩多きを云ひ、煩惱濁とは貪欲瞋恚の有らゆる煩惱多き時なる義、衆生濁とは善人少く惡人多き意味にて、命濁とは其衆生の生命が長壽の人少くして多くは短命亦は横死の絶えぬ時なるを云ふ。

【和解】 我れとは釋迦牟尼佛の自稱にして、諸佛の不可思議功德とは六方諸佛の證明を意味するので、前段に於て信受と發願を勸め給ふた釋迦牟尼佛は、尙ほ其結勸として我今ま諸佛の不可思議功德を稱讚して、六方諸佛の讚嘆を説きたる如くに、彼の諸佛も亦た我が不可思議功德を稱説して是言を作たまはくと、是言とは釋迦牟尼佛能く甚難希有の事を爲すとの諸佛の稱説にて、甚難希有とは作し難きを作されたは、最も希有ことなりとの意味で、釋迦牟尼佛が此の娑婆世界の爾も五濁惡世の劫濁見濁煩惱濁と、惡時惡見惡煩惱惡邪無信の人多き中に於て、阿耨多羅三藐三菩提の無上正等菩提を得て成佛せられ、諸の衆生の爲めに是の一切世間難信の法を説くと、難信の法とは念佛往生の法にして、五濁惡世の惡邪無信の人にしては信することを爲し難き、念佛往生の法を説き給ふたは、甚だ希有なる事であると。

舍利弗當知我於五濁惡世行此難事得阿耨多羅三藐三菩提爲一切世間說此難信之法是爲甚難
【訓讀】 舍利弗當に知べし、我れ五濁惡世に於て此の難事を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切世間の爲に此の難信の法を説く是を甚難と爲す。

【和解】 されば舍利弗我れ釋迦牟尼佛が、一切諸佛の稱説せらるゝ如く、斯かる五濁惡世に於て此の難事を行じてと、難事とは前段の甚難希有の事を意味し給ふので、我れ此の五濁惡世に於て難作の行を作し、無上正等菩提を得て、一切世間の有らゆる衆生の爲めに、此の難信の法を説くと念佛往生の法を説くは、如何にも諸佛の稱説せらるゝ如く、是を甚難とするので有つて、爾も甚難なる難信の法を説きは、普く衆生を救濟すべく阿彌陀如来の本願を示さんとの、是我が出世の本懷なりと、是を以て此經典の結勸とし給ふのである。

斯く難信と甚難とを以て、此經典の結勸とし給ふたは、大に意義有ることにして、由來念佛往生とは其機を云へば五逆十惡の人をも漏さず、其行を云へば一念十念にても尙ほ攝

取べく、如何に平等無差別なる他力本願の然らしむる所なりとは云ひ乍ら、僅かに口稱の念佛にて、三垢の煩惱自然に滅して身心歡喜の生活を爲し、命終れば其儘に最勝絶妙なる極樂淨土に往生して、不退の證を得らるゝのは、是に過ぎたる小因大果有ること無く、瓦礫を變じて黄金と成すが如く有るから、如何にも難信の法にして、爾も五濁惡世に於て阿彌陀如來の現在と極樂淨土の實在をも疑ふ人の多き中にて、其難信の法をして一切世間に信せしめんとて、或は我見是利とも説き、亦は諸佛の證誠を説き給ふたは、如何にも甚難希有の事にして、最も慇懃なる大悲の本懷なる意義を現はさんとして、是を所説の結勸とし給ふたので、即ち念佛不思議の功德をば、重ねて茲に示し給ふたのである。

歡喜信受
作禮而去

佛說此經已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿修羅等聞佛所說歡喜信受作禮而去

【訓讀】 佛此經を説已りたまふに、舍利弗及び諸の比丘、一切世間天人阿修羅等、佛の所説を聞て歡喜信受して、禮を作て去き。

【句義】 比丘とは一千二百五十人の佛弟子、及び其他の聲聞羅漢にて、天人とは梵天帝釋等の諸天と人間との意味、阿修羅は梵語にて非天と翻譯せられ、樂を受くるは天人の如

くなれども、其形は鬼類に似たる衆類を云ふ。

【和解】 斯く此經典を説き已り給ふたので、其坐に在りし佛弟子は云ふに及ばず、一切世間の天人阿修羅、及び許多の菩薩衆までも、佛の所説を聞き奉りて、皆各に歡喜信受と、聞き難き淨土の法を聞きしを歡喜び、亦た難信の念佛功德を、既に信受することを得たに因つて、法悅感謝の至誠を表し、佛を禮して而も去りきと。

常作天樂

源俊賴朝臣

笛の音に琴のしらへの通へるは

たなひく雲に風やふくらん

六方護念

信生法師

置く露の染め初めける言の葉に

四方の時雨や色をそふらん

大正十一年五月十一日印刷
大正十一年五月十八日發行

淨土三部經和解附

定價金五圓

著者 川合梁定

發行者 京都下京區下寺町五條南五五三 楳村諒善

印刷者 京都市西洞院七條下ル 村上勘兵衛

印刷所 京都市西洞院七條下ル 内外出版株式會社印刷部

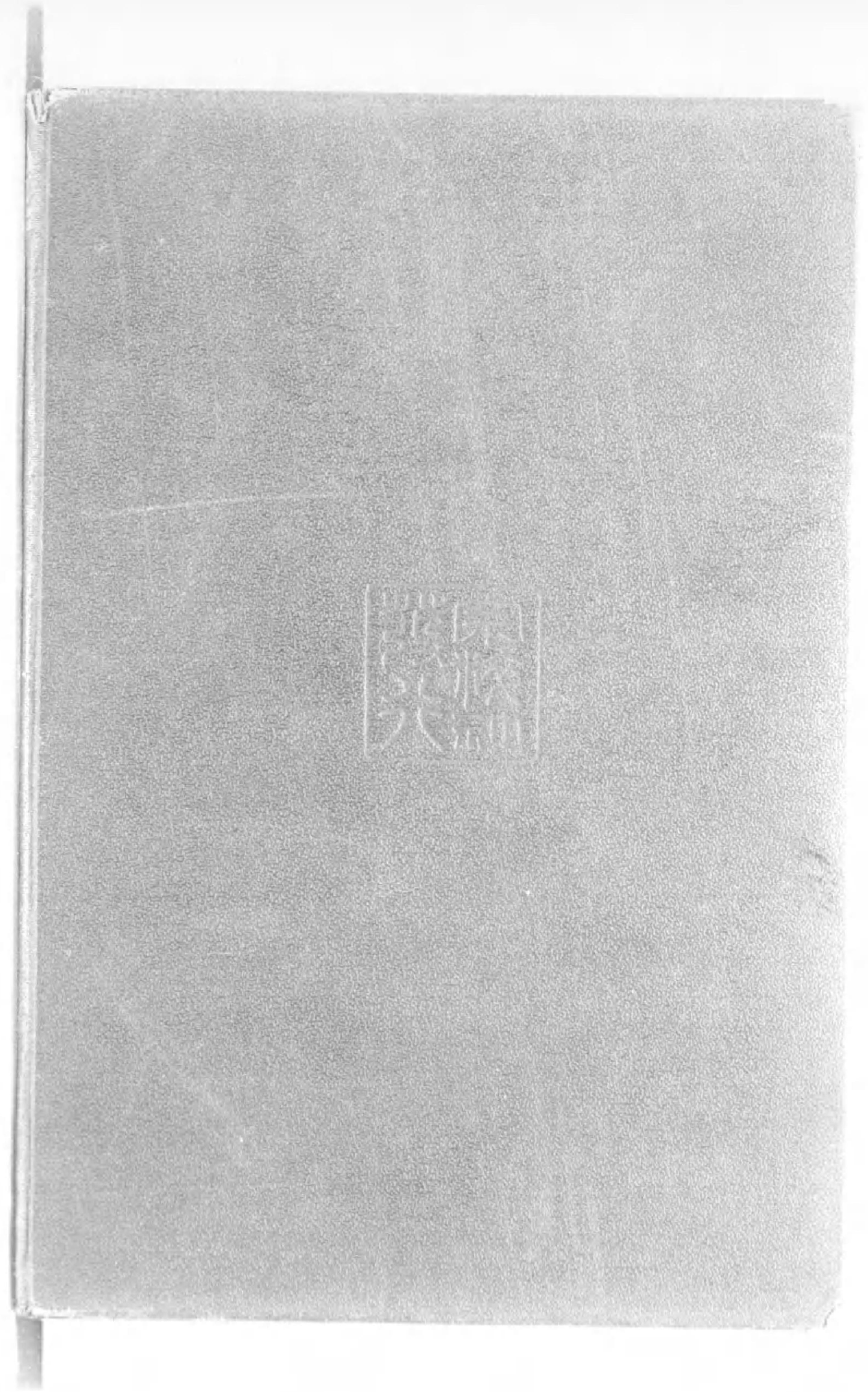
不許複製

發行所

京都下京區下寺町
五條南五五三

宗粹社

324
672



終

